

令和元年度（第58回）農林水産祭
「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（地方開催）

主催：農林水産省、公益財団法人日本農林漁業振興会

—業績発表及びディスカッションの内容—

第23回優秀農林水産業者に係るシンポジウム

【マガキの適正養殖を目指して（過密養殖からの脱却）】

開催日時 令和2年2月18（火）13時30分～16時00分
場 所 江陽グランドホテル 4F 銀河の間
宮城県仙台市青葉区本町2-3-1

第24回優秀農林水産業者に係るシンポジウム

【進取の精神で取り組むむらづくり】

開催日時 令和2年年2月26（水）13時30分～16時
場 所 ホテルサンパレス球陽館 2F パレスコート
沖縄県那覇市久茂地2-5-1

令和2年5月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

発行にあたって

農林水産祭事業は、農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から特に優秀な農林水産業者を選び、その業績を顕彰し、業績内容について広く普及を図ることを目的の一つとしています。

このシンポジウムは、農林水産祭事業の一環として、平成23年度から実施しており、令和元年度につきましては東京都内及び2か所の地方都市において開催しました。

本書は、去る令和2年2月18日（火）、宮城県仙台市の江陽グランドホテルにおいて、約80名の参加の下「マガキの適正養殖を目指して（過密養殖からの脱却）」をテーマに開催された「第23回優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換等の内容及び令和2年2月26日（水）、沖縄県那覇市のホテルサンパレス球陽館において、約70名の参加の下「進取の精神で取り組むむらづくり」をテーマに開催された「第24回優秀農林水産業者に係るシンポジウム」の業績発表、意見交換等の内容を一冊に取りまとめたものです。

最後に、今回開催にあたり、多大なるご支援とご協力をいただきました関係各位に対し、深甚なる謝意を表する次第です。

令和2年5月

公益財団法人 日本農林漁業振興会

優秀農林水産業者に係るシンポジウム

—宮城県仙台市（2／18）、沖縄県那覇市（2／26）—

目 次

第23回優秀農林水産業者に係るシンポジウム	頁
シンポジウムスケジュール	2
出席者名簿	3
天皇杯受賞者の業績概要	4
シンポジウムの記録内容	5
第24回優秀農林水産業者に係るシンポジウム	
シンポジウムスケジュール	50
出席者名簿	51
天皇杯受賞者の業績概要	52
シンポジウムの記録内容	53

令和元年度（第58回）農林水産祭
第23回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【マガキの適正養殖を目指して（過密養殖からの脱却）】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時	令和2年2月18日（火）13時30分～16時00分
場所	江陽グランドホテル 4階 銀河の間 宮城県仙台市青葉区本町2-3-1
主催	農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和元年度（第58回）農林水産祭
「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【マガキの適正養殖を目指して（過密養殖からの脱却）】

《スケジュール》

13:30~16:00

(敬称略)

- 1 開 会 (13:30)
公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 小栗 邦夫
- 2 挨拶 水産庁増殖推進部研究指導課長 高瀬 美和子
宮城県水産林政部長 小林 徳光
- 3 選賞審査報告 農林水産祭中央審査委員会水産分科会主査 生田 和正
(水産研究・教育機構瀬戸内海区水産研究所長)
- 4 業績発表 令和元年度水産部門天皇杯受賞者 後藤 清広
(宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所
カキ部会 部会長)
- ・・・休 憩 (14:30~14:40) ・・・
- 5 ディスカッション (14:40)
(登壇者)
 - ・コーディネーター
生田 和正 (3に同じ)
 - ・業績発表者
後藤 清広 (4に同じ)
 - ・コメンテーター
神山 孝史 (国立研究開発法人水産研究・教育機構本部研究推進部長)
佐々木 貴文 (農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員
(北海道大学大学院水産科学研究院准教授))
小野寺 淳一 (宮城県気仙沼地方振興事務所水産漁港部長)
- (内容)
 - ・意見交換、質疑応答
 - ・総括
- 6 閉 会 (16:00)

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（第23回）出席者

R2.2.18（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	後藤 清広	令和元年度農林水産祭水産部門天皇杯受賞者 宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所力キ部会 部会長
コーディネーター 及び選賞審査報告	生田 和正	農林水産祭中央審査委員会水産分科会 主査 （国立研究開発法人水産研究・教育機構 瀬戸内海区水産研究所所長）
コメンテーター	神山 孝史	国立研究開発法人水産研究・教育機構 本部研究推進部長
コメンテーター	佐々木 貴文	農林水産祭中央審査委員会経営分科会専門委員 （北海道大学大学院水産科学研究院准教授）
コメンテーター	小野寺 淳一	宮城県気仙沼地方振興事務所水産漁港部長
挨 拶	高瀬 美和子	水産庁増殖推進部研究指導課長
	小林 徳光	宮城県水産林政部長
司会・進行	小栗 邦夫	（公財）日本農林漁業振興会 常務理事

水産部門

出品財 技術・ほ場（資源管理・資源増殖）

宮城県漁業協同組合志津川支所
戸倉出張所カキ部会

宮城県本吉郡南三陸町



1 地域の概要

宮城県南三陸町は、眼前に太平洋に口を開く形の志津川湾が広がっている。湾内には、多種多様な魚族や海藻が生息していることから、漁業にとって大変優れた地域で、カキやワカメ、ギンザケなどの養殖業も盛んに行われている。また、採介藻漁業などと併せて豊かな海が漁業者の暮らしを支えている。

2 受賞者の取組の経過と経営の現況

戸倉出張所カキ部会は昭和 30 年に発足し、東日本大震災前は、78 経営体が参加していたが、平成 29 年現在は、34 経営体に減少している。同カキ部会では、生産技術の向上や品質の改善、販売促進などの方策を活発に話し合われている。

3 受賞者の特色

（1）過密養殖からの脱却の取組と経営改善の効果

東日本大震災を契機に過密養殖の状態であったカキの養殖体制から脱却するため、同部会で年間 100 回にも及ぶ話し合いを重ね、養殖施設（筏）の間隔を広くすることとした。養殖施設の筏の間隔を広くし、台数を削減した結果、養殖期間の劇的な短縮と品質の向上に繋がり、1 経営体当たりの年間の生産量及び生産金額が向上した。

また、養殖施設の台数削減によって、経費の低減及び労働時間の短縮が図られ、養殖カキのより丁寧な管理が可能となった。これらの取組みにより、都市部に移住していた子弟が U ターンしてくるなど、後継者の確保にも繋がった。

（2）持続可能な養殖業の追及に向けた取組

同部会では、養殖の国際的エコラベルである ASC 認証の取得に向けてチャレンジし、環境負荷の低下や持続可能な養殖業の姿を明確に示すことにより、平成 28 年に日本で初めて認証された。

4 普及性と今後の発展方向

養殖施設の見直しというリスク要因を乗り越え、経営改善と後継者確保に繋げた成果は、これからの持続可能な養殖業の姿を指し示す羅針盤になり得るものである。同様の困難な状況にある地域に多くの示唆をもたらすモデルとなる取り組みである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

ただ今から「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」を開催いたします。

私は、農林水産祭事業の事務局を担当しております、日本農林漁業振興会の常務理事の小栗と申します。よろしくお願いいたします。

お寒い中、本日は多くの方にご参加いただきまして、まことにありがとうございます。

このシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様方に広くお伝えすることにより、今後の農林水産業の発展の一助になればと、例年開催しているものでございます。

農林水産祭は、昭和37年から実施しておりまして、今年で58回目を迎えます伝統ある行事でございます。このうち、表彰事業は7つの部門に分かれております。過去1年間で各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞しました点数が500点近くございますが、この500点近い出品財の中から厳正な審査を経まして、天皇杯、内閣総理大臣賞、私どもの振興会長賞、いわゆる三賞を授与しているものでございます。

このうち、特に天皇杯につきましては、我が国で天皇杯というものが実は30下賜されておりまして、農林水産祭の7つの部門以外は全てスポーツ分野でございまして、例えば、正月の天皇杯サッカーなどが有名でございますが、1部門で7つの天皇杯をいただいておりますのは農林水産業だけでございまして、そういった意味でも、ご皇室の農林水産分野にかけます熱い思いを感じて、非常にありがたく思っているところでございます。

今年度も、昨年11月の大嘗祭の日に東京の明治神宮会館で授賞式が行われ、その後、天皇杯の受賞者は、年明け1月に、皇居におきまして、新たな天皇皇后両陛下に拝謁、業績説明をしていただいたところでございます。

本日は、水産部門で天皇杯を受賞されました、宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会の後藤部会長にお越しいただきました。改めてお話を伺うとともに、学識経験者の方々と意見交換をお願いしたところでございます。受賞後、各方面から視察など、大変お忙しい中に、快くお引き受けいただきました。改めまして、お祝いと御礼を申し上げる次第でございます。

それでは、本日は、農林水産省からは水産庁増殖推進部研究指導課の高瀬課長に参加いただいております。農林水産省を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】農林水産省水産庁増殖推進部研究指導課長 高瀬 美和子

農林水産省水産庁の研究指導課長の高瀬と申します。よろしくお願いいたします。

本日ここに、令和元年度（第58回）農林水産祭優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会の皆様が、令和元年度農林水産祭の水産部門におきまして天皇杯を受賞されましたことに対しまして、心からお祝いを申し上げます。おめでとうございます。

宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会の皆様におかれましては、東日本大震災を契機に、それまで過密状態にあったカキの養殖体制から脱却するための取組みによる経営の改善、それから、持続可能な養殖業に向けた取組み、これが高く評価をされまして、天皇杯を受賞されました。

養殖施設の設置数の削減というリスクを乗り越えて経営改善につなげた成果、これは、これからの持続可能な養殖業の方向性を示す羅針盤になり得るものであり、同様な状況にある地域の多くの方々に示唆をもたらすモデルとなる取組みであると確信しております。

私ども水産庁研究指導課では、「がんばる漁業」、「がんばる養殖」、「もうかる漁業」、「もうかる養殖」なども担当しております。「がんばる養殖」は、震災からの復興の過程で、協業化であるとか、コストの削減であるとか、生産性の向上という取組みから復興につなげていただく事業であります。このような成功の事例があることは、事業に携わる者としても大きな励みとなります。本当におめでとうございます。

我が国の水産業を取り巻く環境は、大きく変化をしておりますが、水産庁では、水産資源の維持、回復を図るとともに、漁業者、養殖業者の皆様が将来展望を持って積極的に経営の発展に取り組むことができるようにするため、水産政策の改革に取り組んでいるところであります。今後、水産改革を着実に進め、我が国の水産業がやりがいのある魅力的な産業となり、漁村の持続的な発展が実現していくように努めてまいりたい所存であります。このような持続可能な養殖の取組みは、水産業の成長産業化を進める上で非常に大きな力になるものと期待をしているところであります。

最後になりますが、本シンポジウムの開催に当たりまして、宮城県をはじめ、ご協力いただきました関係機関、団体の皆様方に感謝を申し上げますとともに、本日ご参集の皆様方のご発展、ご健勝を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

本日は、まことにおめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

続きまして、本日の開催に当たりましては、地元、宮城県の関係者の方々に大変お世話になっております。この場をお借りして、厚く御礼を申し上げます。

本日は、宮城県からは、水産林政部の小林部長に参加いただいております。県を代表してご挨拶をいただきます。

【挨拶】 宮城県水産林政部長 小林 徳光

ご紹介いただきました水産林政部の小林でございます。令和元年度農林水産祭優秀農林水産者に係るシンポジウムの開催に当たり、一言ご挨拶を申し上げます。

はじめに、令和元年度の農林水産祭におきまして、宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会の皆様が、めでたく天皇杯を受賞されましたことに対しまして、心からお祝いを申し上げます。また、皆様方におかれましては、日ごろから本県の水産業の振興に多大なるご理解とご協力を賜っておりますことを改めて感謝申し上げます。

さて、東日本大震災から9年がたとうとしているところでございますが、先ほど、高瀬課長様からもお話がございましたように、戸倉出張所のカキ部会の皆様でございますが、南三陸町、本当に壊滅的な被害を受けまして、漁船、養殖施設も多くが失われてしまうという中において、皆様方、震災からわずか半年後の平成23年8月には、カキの養殖の復旧に向けて試験養殖を開始して、養殖密度を下げることで震災前に比べてはるかに短期間でカキが成長することを確認され、その上で、まだ漁業活動も再開していない状況で、かなり混乱している状況の中で、その結果をもとに、養殖施設の削減に取り組まれてきたわけでございます。被災程度ですとか、経営スタイル、さまざま異なる環境の中で、部会の皆様の意見を取りまとめることは、相当のご苦勞があったのではないかなと思っております。改めて、今回の業績と、後藤部会長をはじめとする関係者の皆様方のご努力に対し、経緯を表す次第でございます。

さらに、部会の皆様、持続的な養殖を目指した新たな取組みにも積極果敢に取り組まれまして、環境や地域社会に配慮した養殖業の国際認証でございますASC認証についても、平成28年に日本で初めて取得されております。

戸倉のカキ部会の皆様が活動している南三陸町でございますが、実は森林分野においても持続可能な森林管理の国際認証であるF S C認証を取得してございまして、山と海の2つの国際認証を取得したのは、日本で初めての町でございます。海や山の恵みに感謝して共生していくという考え方が地域の中に根ざしている町だからこそ、このような成果が出せたのではないかなと考えてございます。

本日のシンポジウムでございますが、今回の業績をより広く普及することを目的に開催されると伺ってございます。水産業に携わる方々全てが目指す目標である持続可能な水産業の実現に向けまして、本日のシンポジウムが各地域での今後の取組みの参考になるのではないかなと考えてございます。

結びになりますが、シンポジウムの開催にご尽力をいただきました農林水産省様、そして、公益財団法人日本農林漁業振興会の皆様方、さらには、後藤会長様に改めて感謝申し上げますとともに、本日のご参会の皆様のご健勝を祈念いたしまして、簡単ではございますが、挨拶とさせていただきます。

本日はおめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。

それでは、これから議事に入ります。

最初は、選賞審査報告でございます。

ご報告は、農林水産祭中央審査委員会水産分科会主査であります、水産研究教育機構瀬戸内海区水産研究所の生田所長からお願いいたします。

【選賞審査報告】 農林水産祭中央審査委員会水産分科会主査 生田 和正
(国立研究開発法人水産研究・教育機構
瀬戸内海区水産研究所長)

ご紹介ありがとうございました。農林水産祭中央審査委員会の水産分科会の主査を務めさせていただいている生田と申します。よろしくお願いいたします。

私から、今回、優秀農林水産業者に係るシンポジウムにおきまして、ご発表なされます、マガキの適正養殖を目指した宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所の取組みにつきまして、どのようにして天皇杯という栄えある賞を獲得されたかについてご説明したいと思います。

農林水産祭につきましては深くご存じない方々もいらっしゃると思いますので、私から

少し詳しくご説明申し上げます。

初めに小栗常務からもご説明がございましたように、農林水産祭、今年で第58回を迎えます、非常に伝統のある、歴史のあるイベントでございます。その中で、7つの部門がございます。農産・蚕糸部門、園芸部門、畜産部門、水産部門、林産部門、多角化経営部門、むらづくり部門という部門です。それから、最近つくられました、女性の活躍という部門がもう一つ加わっておりますが、天皇杯が設定されていますのが、この7つの部門でございます。

受賞区分といたしましては、天皇杯が最も優秀だった取組に対して贈られる賞でございます。それに引き続きまして、優秀な賞につきましては、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞という形で賞が選定されます。

今回の58回の農林水産祭の選賞がどのようにして選ばれたかにつきましては、毎年、同様な選賞の経過をたどるわけですが、農林水産祭に加盟している各種の表彰行事がございます、その中で農林水産大臣賞を取った、先ほど小栗様のほうから500弱という話でございましたが、そういった出品財の中に水産部門の審査対象種が38点ございました。その中には加工品であるとか、錦鯉だとか、真珠とか、産物が含まれます。それから、技術・ほ場の改善の取組が3件、これは、今回の戸倉の取組も含まれておりますが、漁協さんであるとか漁業者の取組についてのものでございます。それから、経営の改善について審査されるものが、今回の場合は3点ということでございます。

その中から、まず、昨年の7月に中央審査会が開かれた後、水産分科会が開かれまして、この一番下に書かれていらっしゃいます専門委員という学識経験者によって、これらの出品財の中からよりすぐりまして、候補が選ばれました。さらに、その候補の中から、皆さんで投票して、最終的に3つの賞の候補を選定するということになります。

中央審査委員会は私が主査を務めさせていただいておりますが、あと2人ございまして、

【農林水産祭の趣旨】

国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業者の技術改善及び経営発展の意欲を高めるため、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会の共催により昭和37年から実施。

【農林水産祭選賞部門】

①農産・蚕糸部門 ②園芸部門 ③畜産部門 ④水産部門
⑤林産部門 ⑥多角化経営部門 ⑦むらづくり部門
*女性の活躍

【授賞区分】

天皇杯
内閣総理大臣賞
日本農林漁業振興会会長賞

【第58回農林水産祭選賞経過】

- ・選賞対象
平成30年8月～令和元年6月の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞した400超の出品財
うち、水産部門の審査対象数38点（産物32、技術ほ場3、経営3）
- ・選賞経過
▶令和元年7月1日 第1回中央審査委員会
▶令和元年7月23日 第1回水産分科会にて書類選考
現地調査3候補の選定（水産加工品とそれ以外）
▶令和元年8月中 現地審査
▶令和元年9月13日 第2回水産分科会にて三賞選考
▶令和元年10月18日 第2回中央審査委員会で三賞決定
- ・選考委員（水産分科会）
<委員>
生田和正【主査】（水産研究・教育機構） 東海 正（東京海洋大学）
山下東子（大東文化大学）
<専門委員>
荒木恵美子（日本食品衛生協会） 木上正士（大日本水産会）
佐々木真文（北海道大学） 中原尚知（東京海洋大学）
村田裕子（水産研究・教育機構） 山口敦子（長崎大学）

1人は、東京海洋大学の東海正副学長、大東文化大学の山下東子教授で、山下先生は、水産庁の水産政策審議会の企画部会の部会長も務めていらっしゃいます。

こういった人たちの中で候補を絞って、最終的には8月に1カ月かけて現地調査を行いました。日本全国に三賞候補が散らばっておりますので、これがなかなか大変ですが、台風とかにもたたられながら、皆様のご協力をいただいて、現地を調査して、今回の志津川のほうにも出向きまして、さまざまな取組みについてお話を伺ったところでございます。

それらの調査結果を持ち帰りまして、第2回の水産分科会が9月にございましたが、そこで三賞を決定したということになります。そして、10月18日に中央審査委員会で最終的にこの三賞が決定されたということになります。その後、例年は11月23日の新嘗祭の日、今年は天皇陛下の即位の関係で少し早まりましたが、11月14日に明治神宮で表彰式が行われまして、今年の1月に後藤部会長様が宮中で両陛下に成果をご説明されたと伺っております。

この審査のポイントですが、天皇杯という非常に格式の高い賞でございますので、さまざまな分野から専門委員、主査を含めた中央委員の中で審査を行いました。

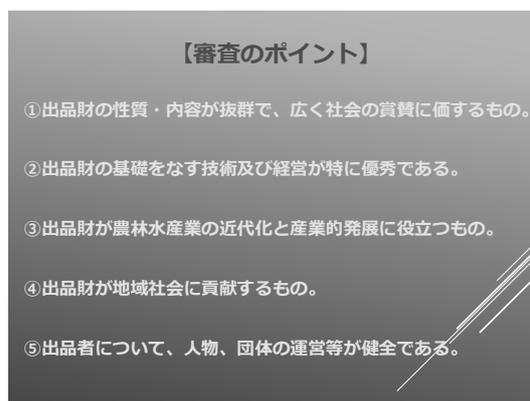
そのポイントとしましては、まず、出品財の性質・内容が抜群で、社会の賞賛に値するもの。つまり、単にすばらしいものであるだけ

ではなくて、誰が見てもやはりこれはすばらしいよねと言われるようなものであるということですね。

それから、出品財の基礎をなす技術及び経営が特に優秀であるということで、今回の戸倉の取組みは、科学的な技術に裏づけられた過密養殖からの脱却であり、それによって非常に経営がよくなっていると、そういったことが非常に優秀であると認められました。

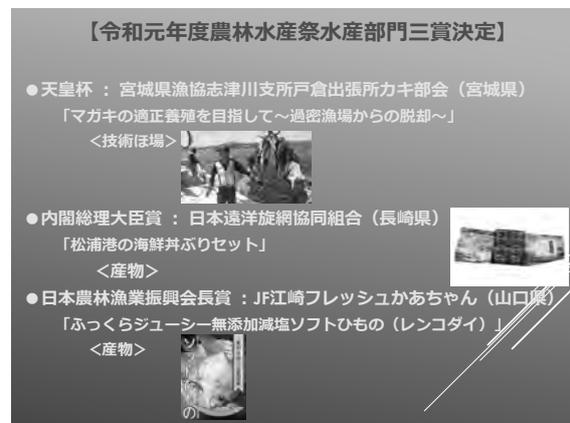
それから、出品財が農林水産業の近代化と産業発展に役立つということで、先ほど水産庁研究指導課長からもご挨拶がありましたが、今後の日本の沿岸のカキ養殖であるとか、さまざまな水産業の経営に役に立つものであると皆さんが判断いたしました。

それから、出品財が地域社会に貢献するもの、つまり日本全国の役に立つのだけれど、地域、南三陸町の漁業、沿岸漁業、養殖業にも貢献しているということが明らかになったわけです。



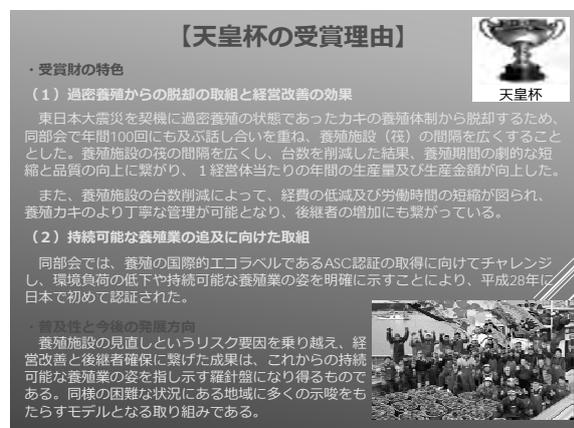
そして、出品者についても、人物や団体の運営等が健全であるということで、このような広いさまざまな角度から検討した結果、今回の天皇杯の受賞に至ったということになります。

今回選ばれました天皇杯は、宮城県漁協の志津川支所戸倉出張所のカキ部会の取組で、先ほどからご紹介のあるものでございますが、ちなみに、内閣総理大臣賞は、長崎県に日本遠洋施網協同組合がございまして、そこが六次産業化で、自社のブリとかアジ、サバを使った「海鮮丼ぶりセット」を販売した加工の産物として受賞されています。



それから、農林漁業振興会会長賞は、山口県の江崎漁協の婦人部が「フレッシュかあちゃん」という名前で、底曳網で混獲された雑魚のレンコダイを使って非常に素晴らしい干物をつくられたということです。その中でも秀逸だったのが宮城県漁協の取組ということになります。

受賞理由ですが、先ほどから皆さんからご紹介がありますように、まず1つは、東日本大震災を経て、過密養殖にあった漁場を皆様のご尽力で薄飼い、つまり放養密度を減らして、それによって生産の効率を上げ、そこから得られる産物の品質を非常に高めて、それによって経営をさらに健全化させたこと。それから、経営が効率化されることによって、働き方改革にもつながって、後継者もそこにだんだん育つようになってきたこと。そういった非常に相乗効果を生むような、非常によい取組みをされたということです。



それから、さらに、それにプラスして、国際的なエコラベルであるASCという国際認証を取られて、今、政府としては、日本の農林水産物を積極的に海外に輸出しようという契機がございまして、そういったものに向けた一つの先鞭をつけられたということも高く評価されています。

これらのこと全てが天皇杯に結びついたわけですが、私、4回本賞の審査員主査を務め

させていただきますが、そのうちの天皇杯3回が宮城県の出品財でございます。1つは、唐桑のカキ養殖の教育との取組ですね。地元の小学校と一緒にカキ養殖の体験学習を行っているというもの。2つ目は、2年前にとられました、女川にあります高政さんという加工業者が、やはりカキを使ったかまぼこをつくられたということ。今回、志津川の戸倉出張所でやはりカキの養殖で本賞をとられたということで、震災復興の後の取組ということもあると思いますが、多分、宮城県の漁業者、加工流通業者、行政担当者、研究者、技術者たちが一緒に取り組んで、県の地域産業として水産業を大事に育てて、それを発展させてきたという、そういった下地に裏づけられた成果ではないかと私は確信しております。

今後の見通しとしましては、こういった取組がどんどん各地に広まって、今、どこの沿岸漁業でも後継者の問題であるとか、産物の品質の問題、いろいろな悩みを抱えておりますが、そういったところへの一つの参考になっていただければというのが、私の希望でございます。

以上、私から今回の天皇杯がどのようにして選ばれたということを説明させていただきました。

どうもおめでとうございました。（拍手）

○司会 生田所長、ありがとうございました。

続きまして、業績発表をお願いいたします。

令和元年度多角化経営部門、天皇杯受賞の宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所のカキ部会、後藤部会長さんをお願いいたします。

【業績発表】 宮城県漁業協同組合志津川支所 後藤 清広
戸倉出張所 カキ部会長

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました、戸倉出張所、カキ部会の後藤でございます。今日はよろしく願いいたします。

今、生田先生からいろいろ報告がありましたが、天皇杯の受賞までの時間が半年以上ありましたので、何でこんなにかかるのかなと思いつつも、今の選定のプロセスを聞きまして、大変な作業の中で選んでいただいたのだと、改めて御礼申し上げます。どうもありがとうございました。

また、先月の24日、天皇皇后両陛下に業績発表をする機会がございまして、お会いして

まいりました。天皇陛下は、水産関係に非常に興味を持っておられるのかなど、いろいろ質問をいただきまして、4分という時間だったのですが、ちょっとオーバーさせていただきまして。あと、雅子様、皇后陛下はカキが大好きだというお言葉をいただきまして、非常にうれしく思いました。しかしながら、一緒に映っている写真はNGでしたので、本当に会ったのかと言われても、証拠がありません。

それでは、私たちの取組みを発表させていただきます。

まず、地域の紹介です。

南三陸町は、ご存じのとおり、宮城県の北東部にあります。戸倉ってどこなの？ 志津川湾がありますが、ちょうど南側の丸をしていところが戸倉地区です。南三陸町は「さんさん商店街」が有名

本吉郡南三陸町戸倉地区の紹介

地域
南三陸町戸倉地区は宮城県の北東部に位置し、目の前には「志津川湾」が広がっている。沿岸部一帯はリアス式海岸特有の鑑の刃のように入り組んだ地形となっている。

人口
1,384人（令和元年12月末現在）
※震災前は約2,400人

観光
神割崎や椿島を始めとした自然豊かな観光名所があり、名物のキラキラ丼（ウニ・イクラ）や名産のマグコなど魅力が溢れている。



○ラムサール条約湿地登録

○南三陸町戸倉地区位置図

○キラキラ丼（南三陸観光協会HPより）

ですし、「キラキラ丼」を食べた方もおられると思うのですが。

あと、一昨年、コクガンという天然記念物の、海で唯一の雁が飛来するという事で、ラムサール条約にも登録になりました。これは、海では初めて、日本で初めての登録です。

人口は、震災前は2,400人いたのですが、だいぶ少なくなりまして、今は1,384人。1,000人ぐらい少なくなりました。

次は漁協の紹介です。

ギンザケ、カキ、ワカメがメインとなっていますが、震災前は12億円だった水揚げなのですが、平成29年度、13.6億円。30年度は若干上がりまして、震災前を超えるようになっています。

続いて、カキ部会の紹介です。

現在、34の経営体が営業しております。震災直後3年間だけは共同経営をしていたのですが、今は完全に個人経営、個別経営で集合体となって運営しています。

宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所

平成29年度共販取扱金額（単位：億円）

ギンザケ	2.0
ワカメ	1.9
カキ	9.2
ホタテガイ	0.4
ホヤ	0.1

組合員数：正、准組合員合計259名が所属

主要漁産：養殖業が中心の漁業となっている。
（ギンザケ、ワカメ、カキ、ホタテガイ、ホヤ）
定置網、敷網、刺網、簀などの漁船漁業も営んでいる。

水揚げ金額：共販取扱金額
震災前（平成22年度）：12億円
平成29年度：13.6億円

宮城県漁業協同組合志津川支所戸倉出張所カキ部会

設立：昭和30年以前に発足
会員数：会員は34経営体
役員：部会長1名
副部会長1名
会計1名
監事2名
役員6名

目的：①生産技術の向上
②品質の向上
③販売促進



○浅田政志氏撮影

現在の漁場の様子です。

延縄式のいかだが見えます。うちのほうは波が粗いので、延縄式のいかだがほとんどです。向こうに青島、竹島が見えますが、ちょうど間隔があるところで志津川地区、戸倉地区の境界線となっています。

続きまして、実は震災前の写真があるのです。これです。どうでしょう。ものすごくいかだが多いですよ。船が通るのも大変な状態ですし、向こうの島まで、ウサイン・ボルト選手だったら、走って帰ってこれるかなというぐらいの間隔で、非常に過密状態、いわゆる過密養殖になっていました。

もちろん、これじゃいけないなという感覚は皆さん持っていましたし、品質も悪くなるにつれて、これはまずいな。話し合いはしていたのです。何とか減らしましょう。ところが、経営規模がみんな違いますし、誰がどうやって減らしたらいいのか、決裂してしまうというか、うまく話し合いが進みませんでした。

大体1,100台のマガキのいかだがあります。だんだん出荷サイズになるまで時間を要して、3年間は要すようになってしまいました。これを改善したいのですが、なかなか改善には至らず、そのうちに、「ちょっと戸倉のカキ、品質悪いよ」。買受人から「要らないよ」と言われるまでに、こんな状態になってしまいました。

そんなとき、皆さんもご存じのとおり、東日本大震災、突然襲いました。私たちは、何回も低気圧、津波、前年にはチリ地震津波も経験していましたが、今回の100%消失ということは全く想定していなかったですね。それで、いかだも100%なくなる。住む家もない。戸倉地区は沿岸部なので、9割近い家が被災しました。一番大事な漁船も、500隻あ

現在の養殖漁場の様子



5

震災前の養殖漁場の様子（過密状態）



6

～ 震災前の漁場実態 ～

- ▶ 養殖施設数3,000台のうち、マガキは1,100台行使
- ▶ 身入りが悪く、出荷サイズ(10g前後)まで3年間に要した
- ▶ 一時は過密漁場の改善を目指したが、改善には至らず
- ▶ 買受人から「県内で一番品質が悪い」と酷評



○カキ揚げ作業の様子

7

ったのですが、1割も残らない。こんな状況の中で、ほとんどの人は、もう養殖は無理でしょう、やめるしかないのかな。大体不可能と思われましたね。

そんな中、大学の調査で海中をロボットで撮影したところ、引き潮が強かった

ためか予想以上に海中は結構きれいだ、ということが分かりました。いろいろなご支援もありましたし、何とか再開のチャンスはもらえるのかな、と思いました

ところが、こんな被災を経験しますと、また元のように、同じようにいかだを設置して、2年、3年かけて品質の悪いカキを生産したとしても、もう一回津波が来るかもしれない。これを機会に、大きく生産方法を変えましょう。まるっきり

新しい生産方法にしましょう。それは3年もかかっていられないので、1年で生産を回しましょう。それで、いかだを削減して、コストも下げれば、なんとかやっていけるのじゃないか。一見、そんな無謀というか、不可能なような取組みなのですが、20年後、30年後まで考えたときに、それしか道はないのかな。そういう方法で再生することを決めました。

こんな状況ですね。それには、いろいろ試験をやったり、維持管理、大切なので、どうしたらいいのかな。連日のように会議をすることになりました。

私たちは漁師なので、あまり会議も好きじゃないですし、話し合いなんかめったにやらないのですが、連日のように、年間100回ぐらい会議をしたのですが、会議の内容では、品質のいいものをつくりましょう。もちろんですね。どうせやるなら品質のいいものをつくりましょう。

さらに、後継者のことも考えましょう。震災後に若い人がいなくなって、これじゃちょっと大変なので、ここまではいいのですが、やっぱり減らしたとして、本当に品質が改善するのか、身入りがよくなるのか、これは保証できないですよ。確定はないですね。最後には、台数を削減して、生産量が減りますよね。収入が減って、生活できないんじゃないの。私たち漁師は、魚をとってなんぼですよ。水揚げしてなんぼ。あと、収入はないのですね。最初から収入を減らして、いっぱい借金して始めたとしても、大丈夫なの？



める航路もつくります。

そうしたら、実は最初から3分の1ではないのですね。そうやって使える海を埋めていったところ、どうも今まで1,100台でやっていましたが、300台前後しか入らない。3分の1もないな。これはちょっとぎわつきますが、とにかくやってみて、だめだったらもちろん考えますが、とにかくこれでやってみましょうということになります。

そして、試験的に、当時、1年目は13台だけ投入できたのです。そして、種付けも通常なら5月から6月、それが8月になっちゃってだいぶ遅れましたが、12月に試験的にむいてみましょう。試験的にむいたら、4カ月で20グラムにな

2 震災直後のマガキの試験養殖



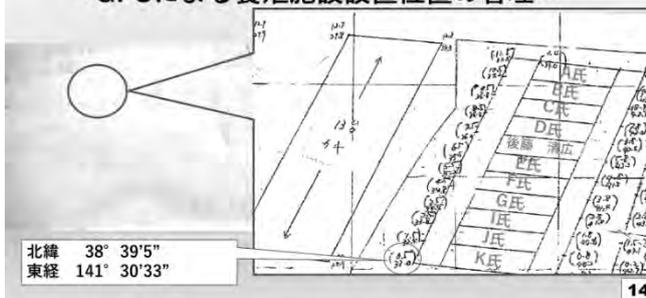
試験養殖したマガキ

13

ったのですね。次の年の5月になったら、10カ月で56グラム。めちゃくちゃ大きくなって、これは誰が一番びっくりしたかという、私たち漁師ですね。こんなに成長するのか。幾ら少ないとはいえ、これは何とかなるんじゃないか。当時、8年前なので、私のガラケーより大きくなっているのですが、さすがに今は私もスマホになりましたので、勝っています。これだけ成長がよくなったわけですね。

そして、漁場のいかだの設置を始めるわけなのですが、以前は、適当に設置しているというか、それではちょっとだめなので、GPSを使って緯度・経度をきちっと調べて、アンカーの位置もきちっと決めて、正確に設置する

3 適正な漁場の管理・維持 ～GPSによる養殖施設設置位置の管理～



14

ようにしました。これで境界もしっかりしますし、40メートルきっかり、ほぼ3メートル以内の誤差で設置できますので、品質も安定します。

これによって、違法操業も全くなり、できなくなりますし、もちろん、

3 適正な漁場の管理・維持 ～ポイント制の導入～

各経営体の上限点数

経営体系	点数
後継者有り	60点
家族	46点
単独	40点

養殖種の配分ポイント

養殖種	点数 (筏1台)
ギンザケ	6点
カキ	4点
ホタテ・ホヤ	3点
ワカメ	2点

例 後継者有りの経営体
カキ × 10台 (40点)
ワカメ × 10台 (20点)
合計 60点

単独での経営体
カキ × 10台 (40点)
合計 40点

15

違法操業する人はいないですが、しっかり管理もできるようになるわけです。これも、おそらくどこもやったことがないと思います。

これは、だいたいかだの数が減ってしまったので、改めて配分するという作業がものすごく大変なのですね。本来は、ずっと固定していた権利、ずっと動かない、子の代、孫の代まで動かない権利を、一旦ゼロにしてもらう、白紙にしてもらってから、再分配しなくてはならないのですが、そのとき、経営体の労働力、後継者がいたり、そういうので点数をつけて、各経営体に自由に選んでもらう。

例えば、後継者がいる60点の最高点数をもらえる世帯は、カキ10台できますし、もう20点残っているので、ワカメ10台、この範囲内で経営していただく。もちろん、これより少なくてもいいのですが、こんな形ですね。カキは最高10台と決めました。当然、ホタテとかホヤをやってもいいですし、ギンザケ6点とあるのですが、環境に負荷がかかるほど、より多い点数としました。

これは、戸倉の組合員全員の理解と協力がないと絶対できない取組みでしたね。今考えれば、組合員の皆さんの理解のおかげだなと思います。こんなことをやっている組合はどこにもないのかな。結構周りからは笑われたり、揶揄されたこともあるのですが、とりあえずこれで毎年見直しながらやってみましょうということになりました。

実はASCの取得は日本初ということで、どこも取っていない。どこも取っていないのだったらやってみましょう。環境を維持するには絶対必要かな。これは、本部のオランダからジョン・ホワイトさんが見えて、授賞式の写真なのですが、ASC認証というのはどんな認証なの。国際認証って何でしょう。



あまりなじみもないと思うのですが、ざっくり申しますと、環境と地域社会に配慮した持続可能な責任ある養殖業。なんかこれはわかりづらいですが、環境が大事なのかなというのわかるのですが、7つの大きな原則と、125も審査項目があるのですね。これは、最初はちょっとわからなかったのですが、これを知ったとき、大変かな、やめようかなと思うような認証だったのですが、7つの原則があって、一番に、枠外に「法令遵守」とあるの

ですね。全ての法律、決
事、全部守りましょう。守
らなければ取り消しですよ。

これはどうですか。「規
則を守らないのが漁師」と
いう文化が根づいていて、
規則はいっぱいあるのです

が、どんな規則かわからないし、そんなのを守っていて続けられる？ そんなことから入
るのですね。

おまけに、6番、7番は、地域社会に貢献したり、労働環境を整えたり。今までは、漁
師は、自分の水揚げが大事なので、周りを気にしたり、社会貢献できればいいのですが、
そこまで回らないですし、ましてや隣の漁場を開けて、お先にどうぞ。こんな内容を説明
しますと、「おまえ、そんな甘い漁師はいないよ。そんな甘い漁師は生き残れるわけない
でしょう。だから、誰もこんな認証を取らないのですよ」。漁師の生き方を変えて、文化
が変わる、そんな衝撃がある認証だったのですね。

ただ、オリンピックでも非常に使われるので、やってみましょう。やってみてだめだっ
たらまた考えますが、日本でどこも取っていないのだったら、これをやってみましょうと
いうことで決意して、認証を取得したわけです。

そんな取り決めに過ぎまして、どうなったでしょう。戸倉のカキ部会、どうなりまし
たか。まだ取組みをやっていますか。ASC認証をまだ続けていますか。非常に心配され
ます。それで、こういうふうになりました。

実は、1経営体当たりのいかに数は
は3分の1に減ったのですが、生産
量が2倍になったのですね。これは
1年での生産が可能になったので、
生産サイクルが早まりましたし、何
しろ1個1個の品質がよくなりました

なので、生産性が飛躍的に改善したのですね。おかげで、生産量が2倍になりました。

次に、金額ですね。これは、29年度は1.5倍。生産量が2倍で、金額は1.5倍で、ちよっ
と安いのと突っ込まれるときもあるのですが、実は、1年での生産となりますと、どう

ASC認証について

ASC認証の理念である「環境と地域社会に配慮した持続可能な責任ある養殖業」とカキ部会の活動理念が合致したことから、国内初となるASC取得に向け、関係法令遵守や環境と生態系などに配慮したカキ養殖業へ転換を行うこととした。

ASC認証
環境と社会に配慮した水産物の普及

Aquaculture Stewardship Council
アキュラチャー・ステWARDSHIP・カウンスィル
水産養殖 管理 協議会

養殖産業の重要性と成長を考慮しつつ、世界各地で起こっているさまざまな環境上、社会上の課題を改善、解決することで、持続可能な水産業としての発展と消費者の安全への貢献向上を進めるための認証制度を管理する独立した非営利組織

2010年: WWF&IDHがブラタの持続可能な養殖水産物等の取組を推進5団体、の共同出資によりオランダに設立
2012年: テイクアパサ養殖場が世界初のASC認証を取得
2014年: イオンで日本初のASC認証サーモンが販売開始

ASC二枚貝基準
基準の構成～影響に対処するための7原則～

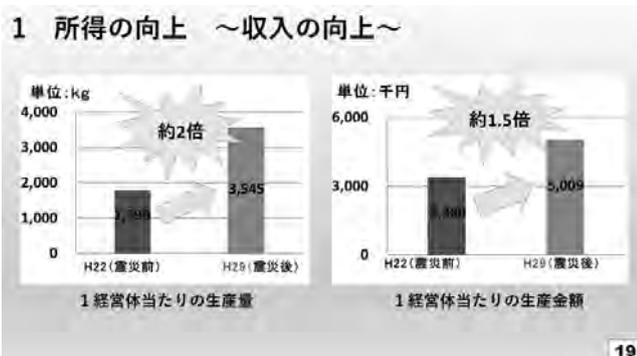
法令遵守
原則1: 該当するすべての国際、国内、地方の法的必要条件と規制の遵守

環境問題に関する原則
原則2: 環境の自然性と生物多様性の保全
海産の汚染、気候変動、地盤沈下等への影響を防止
原則3: 外来種の有害な影響を防止する天然個体群の適当なモニタリング
原則4: 有害物質(薬剤や飼料)の制御の管理
原則5: 廃棄物(ゴミや廃品)の適切な処理と消費エネルギーの管理

社会問題に関する原則
原則6: 周辺の地域社会に対する配慮と連携
原則7: 安全で公正な労働環境の整備

原則の構成と基準の内容は、種ごとに8種類で異なります
二枚貝基準は30基準から構成され、125の審査項目があります。

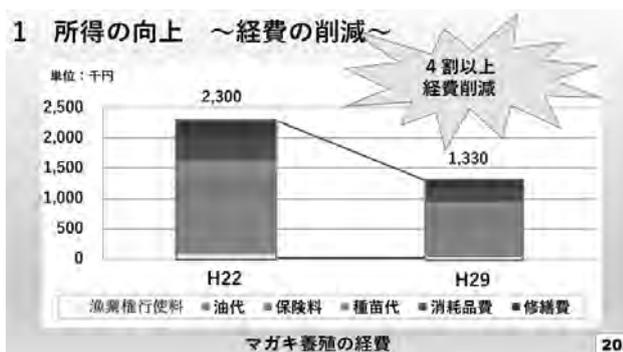
17



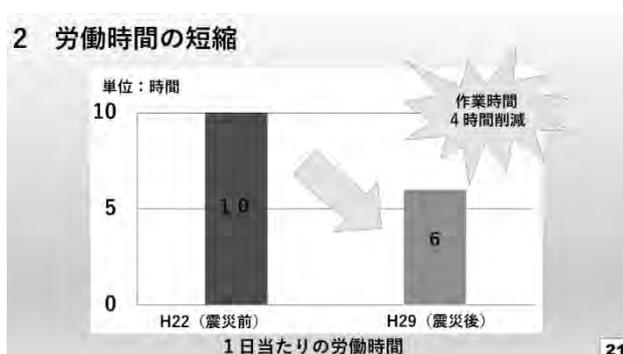
しても年を越えて、春に生産のピークを迎えるのですね。春になりますと、どうしても若干加工用に回るので、値段も落ち着く。日々の入札単価は平均よりも上回っているのですが、こんな結果になりました。

しかし、去年、春、宮城県さんから、一年中、4月、5月も生食用の生産の許可が下りましたので、宮城県でうちだけだと思うのですが、通年生食を実施しました。その結果、春もだいぶ単価が向上しましたので、去年は1.7～1.8近くまではいっていると思いますが、それでも生産性が向上したので、十分いいのかなと思います。

次、これはコストのグラフなのですが、いかだ数を3分の1にしたので、コストも3分の1というわけにはいかなくて、いろいろ経費を計算しますと、それでも4割。これは、各経営体によっても差はありますが、4割以上は削減できるのかな。どこの世帯でも100万以上是削減になっていると思いますので、これは非常に大きいかなと思います。



次、労働時間なのですが、実は、震災前は10時間やっていたのですが、今は6時間。朝は若干早いのですが、今は午前中11時ぐらいになると誰もいなくなります。飛躍的に生産性が上がったので、これでも十分生産がありますので、働き方改革にもなりました。



今までは日曜日管理で大変だったですし、休みはなかったのですが、今は完全に日曜日は休みますし、私も余暇がとれるようになりまして、たまには女房と映画、この間も『ラストレター』を観てきましたが、『ラストレター』は仙台・白石収録で、非常によかったです。松たか子さん主演でした。

その他の効果なのですが、台風、低気圧が必ず毎年来るのですね。去年も

3 その他

- > 台風・低気圧等の災害からのリスク軽減
- > 航路幅の確保, 温湯処理による身入りの向上

○1年で成長したカキ ○カキの温湯処理作業

22

台風19号、非常に大きかったですが、1年で生産が可能になったので、いかだの軽い時期が非常に長いので、年内、大体2月、3月くらいまでなると、大きな南岸低気圧が来るのですが、その前に生産が進んでいますので、被害があったとしても大体少ないのかな。また再開も非常に楽になりますね。災害のリスクは非常に下がりました。

そして、航路も広くとれましたので、安全性も確保できますので、プロペラにロープが絡んだりというのが以前は結構あったのですが、今はそれも少なくなりました。

あとは、温湯処理による身入りの向上。震災前は、こういう作業は全然できなかったのですが、夏場にカキを熱湯に入浴させて、海藻を落として身入りをよくする。今まではできなかった、手間暇かけていいものをつくりましょう、品質を向上しましょうという作業もできるようになりました。

この写真は、震災直後ですね。

9年近くなるのですが、当時の写真はほとんどないのですが、どういうわけか撮ったのですね。あしたから復興に当たって、若い人もいなくなるし、どうなのかなと

波及効果 ～後継者の増加～



震災直後 (before)

23

不安を抱えながら撮影したのを今でも覚えています。ちょっと表情が暗いですが。私も下から2番目に映っているのですが、今よりだいぶ若いですが。

次に最近の写真があるのですが、9年後はどうなったでしょうか。

こうなりましたね。よく見る写真なのですが、さっきの人たちが若作りしたわけではないのですね。若い人がものすごくふえました。写真ではちょっと怪しいと思われるので、グラフに示しました。

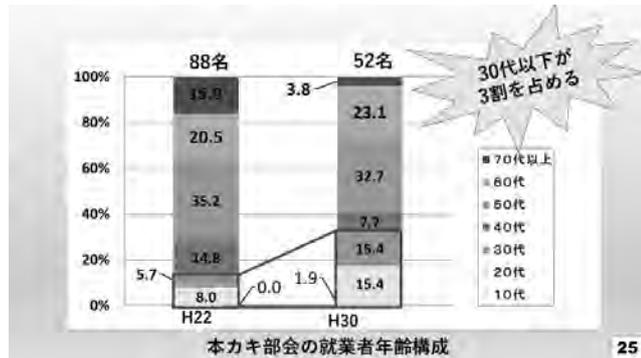


現在 (after)

○浅田政志氏撮影 24

毎年、新卒の就業者が増えたり、一旦離れた若者が戻ってきたりして、30代以下が3分の1になりましたので、非常に持続可能な年齢構成、平均年齢も60歳ぐらいだったのが、今は40代ぐらいで、非常に活気がある部会になりました。若い人は、相当水揚げに貢献していますし、私たちは、実際、若い労働力、後継者を増やすのは、望んではいたのですが、

狙いどおりにうまくいくことは考えていなくて、将来を考え出したときに、若い人たちは、将来性がある、未来が見えてくれば、みんなやるのかな。私たちは、どうせ若い人は辛い仕事は嫌でしょう、朝早くて、きつい労働は嫌でしょうとばかり思っていたのですが、実際は、ちゃんと品質のいいものをつくって、ちゃんとした環境を整えば、やりたい若い者がいっぱいいるんだということが、改めて私たちは教えられました。



今後の課題と展開では、「戸倉っこかき」の知名度が低いということもあるのですが、安定した入札、安定した販売はずっとできていますので、今日を境に知名度が一気に向上するのかなという期待もしております。



それと、このほか、ギンザケとかワカメもASC認証に取り組んでいますので、今日はギンザケの青年部の方も見えていますが、次はギンザケもASCを取得して、ますます頑張るのかなという期待をしています。

最後になりますが、私たちは、自然の恵み、環境で生活してきたのですが、いつの間にか、それを忘れてしまって、生産本位、大量生産、経済本位というような方向に来て、どんどん行き詰まってきたのです。それを10

最後に

私たちは自然の恵みで生活してきましたが、そのことを私たち自身が忘れてしまい、いつの間にか自然に負担をかけて養殖を行っていました。

しかし、これからは10年、20年と持続可能な漁業、将来も安定的に生産できる漁業を目指したいと思っています。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

8 環境目標 14 海の豊かさ

年、将来も安定して、若い人に、最近嫁さんをもらって、孫ができて。最初、10年、20年後は遠かったのですが、今は50年、70年、100年後を考えていかななくてはならないのかな。スタートは「環境で飯が食えるか」という人もいっぱいいたのですが、環境で私たちは生活していますし、環境を守ることが経済発展、環境を無視した経済発展はあり得ないなど改めて実感するようになりました。

国連の開発目標、SDGsも最近ちょっと取り上げるようになりましたが、8と14、また、ほかのも実践できて、こういうことも取り上げてもらうようになりました。

これで私の取組みの発表を終わります。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 後藤会長、どうもありがとうございました。

ご質問などもあるかと思いますが、後ほどのパネルディスカッションの中で会場から参加していただく時間もございますので、その中でお願いいたします。

ここで10分ほど休憩をとります。14時35分に再開します。よろしくお願いいたします。

(休 憩)

○司会 それでは、再開いたします。

これからはパネルディスカッションでございます。進行は、コーディネーターとして生田所長をお願いいたします。

【パネルディスカッション】 コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会
水産分科会主査 生田 和正

○生田（コーディネーター） それでは、ご参集ありがとうございます。これからパネルディスカッションということで、私の進行のもと、戸倉出張所のカキ養殖の過密養殖からの脱却の取組について議論していきたいと思います。先ほど後藤部会長から、非常に丁寧なご解説というか、ご報告がありましたが、皆さんすごくウィン・ウィンで、全てがハッピーに大成功したという結論ですが、多分そこに至るまでの大変なご苦勞もあったと思います。そういったことも含めて、このパネルディスカッションで、皆様の今後のご参考になるように、後藤部会長を中心に、パネリストとして学識経験者の方々にも来ていただいて、意見交換をさせていただきたいというふうに思います。よろしくお願いいたします。

それでは、パネリストの皆様のご紹介を申し上げます。

私の横から、先ほどご報告いただきました、戸倉出張所の後藤部会長様でございます。

その隣が、国立研究開発法人水産研究・教育機構の、今、本部で研究推進部長を務めていらっしゃる神山孝史様でございます。神山様は、私どもの同僚ですが、かつて塩釜にございます東北区水産研究所で震災復興関係の農林水産省の先端プロ研というプロジェ

クトの中で、宮城県で「あたまっこカキ」とか、「あまころ牡蠣」という一粒ガキの生産技術の開発で、地域の漁業者とともに一生懸命技術開発に努めたご経験があることから、今回ご参加いただきました。

その隣が、北海道大学大学院水産科学研究院准教授の佐々木貴文先生でございます。佐々木さんは、私と一緒に今回の農林水産祭の選考委員、専門委員を務めていただきまして、特に経済関係がご専門で、経営に関するところでいろいろアドバイスをいただきました。今回の取組も非常にご苦勞があったということを佐々木先生もご認識されていると思うので、そういったところでいろいろご意見いただければと思います。

その隣が、宮城県の気仙沼地方振興事務所水産漁港部長の小野寺淳一様でございます。今回、宮城県が天皇杯をとられたということでございますが、地域の普及活動というか、そういった行政の取組も大変重要だったのではないかと認識しておりますので、小野寺様にもこのパネルディスカッションに参加いただいて、ご意見いただければと思います。

それでは、それぞれ専門の立場からパネリストの方に来ていただいているので、皆様に今回の天皇杯の受賞を見て、一言ずつ、何かこれに関する印象とか、コメントがございましたら、お願いいたします。

まず神山さんからお願いいたします。

○神山（コメンテーター） 水産研究・教育機構の神山でございます。

先ほどご紹介がありましたが、私は、平成25年からカキの関係のプロジェクト、復興関係の農林水産技術会議のプロジェクトでかかわっていきまして、そのころから5年間かけて志津川支所にも出入りして、後藤部会長さんと一緒に「あまころ牡蠣」の商品をつくるどころとか、販売もいろいろ一緒に行動したりしました。後藤さんたちと、宮城県の方々や漁協の方も含めて、昼間から都内のオイスターバーをはしごして、いろいろと勉強したりしたこともあります。こういったいろいろなカキの取組みをしながら、志津川支所の皆様方とおつき合いがあったわけです。

一方で、私は専門がプランクトンの生態的な研究なのですが、広島と宮城、東北水研に在籍していたころは、カキ漁場のプランクトンの研究、特にカキの側からすれば、餌の研究などにタッチしていました。その研究の一つのテーマとしていたのが、学術的に言うと、カキ養殖場の環境収容力を明らかにすることです。海域毎に、餌の量に適したカキ養殖ができる量のレベルがあるということで、広島や宮城で現場のプランクトン量と生産力を調べ、そのレベルを推定するような研究をしてきたわけです。

ただ、学術的に一生懸命こういうことを進めてきましたが、現場で漁業者さんたちが実際に取り組むというのは非常に抵抗のあることで、良いとわかっているにもかかわらず実践できないのが現実であることも感じてきました。

今回、受賞された取組みの一つの大きな柱が、生産者自らカキの養殖の施設を減らすことです。これは、なかなかできないことですが、不幸にして震災で漁場利用のリセットがかかったことで、一つのきっかけではあったと思います。そういったきっかけをバネに、それを実践して、非常にいい成果を生み出し、それをさらにいい歯車に結びつけているのは、すごく高く評価したいと思っています。今後、こういった取組を同業者に見せることで、似たような試みが別の海域に広まることにつながり、カキ産業全体の振興・発展につながるのではないかと思います。今回はそのためにも大きな成果だったと感じているところです。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

では、その続きを佐々木先生から、経営を中心に、今回の取組へのコメントをお願いいたします。

○佐々木（コメンテーター） 今、施設の削減という形でお話をいただきました。これはもちろんすごい取組みですし、経済の点から見ても、それに切り込んでいくのは難しいわけで、一つの車輪として素晴らしいので、私はもう一つの車輪として、ポイント制に注目してみたいと思います。ポイント制は、後継者をいかに確保するのかというところにも同時に配慮したもので、今回の取組はそれが両輪となって進まれたというのが、経営経済をやっている立場からすると、すごく驚きになります。

どういうことかといいますと、皆さんよくご存じのことかと思いますが、漁業センサスで言いますと、1993年で漁業は就業者数が32万5,000人ほどあったのですね。それが2018年の最新の漁業センサスで15万2,000人。つまり、四半世紀で半減以下なわけですよ。そういう厳しい漁業の置かれている状況があるわけです。

例えば、漁業種類別で後継者がいるかどうかを見てみますと、大体、カキだと2割とか3割なんですね。ホタテは4割近くあって、漁船漁業を中心とした10トン未満の沿岸漁業だと、十数パーセントになるわけですよ。そういう意味では、カキはまだましかといえば、それでも3割の話で、持続性というものに対して、必ずしも楽観的でいられる数字では、今、ないわけです。

もちろん、全体を通して見ても、漁業就業者の四半世紀での半減以下という厳しい数字

がある中で、今回のこの事例は、施設を削減して、労働負荷を抑えて、リスクも減らして、そしてさらにはポイント制の導入と相まって、働く側から見た労働環境の改善というもの、そして、具体的な収入の改善につなげていく、労働負荷を下げていくという、本当に目に見える形ではっきりしたのは、私も全国いろいろ見させていただく中で、こうしたのがない中で、非常に驚いて、すばらしいなと思った次第でございます。

また後ほどいろいろあると思いますので、その際、追加でお話をさせてもらえればなと思います。まずはこういうコメントで終わらせていただきます。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

それでは、小野寺さんから、行政の立場から何か今回のことについて。

○小野寺（コメンテーター） 小野寺と言います。私どもの部署につきましては、県の出先機関として、地域の水産業の振興を支援する機関で、その中に南三陸町も管轄となっております。

震災からの復興につきましては、国や県の事業を活用しまして、いろいろな施設を整備したわけなのですが、その中の一つに「がんばる養殖」というのがあります。これは戸倉のカキ部会さんでも取り組んでもらったのですが、まず、南三陸町の志津川での取り組みとしましては、戸倉が全体となって取り組んだというのが、一つ大きなスタート地点であって、そういったふうな計画を立てたことが非常にすばらしいと思っております。

宮城県では「がんばる養殖」については養殖種ごとに整理していたのですが、今回は、戸倉地区については3つの養殖種で1つのグループとして取り組んだのがすばらしいなと思います。その計画に当たって、うちの事務所としても携わったということでございます。

それから、今回のカキ部会の取り組みに対してのお話になりますが、これまでの漁場の利用につきましては、組合の管理のもと、個人個人が行っていたこともありまして、思い切った改革、取り組みはできないでいたのですね。それが、戸倉のカキ部会さんにつきましては、震災からの復旧・復興、本当にさまざまな形で工夫していたところがすばらしいなと思います。

例えば、先ほどもあった、間隔を広げるポイント制の導入というのがありました。その中で、国の「がんばる養殖復興支援事業」に取り組んだことで、復旧・復興の方法につきまして、十分な話し合い。個人個人じゃなくて、グループでやったから、十分な話し合いをする時間もあったのもよかったと思っております。

改めまして、後藤部会長をはじめとしまして、副部会長、各養殖種のリーダー、そして

漁協並びに役場の担当者の方々と一致団結しまして、目標に向かって課題を一つ一つ解決していったのが、大きな成果、今回の取組みの成果になったと考えております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

それでは、私から、今のコメントも含めまして質問させていただきます。

まず後藤部会長には、今、自ら調整して、ああいう漁場施設の数を減らしていく、いかだの数を減らすということで、大変ご苦労があったと思いますが、そこら辺で何か確信というか、どういう思いというか、何か裏づけされるようなデータみたいなものを過去に持っていたのでしょうか。

○後藤（業績発表者） どうもありがとうございます。

確信というか、以前、養殖をスタートしたときは、1年で生産していましたが、過去には短い期間でも品質のいいのがとれたことがありましたので、思い切ったこととして変えれば、きっとできるんだろうなと考えましたが、実は2年間は全く思うようにならず、結果も出なく、あきらめるような時期もありまして、そこを「がんばる養殖」で救ってもらった制度もありましたし、あと、実験の中で、さっきありましたが、短い期間でも品質のいいのがとれることは実証になったのですが、果たして施設がいっぱい入ったときはどうなのかとか、進行していく中で、徐々に結果が出てきたのでよかったです、長年のうちで、技術、今まで2年とか3年で回すときは、ほとんど自然任せのところがあったのですが、1年で生産することは、思うより簡単じゃなくて、いろいろな技術をみんなが考えながら、話し合いながら延ばしていくことができましたし、種付けをして本養殖になってからは、10カ月程度は最低限ほしいなとか、あと、ブイの付け方だったり、温湯処理だったり、いろいろな取組みをして、2年間はひど過ぎる結果だったのですが、3年目ぐらいから徐々に効果が出始めて、去年まで8期ぐらいやったのですが、残りの6期ぐらいは毎年20%ぐらいずつ売上を伸ばしまして、何とか10年で2億円みんなで売り上げようという目標を立てたのですが、半分で目標も達成できましたので、よく回り出したら、どんどんよく回り出したのですが、いろいろな支えとかラッキーな面がありましたし、一番ひどいときを乗り越えることができたので、そこを乗り越えなかったら、今はなかったと思います。

○生田（コーディネーター） 最初はちょっと手探りだったけど、途中から確信がだんだんできてきたというような形ですかね。

神山さんからも、先ほど環境収容力の話がありましたが、神山さんも結構現場に入られたりして、あと、志津川は大学だとか、宮城県の水産技術総合センターの方たちも多分入

られていると思いますが、そういった技術交流みたいなものはどのような感じですか。研究者の立場からいうと、現場にその技術がなかなか伝わりにくいという悩みもあると思うのですが、そこら辺がうまくいったのかなという感じがしたのですが。

○神山（コメンテーター）　そうですね。我々水産研究・教育機構は、宮城県の方々と一緒に動いていましたので、県の方々を通じて、戸倉の出張所さんとはいろいろやりとりもしていたところです。

ただ、これは一つの問題かもしれないのですが、震災後に多様な機関が志津川で研究をしているのですが、なかなか我々との連携は十分にはとれていなかったように感じます。東北大学と宮城県と東北水研で一応連携の枠組みはありましたが、情報交換レベルで止まっていたかなと思います。あと、大学関係で環境収容力に関わるプロジェクトも走っていたのですが、そちらとの情報の交換はできなかった点が我々試験研究機関での課題かなと思っていました。

ただ、各機関の取組でいろいろな現場のことはわかってきたので、それを今後利用しながら関係機関で一緒になって課題に対応していくための道はできたかなと思っていますので、その発展に期待しています。

○生田（コーディネーター）　そうすると、今回の事例を成功事例として、もっと研究分野でもアピールして、ほかの地域にも活用していく方向でいきたいという感じですかね。

○神山（コメンテーター）　そうですね。そういうふうにしたいなと思っております。

○生田（コーディネーター）　ありがとうございます。

あと、佐々木先生は、経営で2つの両輪で非常にいいということですが、今、水産の分野だけでなく、日本の社会全体が少子高齢化で、今後、働き方とか、労働力をどうしようかという中で、こんな成功事例があるのはまれな例ではないかと思うのですが、そこら辺、ほかの事例に比べてどう思われますか。

○佐々木（コメンテーター）　ほかの事例と言われると、正直なところ、ほとんど寡聞にして知らないというか、そういった状況ですので、逆に本当に驚いたということになります。

ただ、一方で、努力をしようという事例は、例えば、私の地元の北海道にもございます。権利関係を、沿岸の漁業権の配分を、より後継者がいる経営体に舵を切ろうという事例もあるのですが、なかなかその取組みと生産がそれこそ両輪にならないような形で、まだその成果が全国的に知れ渡る前の段階かもしれません。ただ、そういう種はまいている状態

なのですが、いち早く芽を出されたのが今回の事例なのかなという認識です。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

あと、小野寺さんも、普及活動とかさまざまな取組を、宮城県では、すごく手厚くやられていると思うのですが、今回、こういった成功に至った最も大きなキーポイントはということだと思われませんか。

○小野寺（コメンテーター） 大きなキーポイントは、やはり話し合いだと思っております。先ほどもお話したのですが、あと、後藤部会長からの話もあったのですが、漁業者は「一匹狼」というふうなことがありまして、漁場の利用につきましては、自分が割り当てされたところを、自分勝手にと言うところはあるのですが、自分が中心となっていた。ただ、それを今回、過密養殖という課題に対して、施設の間隔を広げていくという発想がまず出てきて、それを実際に取り組んだ。それはやっぱり話し合いですね。それが一つの成果につながったと思っております。

○生田（コーディネーター） ただ、話し合いを持つにも、後藤部会長のリーダーシップというか、そういうものを持つという意思を誰かが持っていないと、なかなか継続的にやるというのは難しいですね。

○小野寺（コメンテーター） そうですね。100回にも及ぶ話し合いですね。その中には、一つ革新的な部分、間隔を広げれば身入りがよくなる。そして、生産のサイクルが1年間で済む、リスクも低減されるというのをきちんと伝えて、それを皆さんが理解したというのが、こういった取組の成果になったと思っております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

一通り皆様のご意見を伺ったので、コメンテーターの方たちから、もし後藤部会長様に、もうちょっとこういうところを聞いてみたいとか、どんなことでもっと苦労したのかとか、何かありましたら、自由にご発言をお願いしたいのですが。

○佐々木（コメンテーター） 後継者、担い手の部分に注目した質問で、繰り返しになって恐縮ですが、今のところは経営体内部の後継者がいらっしゃる経営体に対して、ポイント制で優遇というか、重みづけされていると思うのですが、今後、完全な新規という形で外部から就業者を受け入れることまでご検討なのか、地域として、それがなかなか合意形成が難しいことだとは思いますが、その辺についてご教授いただけますか。

○後藤（業績発表者） 今のご指摘があったとおり、今の漁協の形態では、全くの新しい新規参入を迎え入れるのは非常に難しく、現在は、後継者、家族だったり、そういう人

が全てなのですが、いつかは新しい、意欲のある人は絶対受け入れるべきだなと常々話し合っています。

ただ、今では、一回漁協の組合員になっていただいて、何年か実績を積んでいただいて、組合員みんなで認めて、少しずつ空いたいかだを使ってもらって実績を積んでもらうという作業をしなくてはならないので、なかなか難しいと思いますが、ぜひいろいろな意味で検討したい。

あと、漁業者の中でも美人な娘さんがいますので、ぜひお嬢さんに来てもらえば、すぐ後継者になれますので、そういう道もあるということですね。

○佐々木（コメンテーター） ありがとうございます。

○生田（コーディネーター） ほかにいかがですか。

○神山（コメンテーター） 今日の説明の中で注目したのは、温湯の処理ですね。宮城県では、気仙沼湾の一部ではやられているという話は聞いていたのですが、他ではあまりやられているという話を聞いていませんでした。これを導入する利点はわかっていたのですが、かなり施設的な問題とか課題があったと思います。これをうまく導入できた経緯があればお話しいただければと思います。

○後藤（業績発表者） 以前、過密のときは、雑海藻、ムール貝とかいろいろなのがあまり付かなかったですね。環境が悪いので。今は、ムール貝、雑海藻が結構いっぱい付くようになりまして、雑海藻が多いときは、温湯処理をしますと、その後の品質が劇的によくなりますので。ただ、夏場の作業で暑いですから、全員はやっていないのですが、そうやって努力して成果に結びつける業者さんも、全部じゃないですが、3割か4割ぐらいはやっていると思います。

あと、いろいろな作業の中で、以前は生産が終わってから種付けだったのですが、現在は、生産と種付けを同時に進めたり、いろいろな生産方法を各個人で考えながら、あと、いろいろな生産者同士で情報交換しながら、ほかの経営体のカキを見て、大きいとか、身入りがいいとか、どうやっているのかとか、そんな感じで品質を向上しましょうという取組みは、以前はなかったのですが、今はそういうのを頻繁にやるようになりました。

○生田（コーディネーター） どうぞ、小野寺さん。

○小野寺（コメンテーター） 私も行政の人間として、この技術、それから取組みについては、今後普及していきたいと思っております。その中で、いいことだけ言ってもなかなか伝わらないところもありますので、ある意味で苦労話とか大変だった部分で、今だから

言えることが何かもしあれば、お話ししてもらいたいと思うのですが。

○後藤（業績発表者） 何でも初めてやることだったので、当然、皆さん不安だったり、大変なので、万が一失敗することも考えながら、うまくいかなかったら逃げようかなと思って（笑）、船もあまり大きいのを持たなかったですし（笑）、でも、一回はやってみたい。あと、ほとんどの人が、施設を少なくすれば絶対よくなるということは皆思っているのですが、なかなか実践できないので、会議は本当に頻繁にやったのですが、みんな不安を話し合ったり、ぶつけ合ったりして、抱えないことに終始しました。結果が出なければ、増やしましょうという人も結構いたのですが、今は、間に増やしましょうという人は一人もいなくなったので。

あと、当初、300台入れて、増えるのかなど。実はこの7年でさらに減りました。震災前に1,100台あったときは、幾らあっても足りなくて、減らないのですが、少なくなりだしたら、危険な場所はやめましょう、効率のいい経営をしましょうということで、280台いかないのですが、それでも売上を伸ばすようになりまして、みんなで思いやって、あと、多い人は返して、若い人に回しましょう。取り組んで人の考え方が変わりましたので、お互いに思いやったりとか、話し合ったりはできるようになって、効率のいい使い方をしましょう。あと、後継者が増えれば、当然、後継者の人に空いた漁場を回しましょうということは、ごく普通にできるようになりました。

○生田（コーディネーター） 大変参考になる取組みだと思うのですが、さはさりながら、なかなか地域の中でそういうことをやっていこうというと、かなり強力なリーダーシップ、あるいは行政からの指導であるとか、そういうことが必要になると思うのですが、宮城県内でも、私の印象だと、リアス式だと、湾ごとに集落があって、そこでそれぞれに漁協の出張所があって、それぞれの独自の取組みをされていると思うのですが、宮城県の中でも今回の志津川支所戸倉出張所はかなり特異な取組みだと考えてよろしいのでしょうか。

○小野寺（コメンテーター） そうですね。当然、今回は震災からの取組みということで、後藤部会長が再三言っております、本当に県内一酷評されたカキが、県内一というか、本当に上位のほうで評価されるようになったのは、非常に特異的なというか、ギャップがすごくあったというのは、すごい取組みかなと思っております。

少しお話しさせてもらいたいのは、震災からの取組みにおきまして、志津川支所のリーダーシップのあった取組みが、今の戸倉のカキ部会の成果につながったのかなと私個人的には思っております。

当時、震災からの復旧・復興に対して、志津川支所の前運営委員長であります佐々木運営委員長が、復興するには、組合員全員で、そして一人もやめることなくしなければならぬと強い意思がありまして、それで、今回、志津川支所の各養殖部会で「がんばる養殖」の取組みをしたのがまずスタートラインであったと。それを戸倉のカキ部会の方々は継続して「がんばる養殖」を全うした。そして、その後もそのグループでやった取組みを守って進めていったのが、県内でも、戸倉または志津川支所の取組みは非常に光るものがあったなと思っております。

○生田（コーディネーター） 今、例えば、その波及効果とか、他の漁協さんたちは、それに対してどんなふうに捉えていらっしゃるのですか。

○小野寺（コメンテーター） 当然、「がんばる養殖」をやったところは、グループで取り組んだというところで、そういった流れの中で共同作業は継続してやっておりますが、グループを離れて個人経営になったところでは、従来どおりの手法になってくるかなと思います。ただ、漁場の使い方については、戸倉と同様、少し航路を広げたり、養殖施設数を見直したりというところはあると思いますが、ここまでやったところはないかなと思っております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

ほかに何かご質問、ご意見ありませんかね。どうぞ、神山さん。

○神山（コメンテーター） 試験研究機関の立場で後藤さんにお伺いしたいのですが、全てがうまく具合に回っているというお話だったのですが、それでも今、何か問題があって、こういったことが今後解決して行ってほしいことがあれば、お話ししていただけないですか。

○後藤（業績発表者） 順調にはいっているのですが、この先、まだまだ先を見渡したときに、新しい取組みなので、世代が変わったときとか、新しい人が出てきたりとか、そんなときに、しっかりと継続できるシステムをしっかりと確立がまだ決定していないかなというか、しっかりしたシステムがあれば、大丈夫だとは思いますが。何とかそういうシステムとか、マニュアルをしっかりとつくっていききたいなと思っております。

あと、神山先生が震災直後、塩釜にいたときに、さっきちょっとお話があったのですが、渋谷のオイスターバーを8軒、一晩で回りましたので、いろいろ店を見て、カキの需要があるのかなというか、びっくりして、東京にはカキを語らせたなら一晩しゃべるような熱い人がこんなにいるのかなとびっくりしましたし、その後、役員を連れて品川駅のオイスタ

ーバーに行って、こうやってカキが消費者へ提供されているのかと体験もできましたし、カキが高額で提供されていることに驚きました。

そういう意味では、生産者が意欲を持って、若い人が頂点を目指せるシステムを確立して、品質のいいものをつくれれば収入も増えたりとか、そういうシステムもあれば、意欲がまた違うのかなということをいつも思っています。何とか生産者が脚光を浴びるシステムがあれば、さらにやる気が出るのかなと思います。

○生田（コーディネーター） 今、カキは再注目されていて、全国でカキの養殖を始める漁協さんも増えてきていると思いますし、全国にカキ小屋とか、カキを食べさせる店が増えてきているのもあって、もう一つは、今言ったオイスターバーみたいな一粒カキのニーズですね。そういったものについても、今後の取組みとして考えられていると思うのですが、例えば輸出とか、そういったところはどういうふうにお考えですか。後藤部会長。

○後藤（業績発表者） 今私たちが使える海というのは決まっていますし、今は順調にきていますが、どこかでやり方を変えたり、新しい販路を見つけたりは絶対しないと駄目だと思うので、新しい販路だったり、新しい取組みは絶対やっていきたいと思えますし、ここで終わりじゃなくて、昨年度は、通年（10月～5月）生食というのをやって、大成功をおさめましたので、通年生食、あと、「あまころ」も一年中食べれる場所ということで、いろいろなところにアピールしていきたいと思えます。

○生田（コーディネーター） 佐々木先生、例えば、今、カキ養殖ブームみたいなところがありますが、そこはどうですか。

○佐々木（コメンテーター） 今の最後の販売形態につきましても、漁業、水産加工業が置かれている一つの課題なのかな、と思ったりします。確かに、それなりの規模になってきますと、販売体制をある程度安定して出荷できる売り先を確保して、そういう意味では、漁協とか、系統団体さんの力は非常に大事になってくると思えます。

一方で、細かな消費者のニーズをどう捉えていくのかといえ、もう一つ違った視点が必要になってきているのかなと。まさに今現在。なぜそういうふうに思うかといいますと、地方へ行っていろいろな漁業者さん、生産者さんとお話をさせてもらうのですが、そうした場合、生き生きしているなと思う人にお話を聞くと、生産物の一部を自分で売っているんだという方がいらっしゃるんですね。それは、もちろん漁協さんにも手数料を払ってやっている。漁協さんも公認の上やっているわけなのですが。どういうことかという、それが大きな利益につながっているとか、いないとかという問題とは違って、自分で工夫し

て、消費者に対してどうやって売っていけばいいのか、消費者のニーズは一体今どういう状況にあるのかということ打診しながら生産されている方というのが非常に意欲的だなと思う瞬間があるのですね。

今、いろいろな経済状況、難しい状況があって、可処分所得が高い世帯とそうでない世帯と、いろいろあると思うのですが、なるべく高い世帯に直接ボールを放り込んでいく取組みをされている生産者さんも出てきております。そういった方々は、消費者さんの声がリアルに返ってくるわけですね。直接やりとりをしているので。その中で自分の生産局面をもう一度考え直し、見直して、よりいいものとは何なのか、ということに立ち返る取組みをされている方が、最近、結構出ていらっしゃいます。

そういった中で、ぜひお聞きしたいのですが、販売の部分で何か次の一手というもので、従来とはちょっと違う形で何かお考えがあれば、お話しただければと思っております。

○後藤（業績発表者） 今まで、カキ業界は全国でいっぱいあるのですが、横の連携があまりなくて、みんな単独で。もっと横の連携を強めて、カキ自体は鉄も亜鉛も豊富ですし、完全栄養食で、非常に健康効果の高いものなのですが、それがなかなか浸透しないので、もっと横の連携を強めて、例えば、全国K1グランプリとか、カキ1グランプリとかを開催して、料理もそうですが、誰が一番いいカキをつくるかというイベントをやってみたり、例えば、その頂点をとったときに、若い人が頑張って、頑張った先に頂点があって、そこを目指せるシステムというのを確立すれば、もっと業界が盛り上がったりすると思いますし、横のつながりで何かをやりましょうということはなかなかないので、あと、カキだけじゃなくて、いろいろな水産物がありますので、もっと横の関係を強くできればいいなと思っています。

○生田（コーディネーター） 水産庁もF1グランプリをやっているんですが、そういう形ではそういう取組はできますよね。もしカキ業界からそういう要望があれば。

○高瀬課長 どういう形での支援ができるかは別にして、すごくいいアイデアだと思いますね。私、アメリカの西海岸に旅行に行ったことがあって、たまたまなのですが、カキの品評会をやっていて、すごく楽しかったというか、本当にいろんな種類のカキがあって、その中で「クマモト」というブランドのカキを見つけたりして、非常に楽しくて、日本はこんなにカキをみんな食べるのに、こういうイベントはないなと思いつつ実は見ている、そういうカキ業者さんの横の連携と申しますか、そういうのを強めていって、カキをもつ

と普及させていくといいますか、いろいろな食べ方もほかにあると思うのですね。そういうものを広めていくのは非常にいいアイデアじゃないかと思います。

○生田（コーディネーター） 水産庁からもそういうふうな協力的なお言葉をいただいたわけですが。確かに日本のカキの世界進出ということは昔から歴史的にあり、米国西海岸のクマモト・オイスターも日本から持っていかれたという。これは、今日、熊本県の人はいらっしゃらないと思いますが、熊本県の人に言うと、すごく嫌な顔をして、うちのカキが盗まれたんだというような言い方をされるのですが。そういう形で、例えば、フランスのカキも病気でだいぶやられたときに、広島とか宮城から種を持っていったとか、いろいろ話があるので、多分世界的にも日本のカキの持つ品質の高さはすごく評価されていると思うので、そういう土俵でどんどん我々も広い舞台を探して、進出するのは一つの方法だとは思いますが、神山さん、どうですか。一粒カキの開発をされたのは、そういうところも含めてあったと思うのですが。

○神山（コメンテーター） おっしゃられるとおりでないとですね。なかなかそれぞれのカキも文化があって、その土地の、日本から見たら、ヨーロッパのカキは水っぽいと言うが、向こうの人たちは、「カキは飲み物だ」という話も聞いたことがありますし。ただ、日本のカキというのは、外国から見てもすごく評判がいいという話をよく聞きますので、今、流通の問題があって日本のカキを外に出せない状況があるのですが、それがやがて解決してくれば、外に売り込みしていく道も出てくるかなと思います。そうなれば、さらに日本のカキ産業の振興につながっていくでしょう。なかなか今の状況では難しいことがありますが、それに向けて、皆さんで努力していく必要はあるのかなと思っています。

○生田（コーディネーター） そういった経営的な問題とか、流通の問題は、カキの養殖でも、水産業全般的にも重要になってくると思うので、そういったこともこれから皆さんで取り組んでいきたいと思うのですが。

一つ、あと、技術的なことで、先ほど神山さんのお話があったように、試験研究の成果がこういう現場に反映することがなかなか難しいように思っております。最近では、プロジェクト研究をやっても、必ずどれだけ魚価が上がるのかとか、数値目標を求められたりとか、そういうふうになってきています。従来から、国ベースでやった研究が直接現場までいくということは難しかったのですが、今回、震災復興という一つの大きな契機もあって、一緒に取り組むという方向性が生まれてきたわけですが、神山さん、今、水産研究・教育機構の本部の研究推進部という研究推進の中心にいらっしゃるわけですが、今後、現

場との連携はどのようなふうに考えられますか。

○神山（コメンテーター） 我々にとっては非常に重要な質問だなと思います。我々も試験研究機関ではあるのですが、特に、産業に貢献するという一つの使命があるので、その辺は十分考えていかなければいけない。そのためには、現場のこともちゃんと理解して、県の方々とか漁業者さんとのコミュニケーションをいろいろとりながらやっていく必要があるかなと思っています。

現状でも、我々としても職員も理解して研究業務に取り組んでいます。カキ養殖に関しましては、採苗不良が起こることはあるのですが、東北水研では、採苗がうまく安定するように付着する前のカキの浮遊幼生が集まるところを予測する技術開発などを行ってきました。カキの幼生は水の流れによって動き、その流れの状況というのは、漁業者さんも経験的にはわかっているのですが、科学的にサポートしようとするものです。また、西日本でも、カキの採苗の問題とか、斃死の問題があるので、その原因究明や対策につながる実際に役に立つ技術開発に向けて努力していきたいと思っています。これはカキだけではない話で、水産業に関しては、例えば新しい資源評価への対応など、我々のやるべきところが今後増えていくので、それに向けて現場に方々と連携して頑張っていきたいと思っております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

我々も自ら頑張らなくてはならないのですが、そういう点からいくと、例えば、宮城県さんは、行政と試験研究、技術センターと普及員の制度もございます。わりと現場との連携がとりやすい体制をとっていらっしゃるというイメージを持っているのですが、その辺はいかがでしょうか。

○小野寺（コメンテーター） まさにそのとおりですね。試験場の職員が普及員をやったり、行政もやったりで、その辺の進め方は、得意分野のところはありますね。ですから、今の神山先生が言われた、国の技術、よそでやった優良事例については、現場に下ろしたり。その際には、なかなかストレートに下りない、下ろせないところもありますので、現場を知っている普及員が工夫して、どうやったらその地域でその技術が生かされるかは、今後、その技術に応じて、あと、浜の状況を聞きながらやっていきたいなと思っております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

私も、この賞の候補地を調査というか、見学に行くときに、現場で大体その県の普及員

の方がアテンドしてくれるのですが、漁業者の皆さんと仲よく話をしたり、談笑しながら、いろいろ教えてくれて、いいなと、うらやましいなと非常に思うのですね。国の研究所の立場だと、現場に直接そこまで入り込んでというのがなかなかできない距離があるようなこともありますし、大学の先生なんかはもっと多分距離があるんじゃないかと思うので、今後、日本の研究機関もだんだん予算を減らされて、人も減らされてという中で、どうやってそういう連携を維持できるのかは、我々の課題でもあるという気がしますので、今回のこの志津川の戸倉の事例というのは、そういった面でも、我々にとっても非常によい事例なのかなと思っています。

佐々木先生、どうですか、その辺。

○佐々木（コメンテーター） 大学でこういう仕事をさせてもらっていると、大学からどのような形で役に立つのかを鋭く常に問われるのですが、正直、難しいところも多々ございます。ただ、そうはいっても、10年、20年のスパンでその地域にお世話になって、地域に入り込ませていただいてお話を聞いて、ずっと継続して蓄積していくものの中で見えてくるものも多々ございます。その中で、ようやく全体像が徐々に見えてくる。それを教育、私であれば例えば学生にそういう状況を伝える中で、それに対して興味を持った学生が、県の技師さんになっていただいたりとか、水産庁の職員を目指したりとか、そういった形で、それなりの時間を必要としているものが教育なんじゃないかなと思うわけで、キーボードをピッと押したら、すぐ画面にポッと数字が出るような状況じゃないことをご理解いただき、さらには、まさに今回の事例もそうですが、最初の2年駄目だったと。3年目によりやく花が開くみたいな。じゃ、2年間よく我慢されましたね、というところがぜひお聞きしたいところになってくるのですが、どういうふうに2年も地域を維持されたのでしょうか。

○後藤（業績発表者） 私よりも、ほかの部会の人たちがよく我慢しましたよね。普通、プロ野球でも、会社の経営者でも、2年だめだったら、普通アウトですよ（笑）。そういう意味では、ほかの人も忍耐強かったですし。

あと、生田先生がおっしゃいましたが、県の小野寺部長が今トップの方ですが、若い20代のときから、私が青年部のときからよく一緒に飲み明かしたりもしましたし、県の職員の方も震災直後からいろいろ調査をしてもらったり、一緒に復興してもらって、そういう意味では非常に近い。町の職員もそうですが、ほとんどの方が何十年単位で昔からつき合ってきていましたし、いろいろ親身に支えてもらったり、意思疎通もわりと楽なので、そ

んなところは結構恵まれているかなとは思いました。

○佐々木（コメンテーター） 一言だけ言わせていただきたいのですが、各地の地域を見ていると、例えば、カキに限定しても、瀬戸内でしたら外国人の方はかなりお願いして生産局面を担っていただいておりますよね。水産加工ももちろん北海道もそうですね。外国の技能実習生の方がほとんどですが、そういった形で、今まさに、短期的には、産地も必死なわけですから、そういった形で依存するのはしようがないとももちろん思います。

ただ、一方で、例えば、北海道ですと、サンマですとかイカが劇的に急激に獲れなくなりました。そうすると、今、どうなっているかという、水産技能実習生で1年ないし3年ぐらいのペースで、雇用期間で導入しているわけですから、安定的に彼らの仕事を確保するのが難しいというのが正直な、北海道の水産加工は直面するわけですね。

そういった意味で、短期的にどうしてもとらなければいけない施策と、長期的に見た場合の実は不安定性をそこに滞留させているんだというものが漁業にもあると思うし、ぜひここをお聞きしたいのですが、今回のカキの事例で、短期的にこういう課題でしようがなくやっていることはこうなんだが、実は長期的に見たときにちょっと矛盾が出てくるんじゃないかというような、何かそういった心配事みたいなものがあれば、ぜひ教えていただきたいと思うのです。

○後藤（業績発表者） おっしゃったように、日本の漁業はずっと、40～50年前とか、いっぱい魚が獲れた時代はものすごくよかったのですが、資源がどんどん枯渇して、資源がないのはみんな知っている。漁師さん、ほとんどの人は、今の資源が枯渇状態で、このままいったらちょっと危ないなと思っているのですが、禁漁期間とか資源管理をどうやったらいいのかなか難しいですし、資源管理をして収入や漁獲量が落ち込んだときにどうしたらいいのか。そこを乗り越えるのがなかなかできないので。でも、日本はものすごく200海里も広いですし、三陸沖であれ、豊かな親潮も流れてきますし、やり方さえよければ、必ず復活するというか、獲れるというか、必ずもうかる産業にはなるのかなとは思っていますので、そこをあまり悲観的にならずに頑張っていくというか、みんなで考えながら、一番いい方法を見つけてもらえばいいかなと思います。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

話は尽きないのですが、ここら辺で、時間の関係もありますので、会場の方には、お待たせしましたということになるのですが、今までのディスカッション、あるいは後藤部長様の講演に関しまして、質問であるとか、何かございましたら、挙手の上、ご所属とお

名前をよければ言っていただいて、質問していただきたいと思いますが、いかがでしょうか。ざっくばらんなシンポジウムですので、ぜひよろしく願いいたします。

○会場（阿部） 宮城県漁協志津川支所の阿部と言います。今日はすばらしいシンポジウムを開いていただきまして、また、貴重なご意見を伺うことができまして、本当に感謝いたします。

まず、質問の前に、我々にとっての戸倉カキ部会、今回このようなすばらしい賞を受賞したのですが、本当に多くの関係者の皆さんのおかげさまで。私たち漁業者だけでは当然とれなかったものを、皆さんのおかげでとれたというのを、まずこの場をおかりまして、関係者の皆さんに感謝申し上げたいと思います。

その上で質問ですが、まず、神山先生にですが、昨今、海水温が温暖化で非常に上がってきているのです。我々志津川でも、これまで獲れない魚が獲れるようになって、逆に魚市場でもかなり水揚げで非常に心配事でもあるのですが、今後、このような海水温が上がっていったときに、カキにどのような影響があるのかを、もし先生から、こういうことが予想されますとか、何かありましたら、教えていただきたいのと、あと、佐々木先生にですが、先ほどうちの後藤部会長に販路の開拓云々の話もあったのですが、逆に私たちもそこが一番どうしたらいいかが本当に課題なのです。南三陸町は、先ほどもちょっとお話がありましたように、F S Cの国際認証、私たちもA S Cの国際認証、そして、ラムサール条約の湿地登録ということで、すばらしいツールはあると思うのですが、いかにそれを活用して、販路の開拓に進めていったらいいのかを、我々も非常に思いはあるのですが、なかなかいいアイデアが出てこないのが実際のところでありまして、その辺も含めまして、何かいいアイデアがありましたら、教えていただければと思います。お願いします。

○神山（コメンテーター） ありがとうございます。

気象変動等、温暖化の話ですね。私から見ると、西日本のほうが深刻のように感じているのですが、東北でも兆候はとられているので、この先、もっと顕在化する可能性は十分あると思っています。

カキの場合、生死にかかわる直接的な温度の影響は、それほどないと感じていますが、育てる環境への影響、例えば、餌となるプランクトンの量や増えるタイミングが変わってくる可能性が十分あると思います。その変化の仕方が、カキ養殖へ影響を及ぼすと思いますが、それは今の段階ではわからない状況です。おそらく場所、場所によって変わってくるので、それぞれの場所に応じてどうなっていくかを考えていく必要があるという気がします。

この辺のことは、先々の試験研究課題の一つになると考えていますので、今後の我々の業務に反映させていきたいと思っております。

○佐々木（コメンテーター） お尋ねのありました販路ですね。さまざまな取組みが地方ごとに芽生えていると思います。私は北海道大学ですから、北海道の事例をお話ししたいのですが、例えば、小樽の漁協では、もちろん組合に手数料も払いつつ、その上でちゃんと適正に申告した上で、「食べマルシェ」というネットサイトを利用している事例があります。このサイトはボリュームは売れないのですが、お客様の声がリアルに返ってくる。お客様とコミュニケーションをとりながらモノを販売することができる。例えば、小樽の漁業者さんですと、ミズダコをボイルしたものと、あとは塩水ウニをやっています。

そこで、どういうことが起こっているかといいますと、ボイルしたタコを売っていますが、お客様からの声があつて、この歯ごたえがどうだとか、鮮度がどうのこうのと細かなレスポンスがある。その漁業者さんは何をしているかといったら、わかった、とにかく日本一の鮮度ですぐボイルしたものを水揚げしたいというので、ほかの漁師さんが持っている船外機の3倍ぐらい大きなスズキの巨大な船外機をつけて、真っ先に漁場から帰ってきて、自分のところの釜で早朝煮て、すぐに出す、生産局面にも意見を反映した取組みをされているのはすごいなと思います。単価の向上の実現幅は相当ありますので、ほかの漁業種類も含めて、お1人で2,000万円ぐらいの年間の売上があるということですね。

そういった取組みをされている方も小樽でいらっしゃいますし、その隣に石狩湾漁協があるのですが、そこは個人の取組みというよりも、漁協全体として、いかに直接売っていくのか、お客様に届けるのかということで、まさに漁協の前を開放して、毎週販売事業を展開しています。あそこは場所的に札幌からのアクセスが1時間ぐらいと、いわゆる都市近郊型の漁業ができる立地条件もちろんあるのですが、そうした中で、札幌からのお客様を漁協周辺に招いて、そこでお母さん方、婦人部の方々が、お父さんがとってきたものを手塩にかけて加工して、それをコミュニケーションしながら売っていくと。

2つの事例ともに、ともすれば漁協さんを置き去りとした体制になりがちな直売事業が、まさに漁協も応援する形で実現できているのがおもしろい取組になっています。

もちろん、もっと細かく見れば、例えば、カキであれば、むき身作業を省くために、一斗缶の中にカキをどんどん詰め込んで、一斗缶販売みたいな形で消費者のニーズをつかむ事例もあります。ただ、なかなか差別化が難しいかなと。差別化をどうしていくのかというのが、例えば、カキでは、認証を取られたということのようですし、さらに今回のこう

というような受賞を一つのストーリーとして、いかに消費者に語りかけていくのか、ストーリー化を意識されて販売されるといいのかなと思ったりしているところです。

○生田（コーディネーター） よろしいでしょうか。

○会場（阿部） そういうところで、私たちが日本で最初のASC認証取得なのですが、現在、宮城県内は、石巻のほうでも3地区が取って、県内生産量の約6割弱がASC認証になっていると思うのですが、ASC認証の認知度がまだまだ低いのがそのとおりなのですね。私たちもいろいろな企業さんにも来ていただきまして、実際に我々のカキならカキ養殖場を見てもらうなり、漁師さんたちと意見交換してもらうなり、いろいろなPR活動はしてもらって、とにかく現場に来てもらって、こんなに一生懸命つくっている、立派なカキをつくったんだよというのを見てもらうようにはしているのですが、その辺も、すぐ1年、2年で結果が出せるものではないとは思いますが、地道な活動が多分必要だとは思いますが、その辺も踏まえて、早急な方策というのは難しいとは思いますが、いろいろな取組みはやっているものの、何となく頭打ちではないけれども、そんなところもあったものですから、何かいろいろなアイデアが、というのを今日は楽しみにして、聞きたいと思いました。

○佐々木（コメンテーター） ちょっと追加で。なぜストーリーにこだわったかといいますと、成功している事例の方のお話を聞くと、自分がこだわっている部分をくどいぐらいに伝えようとする努力をされているのですね。ターゲットとされている方は、可処分所得の高い層の方が多いです。そうした方々が何をニーズとして持っているのか。例えば、主査とも「フレッシュかあちゃん」のところに行きましたが、漁村の方というのは本当に良心的だなと思うのですよ。なんでこんな値段で売のですかというぐらい。

○生田（コーディネーター） 魚はタダだと思っている。地元の漁師さんは。

○佐々木（コメンテーター） なんでこんな値段でこんないいものを売ってしまうのだらうと思ったわけですよ。可処分所得の高い方に対して、水産物は高級品になりつつありますし、それをどう売っていくのか。そういう人方はうんちくがとにかく好きですよ。要するに、ある種自分が食べているものは特別感があるものなのだとということをいかに説得的に伝えていくのかは、浜の方は皆さんいい人過ぎるし、あまりそういったことをダラダラしゃべるのは恥ずかしい、みたいな気持ちのある方が多いとは、思うのですが、実はそういった価値観を一つ脱却して、そういった方々の懐に飛び込んでいって、ストーリーを訴えて、うんちくをいって、その人方が悦に入れるぐらいの何かお話を語りかけていくと

いう努力を続けていく必要があるのかなと思っています。

それを耳障りだと感じる方が大多数ではあるのですが、欲している方々は、むしろそれを聞きたいという意識があるとご理解いただきたい。それを聞くためにお金を払うのだというぐらいの気持ちでいると。水産物はなかなか差別化が難しいじゃないですか。でも、やっぱりそういったうんちくの部分に付加価値をつけていく努力というものを浜はもっと持っていくべきなのかなと、私は最近感じているところです。もうご努力されている方にこうやって偉そうに言うのは大変恐縮なのですが、今、そういうふうに思っております。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。佐々木先生、ぜひコンサルとして今度は戸倉出張所に行っていただければと思います。

ほかに会場で何かご意見とか。

○会場 東北区水産研究所の木所と申します。本日は非常に有益な成果の発表をありがとうございます。

最後のほうでいろいろ漁業とか資源管理の話が出てきたと思うのですが、今回、後藤先生の成果を聞いていて、私のほうで気になったというか、興味を持ったのは、スライドの5番と6番のところで、震災前の養殖漁場の様子、過密な状態と、現在の養殖漁場の様子、かなり整備された状況、こういったふうに、非常に混乱した状態から非常に整備された状態に持って行って、それでうまくやっていると。これは、よくよく考えてみると、漁業にも当てはまる状況かなと思ったりするわけですね。今、資源管理が進む中で、漁獲量の削減をする中で、今、過密状態にあるものを整備しなければいけない。その中でも、今回は養殖業を事例とした話題でしたが、関係者間の協力と計画、また、後藤様の発表の中で、何度もありました、悲観的にならずにやるとか、やってみる。それでだめなら、また考える、こういった一連の取組みというのは、今回の事例を漁業管理とか、そちらのほうにも応用できる、そんな点で非常に感銘を受けたところがあります。

そういった点につきまして、今後、さらにこういった点が応用可能なのだとか、こういったところも考えると漁業にも何かできるんじゃないかとか、そういった視点で何かコメントをいただけると非常にありがたいと思うのですが、何かありましたらお願いします。

○後藤（業績発表者） 意見ありがとうございます。

いろいろな取組みは、何もなくなって、苦し紛れに生まれたような感じが多いのですが、最近考えて、後からいろいろな効果があったのかなということが結構ありまして、設置するのに、GPSを使って図面をつくって設置していますので、あと、仮にもう一回津波が

来てなくなったとしても、今のをつくり上げるまでには、設置に4～5年かかったのですが、もし次に同じようなのが来ても、おそらく2カ月あれば十分復活できるかな。その年にすぐ再生できると思います。

あと、仮に3月11日頃であれば、今の方法ですと、カキの水揚げが進み施設が軽くなっていますので、被害はあったとしても、かなり少なくて済むのかなということを考えます。

あと、ポイント制で思うのは、最初はこれも苦し紛れなのですが、これで若い人がものすごく活躍する場がふえましたし、これを導入しないと、今の成功もないのかなと考えましたし、これは大変ですが、一旦、例えば権利がなくなったとしても、また世代が変わると増えるようなところがありますので、そういう意味では、みんなで使うという意識が高まりました。

あと、ASC認証は、最初、こんなことをやったら駄目かなという認識だったのですが、規則を守ることが何で今まで苦痛だったかという、誰も守らないのを守りましょうと言うからものすごく苦痛なのですが、みんなで守ると、これはものすごく楽というか、漁協の役員とかは、なかなかやり手がなかったし、大変なのです。それは何で大変かという、「守らない文化」というのがあるので、これをみんなで守ると、変な漁師がコンプライアンスとガバナンスというのは、どうしても。でも、ちゃんと守れば、みんなで守ることが一番大事で、そうすると、お互いで信頼関係が出ます。信頼関係が出ると、円滑に回りますので、本当に理想の漁業で、理想と経営は違うような感覚でずっときたのですが、理想を追求して絶対間違いはないですし、守れる。うちの漁協が一番悪い、誰も守らない漁協だったので、これが、今はみんなで守るように変わりましたので、必ずどこの人でも変われると思います。

○会場（木所） ありがとうございます。GPSも最近の漁業のデータ化につながっていると思いますし、ポイント制も、IQとか、あと、みんなでルールを守るというのも漁獲量の申告とか管理とかにつながると思いますので、やはりこういった事例もいろいろなどころに応用していただくと、日本の水産業に非常に役立つ事例かと思います。どうもありがとうございます。

○生田（コーディネーター） ほか、よろしいでしょうか。

こちらからご指名させていただきたいのですが、今回、宮城県の方が多いのですが、青森県から田村さんはいらっしゃいますか。もし何か青森でのお考えがあれば。

○会場（田村） 後藤さんのすばらしいご報告を、非常に興味深く聞かせていただきまし

た。青森県には、マガキというか、カキ類の養殖等はありませんが、陸奥湾ではホタテ貝を過密状態で養殖している状態にあることから、この取り組みが何かしらのヒントになればと思って、今日、傍聴させていただこうかと思って来てみました。

実を言うと、陸奥湾においても、震災ではないのですが、高水温で一度ホタテが壊滅的な状態となったことがありまして、そのときを捉えて適正養殖を普及員の立場から指導した経緯はありましたが、そういう指導をしたとたんに飛ばされたのかは不確かですが、配置替えとなり、別なところで活動することになったことを思い出していました。

漁業者は、所得に直接繋がらない行動には後ろ向きで、直ぐに目先の所得に走ってしまいがちであり、誰よりも多く、誰よりもずる賢いところが、うちの県でも見受けられます。実際、養殖は外海では難しいとされ、最近になり、若干、サーモン養殖の取り組みが始まりましたが、やはり養殖となれば陸奥湾のホタテが主であり、これで安定的に所得を維持していくような取り組みを今後も継続するとなると、環境も考慮しなければならないのかなと思っていました。

そこで、ポイント制を用いて漁場の利用等を考えているようですが、さまざまに閉鎖的な水域で複合的な養殖業をされているようですが、このことで、何かしらが要因して、急に環境が悪化するということもあるでしょうが、その辺に対する対策といいますか、いろいろとご検討されていることとか、予見されていることとかがあれば、教示していただければと思います。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。いかがですか。異業種間の調整みたいな問題ですが。後藤さんでよろしいのですね。

○後藤（業績発表者） いろいろな調整に関しては、とことん話し合うというか。いろいろな皆さんの意見はもちろん大事ですが、一番は生産者が納得して、納得するまで話し合ってみる。万が一、幾らかの期間を試してみてもだめだったら、違う方法に変えようというか。

でも、新しいことをやるというと、最初は必ず、賛成する人もいますが、変えるということに対して反対は多いのですが、でも、試してみたい、試したいという気持ちは必ず皆さん持っているとは思うのですね。あと、うちのほうは、変えるときに、「がんばる養殖」という支援のシステムを使いましたので、それなくしてはなかなか変えられなかったのかなと。

あと、環境に関しては、環境は負荷をかけないほうがきっといいと思うのですが、最初の施設間隔の40メートルという調整は、科学的根拠がなかったのですよ。科学的根拠がな

かったのですが、後々、いろいろな研究機関の方に調査を依頼したり、発表してもらおうと、カキ1個が大体400リットル吸うのですよね。カキの小さい体でお風呂いっぱい海水を飲み込んで吐いている。これですと、今、40メートルという間隔で長さ100メートルの養殖施設1台に大体6万個から10万個のカキが養殖されているので、10万個で計算すると、必要な海水に量はおそらく4万キロリットルとなり、何とか確保できたのかな。これを、今まで15メートルでも、30メートルなら倍以上だから、30メートルでもいいんじゃないかなという声も当然あったのですが、30メートルにしたら失敗していて、幾らか環境に余裕を持たせるといふか、40メートルというのは、最初はヤマカンだったのですが、後々科学的根拠がついたといふか。それでうまくいきました。

あと、環境をよくしましたら、一番問題だった種苗。種苗の生産が一番心配したのですね。1年で回すと、親貝がほとんどいない状態が1年。そうしたら、一番心配したのですが、種苗がものすごくとれるようになりました。とれ過ぎるようになって。以前は、親貝がいっぱいあったときは、なかなかとれなかったのに、震災後、余裕を持たせたら、どこでもとれるようになりまして、最初は喜ばれていたのですが、だんだんあまりとれ過ぎるぐらいになったといふか、負荷をできるだけ減らせば、カキ自体の力を利用するといふか、あまり多いと、カキは自分で減らす役割をするのですね。だから、健康なカキが育つということが、海域の健康がいい状態かな。健康で良質なカキが育たなくなるということは、きっと海に負荷がかかっているということに間違いないと思います。青森でも立派なホタテガイをつくったり、いろいろなことで私たちも知っていますし。

あと、同じように、ホタテガイも成育期間が短くなったのですが、環境に余裕を持たせて、最大限に効果を検証ということは絶対必要だとは思いますが。

すいません、なかなかうまく説明できないのですが、以上です。

○生田（コーディネーター） よろしいでしょうか。

話は尽きないですが、そろそろ締めなくてはならなくなってきましたので、最後に、各パネリスト、今のパネルディスカッションを踏まえて、一人ずつ感想を述べて締めたいと思います。まず後藤部会長のほうから一言ずつ。

○後藤（業績発表者） 今の話の続きになるのですが、私たちは震災前、研究機関とか大学の先生とか、全然連携もなくて、調査も聞く耳を持たずにきたのですが、研究機関の先生方、いろいろな機関の先生方、あと、全く経験したことのない人の意見というのは、ものすごく大切に、30年も40年も養殖をやっていると、わかり切っている、わかったのか

など錯覚していましたが、全然カキのことも知らずに、養殖も一からというような感じで、ゼロからスタートしたのですが、そういう意味では、皆さんに本当にお世話になりましたし、これからもいろいろな研究機関の先生方の意見はずっと大切にしていきたいと思えますし、また、漁業は、農林水産も含め、一次産業はこれからきっと大切ですし、必ず伸びる産業だと思いますので、皆さん、今後ともご支援をよろしくお願いしたいと思えます。

以上です。今日はどうもありがとうございました。

○生田（コーディネーター） 次、神山さんから。

○神山（コメンテーター） 今回の受賞の内容については、先ほども申し上げたとおり、非常に感心したところです。いろいろなお話、説明を聞いていると、みんなで話し合っ決めていくというステップというのが非常に大事というのがよくわかったと思えます。これは我々にも通じるかと感じています。いろいろ難しいことでも、皆と話し合っやっていくのは、どの世界でも共通することだなと感じました。

カキ養殖を含め水産業のいろいろな問題に対し、我々試験研究機関もいろいろと課題を背負っているところなので、現場の方々やこの場合は宮城県の方が多いですが、都道府県の方々と一緒に進んでいきたいと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

次は、佐々木さん。

○佐々木（コメンテーター） 普段から思っていることなのですが、今後、水産業は、人口減少社会の到来のなかでマーケットの縮小リスクに直面します。だから、成長産業として輸出というもの、そういった部分でアクセルを踏んでいくことも大事なのでしょうが、国内のマーケットの縮小というものに対しても取りこぼさないような取組が必要になってくる。つまり、水産業も筋肉質になっていくべきだと思っているのですね。

それはどういうことかという、一般的な企業もそうだと思うのですが、スタートアップ時はある程度売上を追求して、規模の拡大という部分にまず重きを置いてシェアをとっていきような形があると思うのですが、ある程度成熟した産業になっていけば、より筋肉質、つまり、どういうことかといえば、企業的に言えば、営業利益率を追求していくと。いかにそこから利益を上げるのか。売上ではなく営業利益率みたいな部分にこだわっていく必要があるのかなと普段考えているわけですね。

まさに今回の取組みは、そういった部分にかなり力を入れられた。その結果として、結果がついてきたのだと思うのですが、筋肉質にいかにしていくのかを、養殖だけじゃな

くて、一般的な漁業もそうだし、例えば、水産加工業もそれを目指していく必要があると思うのですね。

私、実は前任校が鹿児島大学だったのですが、鹿児島は、カツオ節の三大産地のうちの2つが鹿児島なのです。指宿と枕崎があって、枕崎の取組みで、これはまさに筋肉質だなと思ったのが、一般的には我々が口になっている「だし」というのは、「荒節」というカビ付けをしない段階で削ってしまうものがほとんどなのですが、一方でいわゆる高級品としての「本枯節」があるわけですね。枕崎市のある企業は、荒節の大量生産では利益率がそれこそ上がらないからといって、料亭とか一部の購買力の強いところにターゲティングして、本枯節の生産に特化しようという取組を強力に進めました。

その結果、従来、技能実習生に依存していた生産構造を完全に日本人だけに置きかえて、人件費も固定費も下げるといった形でやったわけですね。そういった部分の筋肉質な水産業というものを実現していくのも一つの成功の筋道としてあると思うのです。全部がそうではないと思います。全地域がそれを実現できるとは思いませんが、そういった部分で勝ち残れるという一つの方程式としてそこがあるのかなと思った次第です。

まさに今回の事例は、そのこの部分の方程式に合っていると強く感じた部分ですので、それを適用できる地域も、まだ宮城県、さらには日本全国にあると思いますので、そうした部分に対する大きな示唆に今回の取組はなったのかなと思っている次第です。

いい勉強をさせていただきました。どうもありがとうございました。

○生田（コーディネーター） ありがとうございました。

最後に小野寺さん、お願いします。

○小野寺（コメンテーター） 私は、戸倉のカキ部会の取組を見まして、よいカキが生産できたということが証明されました。また、経営が安定したこと、後継者がふえたこと、そういったことがみんなで共有できたという形で、団結力が強まったことは非常にいいのかなと思います。そして、「戸倉っこかき」のブランドを守っていこうという意識を皆で持ったのもよいことだと思っております。

今後は、種苗の安定生産とか、未産卵ガキ、別な「あまころ牡蠣」というのもありますから、そういった部分の販売強化の取組み、そして、六次産業化の取組み等も期待したいなと思っております。

戸倉のカキ養殖が、将来、先ほど、10年、20年と言っていましたが、50年も100年もつながらる漁業として、その道しるべが示されたことで、これを後継者、次世代の仲間を引き

継いでいてもらいたいなと思っております。

以上です。

○生田（コーディネーター） ありがとうございます。

それでは、私から総括させていただきますが、今日のシンポジウム、皆さんご参集いただきましてありがとうございました。今回、一つの成功事例を見せていただいたわけですが、震災という一つの不幸なことが契機だったのですが、そこで新しい連携、研究、漁業者、行政、それが一体となって取り組むことによって、いいことをやれば、ちゃんと成果が上がるんだというのが今回証明されたのではないかと思います。ですから、そういった科学的な知見に基づいて、何かを解決に導いて、しかもそれを経営という概念からちゃんと産業に結びつけていくということですよ。そういうことがちゃんと一貫してできたから、戸倉出張所のカキ部会がこれだけ成功して、後継者も増えてきたという、当たり前のことなのかもしれないのですが、なかなかこれまでそういった当たり前のことが取り組めなかったという現実があったのだと思います。

ですから、我々もこれを真摯に受け止めて、今後、それぞれの立場で水産業、日本の水産業は、非常に厳しいところがありますが、水産業がなくなることは多分私はないと思いますので、逆に、世界中の人たちが、今、水産物を求めているような状況ですので、そういったものに対して我々がどう応えていけるかというのは、今後、この成功事例をさらにどうやって発展させていくかということにかかわっているような気がしますと、今回、私、印象深く拝聴いたしました。

今日のシンポジウム、皆さん参加していただきましてありがとうございました。あと、このディスカッションに参加していただいたパネリストの皆さんに、最後、拍手で感謝したいと思います。

どうもありがとうございました。（拍手）

○生田（コーディネーター） それでは、進行を事務局にお返しいたします。

○司会 演壇の皆様、長時間にわたりまして有意義な意見交換、ありがとうございました。また、会場の皆様方からも熱心にご参加いただきまして、まことにありがとうございました。

以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウム、終了いたします。

お帰り際には、簡単なアンケート用紙をお配りしておりますので、ご記入の上、受付にお返しいただければ幸いです。よろしく願いいたします。

本日はまことにありがとうございました。（拍手）

－閉会－

令和元年度（第58回）農林水産祭
第24回「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【進取の精神で取り組むむらづくり】

—業績発表及びディスカッションの内容—

開催日時 令和2年2月26日（水）13時30分～16時00分
場所 ホテルサンパレス球陽館 2階 パレスコート
沖縄県那覇市久茂地2-5-1
主催 農林水産省・公益財団法人 日本農林漁業振興会



公益財団法人 日本農林漁業振興会

令和元年度（第58回）農林水産祭
「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」
【進取の精神で取り組むむらづくり】

《スケジュール》

13:30~16:00

（敬称略）

- | | | | |
|-------------------------------|---------------------------|--|-------------------------|
| 1 | 開 会 (13:30) | 公益財団法人 日本農林漁業振興会 常務理事 | 小栗 邦夫 |
| 2 | 挨拶 | 沖縄総合事務局農林水産部長
沖縄県農林水産部農漁村基盤統括監
伊江村長 | 田中 晋太郎
島袋 均
島袋 秀幸 |
| 3 | 選賞審査報告 | 農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査
(茨城大学農学部教授) | 福与 徳文 |
| 4 | 業績発表 | 令和元年度むらづくり部門天皇杯受賞
伊江村字西江上区 区長 | 知念 邦夫 |
| . . . 休 憩 (14:30~14:40) . . . | | | |
| 5 | ディスカッション (14:40)
(登壇者) | <ul style="list-style-type: none"> ・コーディネーター
福与 徳文 (3に同じ) ・業績発表者
知念 邦夫 (4に同じ) ・コメンテーター
合瀬 宏毅 (農林水産祭中央審査委員会委員 (NHK解説主幹))
島袋 秀幸 (2に同じ) 大島 順子 (琉球大学国際地域創造学部国際地域創造学科
観光地域デザインプログラム准教授) | |
| | (内容) | <ul style="list-style-type: none"> ・意見交換、質疑応答 ・総括 | |
| 6 | 閉 会 (16:00) | | |

「優秀農林水産業者に係るシンポジウム」（第24回）出席者

R2.2.26（敬称略）

区 分	氏 名	所 属 ・ 職 名 等
業績発表者	知念 邦夫	令和元年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯受賞者 伊江村西江上区 区長
コーディネーター 及び選賞審査報告	福与 徳文	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 （茨城大学農学部教授）
コメンテーター	合瀬 宏毅	農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会委員 NHK解説主幹
コメンテーター	大島 順子	琉球大学国際地域創造学部国際地域創造学科 准教授
コメンテーター	島袋 秀幸	伊江村長
挨拶	田中 晋太郎	沖縄総合事務局農林水産部長
	島袋 均	沖縄県農林水産部農漁村基盤統括監
	島袋 秀幸	伊江村長
司会・進行	小栗 邦夫	（公財）日本農林漁業振興会 常務理事

むらづくり部門

出品財 むらづくり活動

伊江村字西江上区

沖縄県国頭郡伊江村



1 地域の概要

伊江村は、沖縄本島の本部半島から北西9kmの洋上に位置する周囲22.4kmの島で、1島1村の農村である。産業は第1次産業が主体であり、さとうきびや花き、葉たばこ、野菜、畜産といった農業が営まれている。気候は亜熱帯性であり年間を通じて植物等の育成には好条件であるが、雨水の多くは地下に浸透し海へ流れ出てしまい、水不足に悩まされてきた歴史がある。

2 むらづくり組織の概要

西江上区の運営は行政を行う区行政委員会を中心に、老人会、婦人会、青年会、子供会、OB会が参画している。また、西江上区が運営・管理する西部かん水組合や集落内の排水路・道路の清掃を行う伊江地域資源保全の会と連携しむらづくりに取り組んでいる。

3 むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

① 昭和50年代前半まで、主要な産業が農業に限られる状況で農業生産額が低迷し、過疎化が急速に進行する中、若者が減少し地域の活力が低下するとの危機感があった。そこで、儲かる農業、若者に魅力ある農業を目指し、かんがい農業を導入するために西江上区民が話し合い、水確保の事業の推進等を区民が一丸となって取り組んだ。昭和55年には西部かん水組合を発足し、伊江村でのかんがい農業を先駆けて行った。西江上区の農家所得が増加したことにより、かんがい農業の重要性を村内に浸透させるに至った。

② 現在は、担い手が増え、地域の牽引役となってIoTなど新技術導入も図られている。また、若い農業者が中心となり伊江村青年農業交流会、女性経営参画の促進のための農業簿記経営講座などを開催し、経営の向上を目指した担い手育成に取り組んでいる。

③ 農業振興が図られたことにより、村内で生産する肉用牛やラム酒、黒糖やピーナツの加工品等、数々の特産品が作られるようになり、6次産業化にもつながっている。

(2) 生活・環境整備面

① 耕土流出等の環境への影響を未然に防止するため、地域を挙げて環境保全に取り組み、併せて子供達への農業体験活動も実施している。農業生産の大切さを次代へつなぐ活動の中、地域住民が更に一体となり、農業農村の環境保全、良好なアメニティー形成を進めている。

② 西江上区において、平成15年から始まった修学旅行を主とした民泊は、当初は年間3校、300人余りの受入れであったが、現在では、村全体に拡がり、年間300校、4万人の受入れまで拡大した。また、修学旅行生が地域住民と共同で海岸や史跡の清掃活動に取り組むなど、都市と村の交流における農村の魅力を発信している。

4 他地域への普及性と今後の発展方向

地域の活性化のために地域住民が一丸となって農業振興を図ることで、安定した農業所得の確保、特産品の開発のほか都市農村交流活動等に取り組んでいる事例であり、今後も取り組みの継続が期待できる。

離島においていち早く農業の高付加価値化に着目し、地域住民が地域の活性化を目指し進取の精神をもって主体的に活動する取り組みは、全国におけるむらづくりのモデル事例になり得るものである。

【開会】公益財団法人日本農林漁業振興会 小栗 邦夫

敬称略（以下同じ）

ただいまから優秀農林水産業者に係るシンポジウムを開催いたします。

私は農林水産祭事業の事務局を担当しております日本農林漁業振興会の常務理事を務めております小栗と申します。よろしくお願いいたします。

本日は、コロナウィルス問題や豚熱発生など、なかなか厳しい時期でございますが、多くの方々に参加していただき、まことにありがとうございます。

このシンポジウムは、農林水産祭で表彰されました優秀事例の成果を関係者の皆様方に広くお伝えすることにより、わが国の農林水産業の発展の一助になればと、例年、開催しているものでございます。

農林水産祭事業は、昭和37年にスタートいたしまして、今年が58回目を迎える伝統ある事業でございます。このうち、表彰事業は現在七つの部門に分かれておりまして、過去1年間に各種のコンクールで農林水産大臣賞を受賞されました500点近い出展がございまして、この中から厳正な審査を経まして、天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞、いわゆる3賞が授与されることになっております。このうち、特に天皇杯につきましては、わが国で天皇杯なるものが実は30ございまして、そのほとんどはスポーツ関係で、有名なところでは正月の天皇杯サッカーなどがございしますが、全部で30あるうちの七つが農林水産分野にいただいていることで、ご皇室の農林水産業に対する熱い思いを非常にありがたく思っているところでございます。

今年度も、昨年11月、大嘗祭当日に明治神宮会館におきまして表彰式式典が行われ、それから天皇杯受賞者につきましては、年明けの1月に皇居に参内いたしまして、天皇、皇后両陛下にご報告、業績説明をなされたところでございます。

本日は、このうち、むらづくり部門で天皇杯を受賞されました沖縄県伊江村西江上区の区長の知念様にお越しいただきまして、改めてお話をいただきます。また、学識経験者の方々とも意見交換をお願いしているものでございまして、受賞後はますますお忙しくなられたことと思いますが、快くお引き受けいただいたところでございます。改めまして、お祝いと御礼を申し上げる次第でございます。

それでは、本日は沖縄総合事務局から農林水産部の田中部長にご参加いただいております。国を代表いたしまして、ご挨拶をいただきます。

【挨拶】 内閣府沖縄総合事務局農林水産部長 田中 晋太郎

ご紹介いただきました内閣府沖縄総合事務局農林水産部長の田中でございます。本日のシンポジウムの開催に当たりまして一言ご挨拶申し上げます。

初めに、令和元年度農林水産祭むらづくり部門において天皇杯を受賞されました伊江村字西江上区の皆様方、まことにおめでとうございます。西江上区では区民の皆様が一体となり、農業の担い手や後継者の確保、6次産業化の取組みに加え、民泊を初めとする都市農村交流活動など、幅広い地域活動を展開し、農業、農村の振興が図られております。今回の受賞はこうした取組みに見られる進取の精神、「イーハッチャー」も評価されたものであり、これに深く敬意を表するものであります。

県内各地では地域活性化の実現に向けてさまざまな取組みが展開されております。沖縄総合事務局といたしましては、農泊、あるいは6次産業化の推進を通じて今後ともこうした取組みを後押ししてまいります。

最後に、沖縄県を初め、本日のシンポジウム開催に当たりご協力いただきました関係機関、団体の皆様に感謝申し上げますとともに、本日のシンポジウムにご出席の皆様の今後の取組みの参考、一助になりますことを祈念申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。本日はまことにおめでとうございます。

令和2年2月26日。沖縄総合事務局農林水産部長、田中晋太郎。

本日はおめでとうございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。続きまして、本日の開催に当たりましては、地元の沖縄県及び伊江村の関係者の方々に大変お世話になったところでございます。この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。本日は沖縄県からは農林水産部の農漁村基盤統括監の島袋様に参加いただいております。県を代表して、ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】 沖縄県農林水産部長 長嶺 豊

（代読 沖縄県農林水産部農漁村基盤統括監 島袋 均）

皆さん、こんにちは。沖縄県農林水産部の島袋でございます。本日、長嶺農林水産部長が県議会对応のため祝辞を預かってまいりましたので、代読させていただきます。

令和元年度農林水産祭優秀農林水産業に係るシンポジウムが関係の皆様のご出席のもと盛大に開催されますことを心よりお喜び申し上げます。また、本シンポジウム開催にご尽

力賜りました農林水産省及び日本農林漁業振興会を初め、関係の皆様は厚くお礼を申し上げます。

本シンポジウムは、令和元年度農林水産祭むらづくり部門で天皇杯を受賞されました伊江村字西江上区が取り組んだむらづくりの業績を広く普及することを目的に開催されるものと聞いております。沖縄県はこれまで伊江村からの要望により、西江上区ほか、島内各地域へ国の補助金を活用したため池整備やかんがい排水事業により農業用水の確保及びかんがい施設等の基盤整備を行い、農業振興を支援してきたところでございます。西江上区は地理的に厳しい離島の条件下で、区民が進取の精神を持って整備したため池やかんがい施設をうまく活用し、伊江島全域に広がった農業振興の先駆者となり、6次産業化、伝統芸能伝承、修学旅行民泊など、さまざまなむらづくりに取り組んでこられました。西江上区のこれまでの取り組みは農業振興により発展したモデル地区の一つとして他地域でのむらづくりや地域振興の参考になるものであり、その取り組みが全国の農村にも広く普及することを多に期待しているところでございます。

結びに、本シンポジウムのご成功と本日お集まりの皆様の今後ますますのご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、挨拶いたします。

令和2年2月26日、沖縄県農林水産部長、長嶺豊代読でございます。（拍手）

○司会 ありがとうございます。続きまして、西江上地区の伊江村からは島袋村長に参加いただいております。ご挨拶をお願いいたします。

【挨拶】伊江村長 島袋 秀幸

皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました伊江村長の島袋でございます。本日はこのシンポジウムにおかれまして、伊江村郷友会きょうゆうかいからも多くの皆さんがご出席をいただきまして、まことにありがとうございます。それでは、ご挨拶を申し上げます。

本日、農林水産省と日本農林漁業振興会によります令和元年度第58回農林水産祭優秀農林水産業者に係るシンポジウムの開催に当たりまして、天皇杯を受賞しました伊江村字西江上区地元の村長としてご挨拶を申し上げます。

初めに本日、優良事例として業績発表を行います西江上区の皆様に対し、令和元年度農林水産祭むらづくり部門天皇杯の受賞に改めてお祝いを申し上げる次第であります。そして、推薦などにご尽力をいただきました沖縄総合事務局を初め、沖縄県関係機関の皆様に対しまして心から感謝を申し上げます。

さて、伊江村は沖縄本島の本部半島から北西9キロの洋上に位置する周囲22.4キロメートルの島で、人口約4,500人の1島1村でございます。西江上区は伊江島の中央やや北側に位置し、人口約670人、農家戸数約140戸で、島の中でも農業が盛んな地域でございます。本島は水不足問題、戦火、基地問題の苦境を耐えて忍んできた歴史があります。特にその中でも西江上区においては水あり農業をいち早く展開した地域であり、キク、畜産、野菜、葉たばこなどにおいても優秀な成績を納めており、伝統芸能やスポーツ面においても区民が一丸となって、創意工夫を重ねながら、農業の振興や伝統芸能の継承に取り組んできた地域であります。これから行います西江上区知念区長の業績発表、農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査、茨城大学農学部教授の福与教授を中心としたディスカッションを通してその取組みが優良事例として全国の農村にも広く普及、活用されることを大いに期待しております。

結びに、これまで伊江村に対しましての国、県のご協力、ご指導、ご支援に心から感謝を申し上げますとともに、本日のシンポジウムにご参集の皆様の今後のむらづくりの一助になりますことを祈念いたしますとともに、ぜひ伊江村を訪れていただきまして、伊江村西江上区を直に見ていただき、区民との交流を通して、その魅力に触れていただくことを希望いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。

令和2年2月26日。伊江村長、島袋秀幸。

本日はおめでとうございます。

○司会 ありがとうございます。それでは、これから議事に入ります。初めは選賞審査報告でございます。ご報告は農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会の主査であります茨城大学農学部教授、福与先生からお願いをいたします。

【選賞審査報告】農林水産祭中央審査委員会むらづくり分科会主査 福与 徳文
(茨城大学農学部教授)

皆様、こんにちは。ご紹介にあずかりました農林水産祭中央審査委員会委員で、むらづくり分科会主査であります福与です。私からはむらづくり分科会の選賞方法、それからなぜ西江上区が選ばれたのか、それから「進取の精神」に関する考察を加えていきたいと思っております。

この「進取の精神」ですが、先ほどご挨拶の中にもありましたが、昼食会のときに確認したところ、これはやはり伊江島独自の言い方で、伊江島の方々の気性をあらわす「イ

「イーハッチャー」からきているものだと思います。「イーハッチャー」というのは「負けん気」と「進取の精神」、この二つからなっております、それを全国の表彰のテーマにすると、（私なんかはそっちのほうがおもしろいと思うのですが）、わかりにくいというところで「進取の精神」というこ

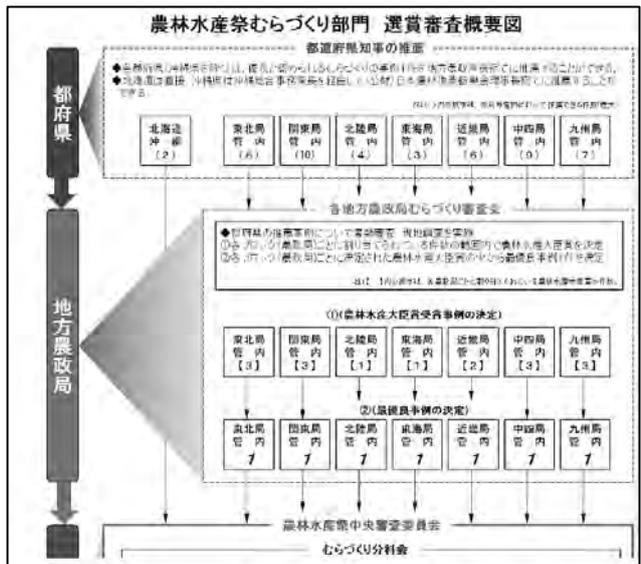
イーハッチャー！

- ・負けん気
- ・進取の精神

伊江村民を象徴する気質で、離島苦、戦災など、苦境を耐え忍んできた歴史があり、忍耐と根性の強い村民性

とになっているところです。この「イーハッチャー」のうち「負けん気」は、恐らく離島苦とか、戦災とか、そういうところから生じてきたのだと思うのですが、今日特に話題にさせていただきたいのは「進取の精神」です。従来のならわしにとらわれることなく、とにかく1番を目指して進んで新しいことをしようとするということで、「水あり農業」とか、驚異的な数字を挙げている民泊事業などというものが実際評価されていくわけですが、この表彰のテーマとなっている「進取の精神」というのは伊江島の「イーハッチャー」が評価されたのであります。

むらづくり部門の賞の選び方をご紹介します。むらづくり部門では、選び方は比較的シンプルです。地方農政局が七つあります。その七つの農政局ごとに農林水産大臣賞が選ばれます。その中でも特に優秀な事例が各農政局から1つずつ選出されます。そうすると、候補は七つになります。ただし、農政局がない地域があります。それが北海道と沖縄です。北海道と沖縄からは別途候補が上がってきます。今回の場合、伊江島の西江上区がそうだったのです。西江上区をむらづくり分科会の中でまず農林水産大臣賞にふさわしいかどうかを審査します。農林水産大臣賞にふさわしいとなったので、ほかの七つとあわせて、



全部で候補が八つになります。その八つの中からさらに三つを現地調査候補として選び、その中から1番、2番、3番を決めて、1番が天皇杯ということになります。ですから、お忘れになっていただくと困るのは、同時に農林水産大臣賞も授与されているということです。

このように各農政局から選ばれた七つと北海道、沖縄県から出てきた西江上区、この事例を含めて、三つの候補を選び現地調査を行いました。

西江上区の現地調査では、村踊を（実際に見せていただいたのは本番の衣装ではなくて、稽古着での演舞だったようですが）見せていただいたり、夜、意見交換をさせていただいたり、翌日、「水あり農業」で戻ってこられた若手農家を視察させていただいたりしました。現地調査の後、分科会をもう一回開きまして、現地調査を行った三つの事例の中からどこがいいかということ議論させていただいて、この西江上区が選ばれたわけです。

次に「むらづくり分科会」における選賞審査基準をお話ししておきたいと思います。ここに示した五つが選賞審査基準になっております。まず一つ目が「むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況」です。それから「むらづくりの合意形成」です。地域の中でどのように合意形成をつくるかということが

選賞審査基準

- ・むらづくりのための自主的な努力と創意工夫の状況
- ・むらづくりの合意形成の状況
- ・むらづくりの推進体制の整備・運営の状況
- ・むらづくりの地域農林漁業の振興とその担い手の育成への寄与状況
- ・むらづくりの豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与状況

が基準となります。それから「むらづくりの推進体制の整備、運営の状況」で、組織がどうであるかということが基準となります。それから実際、むらづくりをやって、それが「農林水産漁業の振興にどう寄与しているのか」です。これはとても重要な点で、西江上区も特にそこが評価されたわけですが、「若い担い手をどうやって育成していくか」という点が評価対象となります。そして、やはりむらづくりですから、「豊かで住みやすい農山漁村の建設への寄与」が重要な評価基準となります。

ちなみに、ここに令和元年度、こういった地域が受賞したのか一覧をお示ししておきます。全部を



説明する時間はありませんので、天皇杯の西江上区のほか、三賞を授与された他の2地区を紹介しておきます。まず、内閣総理大臣賞、つまり2位は福井県の坂井市の一般社団法人竹田文化共栄会が受賞されております。この団体は入会林の管理団体で、それが学区区だったわけですが、地域の学校が廃校となり、その校舎を「ちくちくぼんぼん」と名付けて活用して、そこを基盤として地域づくりを行っているという事例でした。それからもう一つ、日本農林漁業振興会会長賞、これは3位の事例なのですが、山形県の鶴岡市の「ゆらまちつく戦略会議」が受賞されております。ここは漁村でして、市場に出荷できないような小さな鯛などを粉にしておいしい出汁をつくって、6次産業化で売り出していること。それから漁業というものが一般に浸透していないので、DVDを作成して啓発を図っている点などが評価されたと記憶しております。このように全国の幾つもある事例の中から1番に選ばれたのが伊江村の西江上区であります。

西江上区が評価されたポイント、先ほどご紹介した五つの選賞審査基準でどのような点が評価されたのかということについて、内容に関しては後で知念区長さんから、ご報告がありますし、それからパネルディスカッションで詳らかになっていくところですが、私からはどの観点から何が評価されたのかだけをざっとお話ししておきます。

まず評価ポイント1は、「もうかる農業、若者に魅力ある農業を目指して灌漑農業、を導入するために区民が話し合い。水確保の事業の推進に区民が一丸となって取り組んだ」という点です。その結果、農家所得が増大して、一旦島外に出た若者が、「こ

西江上区 【評価ポイント①】

地域農林漁業の振興／担い手育成／合意形成

儲かる農業、若者に魅力ある農業を目指し、かんがい農業を導入するために西江上区民が話し合い、水確保の事業の推進等を区民が一丸となって取り組んだ。現在は、農家所得が増大し、若者が戻り、担い手が増加している。さらに農業振興が図られたことにより、6次産業化につながっている。



キクの栽培



地下ダムの整備

この農業はもうかるよね」ということで戻ってきたということです。またそれを契機に6次産業化が進んで農業振興が図られているということで、「地域農林業の振興」、「担い手育成」、「合意形成」という点が評価されました。これは簡単に言うと、農業がもうかれば、若者が戻ってくる。なぜ農業がもうかったかという、土地改良をやったからだ。まさに「絵に描いたような形」になっているということが評価されました。もちろんすごく苦勞なさったと聞いています。それらの点は地元からのご報告、あるいはパネルディスカッションでお聞きになっていただきたいと思ひます。

それから評価ポイント2なのですが、「豊かで住みやすい農山漁村の建設」という点と関わりるところです。これも先ほどから話題になっています民泊です。西江上区で始めて、

村全体に広がって、これも年間4万人以上という驚異的な数字となっています。修学旅行生を中心に引き受けているとのこと。当然、修学旅行生は村の人たちからいろんなことを学ぶわけですが、その修学旅行生からもいろんな刺激を島の方々も受けているだろうと思います。それから村の中

でも耕土流出等、環境への影響を未然に防止するために、地域全体で環境保全に取り組んでいるということが評価されて、「豊かで住みやすい農山漁村の建設」という観点からも評価が高かったということでもあります。

それから、先ほどから村踊とかが出ておりますし、現地調査のときに御馳走になった郷土料理、そういった文化的なものをつなぎとしながら、区行政委員会を中心に、西部かん水組合や伊江村生活研究会（女性たちのグループ）が連携して、むらづくりに取り組んでいるということで、「推進体制の整備・運営」という点が評価されているというのが評価ポイントの3です。

先ほど私がお示しした選賞審査基準の五つのうちの一番上の「自主的な努力と創意工夫」がこれまでの話では出ておりませんが、まさにここが一番評価されたところの「イーハッチャー」です。評価ポイントの1番に挙げるべきものなのですが、全国に「イーハッチャーでいこう」と言っても、ちょっとわかりづらいので、ここに改めて、まさに「自主的な努力と創意工夫」、「進取の精神」、「イーハッチャー」という点が評価されていることを挙げさせていただきます。

残された時間で私から「進取の精神」がなぜ伊江村という離島といますか、島で育まれたかを、民俗学的、社会学的な考察を加えさせていただきたいと思います。スライドには民俗学の巨人の2人、柳田國男と宮本常一を挙げておりますが、次のようなことを述べ

西江上区 【評価ポイント②】

豊かで住みやすい農山漁村の建設

西江上区ではじめた修学旅行生を中心とした民泊は、村全体に広がり、年間4万人以上受け入れている。修学旅行生は地域住民と共同で海岸や史跡の清掃活動に取り組むなど、村民との交流により伊江島の魅力を発信している。また、耕土流出等の環境への影響を未然に防止するため、地域を挙げて環境保全に取り組んでいる。




農作業体験 (村HPより) 民泊農村式

西江上区 【評価ポイント③】

推進体制の整備・運営

西江上区の運営は、区行政委員会を中心に、老人会、婦人会、青年会、子供会、OB会が参画し、西部かん水組合、伊江地域資源保全の会、伊江村生活研究会などと連携し、むらづくりに取り組んでいる。




郷土料理 村踊の伝承

西江上区 【評価ポイント④】

自主的な努力と創意工夫

イーハッチャー!

ておられます。「土着民に新しい事を持ってきて吹き込む漂泊者」とか、「村をあたらしめていくためのささやかな方向づけをする世間師」などということを行っています。また、「漂泊者」や「世間師」にはいろいろな意味がありますが、ここでは「よそ者」のことだと思ってください。これらは、むらを新しくして行くための「よそ者」の役割を述べています。社会学者の鶴見和子さんが「常民」、これは島に定住している皆さんということにすると、柚に定住している皆さんが「社会変動の担い手」になるためには、つまり「イーハッチャー」でどんどん新しいことに取り組むためには、島の人みずからが「定住-漂泊-定住」のサイクルを通過するか、漂泊者（よそ者）との「衝撃的な出会いが必要である」ということを述べています。まさにこういった事態が伊江村には否応なしに生じているのではないかと思います。定住-漂泊-定住のサイクル、これは島に高校以上がないので、否応なしに若者は、一旦、島外に出ざるを得ません。これは島にとっては不幸なことなのですが、やはり若者が戻ってきてくれるなら、外でいろんなことを経験していますので、新しい知見が島に入ってくるということです。

それから、いま盛んになっている民泊で、高校生が4万人も来れば、島の方々もいろんな刺激を受けます。迷惑な高校生もいっぱいいると思いますが、それも含めていろんな刺激を受けます。「イーハッチャー」で生まれた、つまり「進取の精神」で生まれた民泊という仕組みが、新しい人を次から次へと呼び込むため、島民はますます「イーハッチャー」になっていくという好循環が生まれていると思います。

さらに、西江上区の「進取の精神」に関して、社会資本（ソーシャルキャピタル）という概念を用いて考察を進めていきます。スライドに示した三角形ですが、黒丸が個人A、B、Cで、線がAさん、Bさん、Cさんの相互の関係だと思ってください。Aさん個人の能力、これは人的資本（ヒューマンキャピタル）といいます。人的資本は教育によってつくられます。そしてAさんとBさん、BさんとCさん、CさんとAさんの間にある関係が信頼性に富んで強い場合、そ

進取の精神に関する考察

- 柳田國男：土着民に新しい事を持ってきて吹き込む漂泊者
- 宮本常一：村をあたらしめていくためのささやかな方向づけをする世間師
- 鶴見和子：常民が社会変動の担い手になるには、常民みずからが定住-漂泊-定住のサイクルを通過するか、漂泊者との衝撃的な出会いが必要である。

社会関係資本

コールマン (2004)

人的資本：個人によって習得される技能や知識。

社会関係資本：行為者が自己の利益を達成するために利用できる資源としての人々の関係。

成員がお互いに信頼するなど、社会関係資本のある集団は、そうでない集団よりもはるかに多くの成果を上げることができる。

さらに、西江上区の「進取の精神」に関して、社会資本（ソーシャルキャピタル）という概念を用いて考察を進めていきます。スライドに示した三角形ですが、黒丸が個人A、B、Cで、線がAさん、Bさん、Cさんの相互の関係だと思ってください。Aさん個人の能力、これは人的資本（ヒューマンキャピタル）といいます。人的資本は教育によってつくられます。そしてAさんとBさん、BさんとCさん、CさんとAさんの間にある関係が信頼性に富んで強い場合、そ

それがAさん、Bさん、Cさん個人が行為するときのパフォーマンスを上げるし、A、B、Cで構成されている集団、組織のパフォーマンスを上げます。この人と人の関係を、パフォーマンスを上げる資産として見なすのが社会関係資本（ソーシャルキャピタル）という概念なのです。

それを伊江村の西江上区に当てはめて見ます。社会関係資本というのは2種類あると言われています。一つが結束型社会関係資本で、同質の者同士が結びつくもので、特定の互酬性、「お互いさま」ということですが、連帯を動かして「何とかやり過ごす」のに適した社会資本関係です。これは「イーハッチャー」の「負けん気」ですよね。

それからもう一種類の社会資本関係が橋渡し型社会関係資本です。異質な者、外との結びつきによる社会資本関係です。外部資源、外部の情報とか、いろいろなものとの連携や、情報伝播において優れている社会資本関係です。「積極的に前に進む」のに適した社会資本関係です。これが「進取の精神」を育てているものと考えられます。この2種類の社会資本関係が、これがまさに「イーハッチャー」の「負けん気」と「進取の精神」を生み出しているのです。最後の考察の部分は私の個人的な見解なのですが、私からは、選賞審査基準に基づいて、途中までは公式見解だと思っていただければいいと思うのですが、西江上区がどのように、どうして天皇杯に選ばれたのかを報告させていただきました。

ご清聴、ありがとうございました。（拍手）

○司会 福与先生、どうもありがとうございました。続きまして、業績発表に移ります。令和元年度むらづくり部門天皇杯を受賞されました伊江村西江上区の知念区長に業績発表をよろしくお願いいたします。

2つの社会関係資本

バットナム (2006)

- ・結束型社会関係資本：同質の者同士が結びつく。特定の互酬性を安定させ、連帯を動かしていくのに都合がよい。「なんとかやり過ごす」のに適している。
- ・橋渡し型社会関係資本：異質な者同士を結びつける。外部資源との連携や、情報伝播において優れている。「積極的に前へと進む」のに重要である。

参考文献

- ・柳田國男『明治大正史：世相篇』講談社学術文庫、1993
- ・宮本常一『忘れられた日本人』岩波文庫、1984
- ・鶴見和子『漂泊と定住と』『鶴見和子曼荼羅IV』藤原書店、1998
- ・ジェームズ・S・コールマン『社会理論の基礎』青木書店、2004
- ・ロバート・D・バットナム『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房、2006

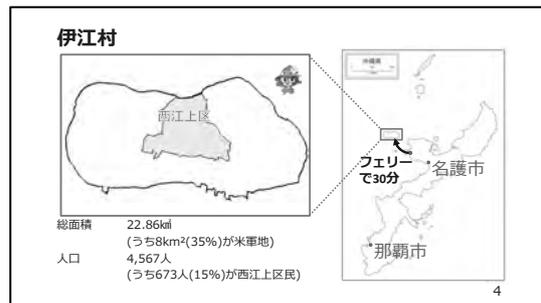
【業績発表】 伊江村字西江上区区長 知念 邦夫

皆さん、こんにちは。今回、令和元年度第58回農林水産祭むらづくり部門で天皇杯をい

いただきました伊江村西江上区の区長の知念でございます。受賞できたことは本当に身に余る光栄であり、地域の方々も本当に大変喜んでおり、大きな祝賀会をさせていただきました。もちろん天皇杯での乾杯は行いませんでした。農水省から強くお叱りを受けるということで、禁止事項ということで強く注意をされておりました。

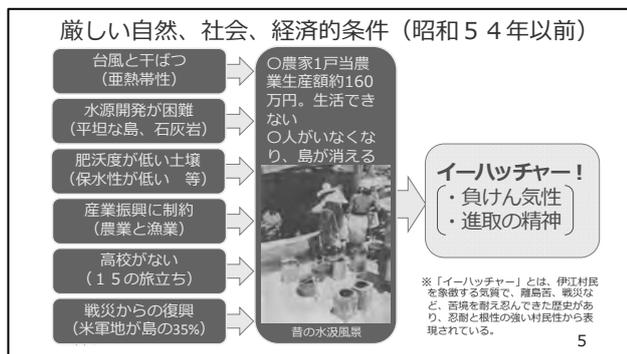
では、本日、私たち地域の方々が始めたしまづくりから島民が一体となっていく姿、さらに安定して水を得たさまざまな農産物の後継者が育ち、今後も島の振興が大いに期待される姿をご紹介します。

私たち西江上区があるのは、本島北部の沖縄美ら海水族館から西に約10キロ、日帰り観光も可能な人気のある島でございます。島の外周は22キロ、西江上区はそのほぼ中央に位置しており、行政的には中心ではありません



が、約700名が暮らす農業、文化、スポーツなど、大変活発な地域となっています。しかし、以前は大変厳しい状況に直面していました。年間降水量は数字上、本土よりやや多く

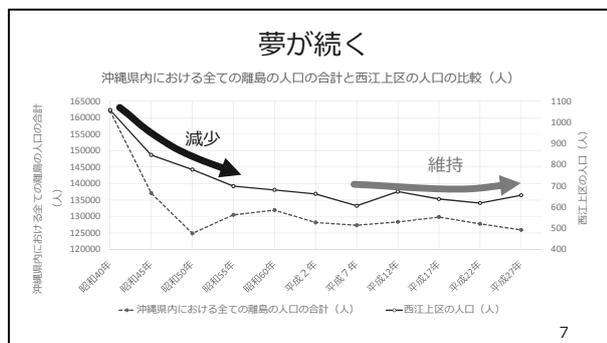
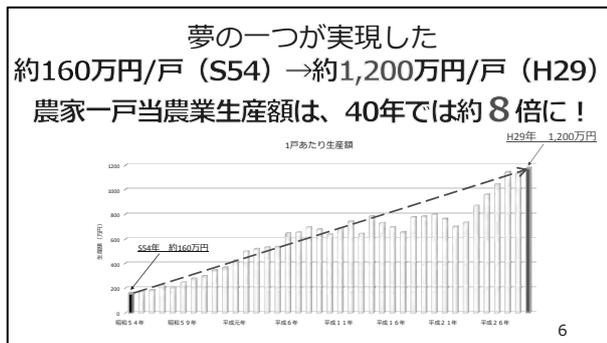
2,000ミリでしたが、降水と言っても、台風時の雨であり、雨は一気に降り注ぎ、しかも島は珊瑚礁の固まった珊瑚石灰岩からできていて、保水力がなく、ほとんどが海に抜けだしてしまいます。台風がなければ、干ばつです。特に西



江上区は標高70メートルと島で最も高い位置にあり、水は大変苦労しました。畑は石だらけ。工場や商業施設は誘致できない。それで、農業しかないということでもあります。15の旅立ちをして、高校1年からはほぼすべての子供たちが那覇などで一人暮らしをしています。そして、この地域は戦場でした。戦後、島民が一時退去を命じられ、帰島したものの、6割以上の土地が米軍に接収され、開発が制限されました。現金収入はわずか160万円。出稼ぎや離村が続く。このままでは人がいなくなる。島が消えてしまう。

厳しい状況を乗り越え、島の存続の危機を救ったのが西江上区の「イーハッチャー」精神です。この言葉は、村民を象徴する負けん気ですとか、進取の精神、それは忍耐力などをあらかず言葉で、西江上区は村内8区の中でほかの7区に比べてその気質が強い地域ではないでしょうか。その言葉を知っていただければ幸いです。西江上区の若者が島

の生き残りをかけて新しい農業に取り組んだことがすべての始まりでございます。そして、皆さん、驚いてください。島の存続の危機から40年、1戸当たり1,200万円まで生産を伸ばしました。胸を張れる農業となっています。並大抵のことではありません。また、島に若い人が戻ってきています。人口減少がおさまり始めている傾向が見えてきました。どんな集落であっても、これほどうれしいことはないでしょう。



では、その原動力となった「イーハッチャー」についてご紹介します。

まず、一つ目に葉たばこと大ギク栽培を取り込んだことです。限られた土地で丁寧に耕して、主食のイモをつくり、サトウキビをつくって、製糖工場に納める、

イーハッチャー①
島の将来をキクに賭ける！

昭和20年 米軍が伊江島を占領
昭和22年 引上げ村民が帰村
昭和47年 本土復帰
昭和49年 葉たばこを西江上区に導入
モデル的な取組開始

昭和55年
○畑農家が区西部かんすい組合を発足
→作物毎に必要な量・作付計画に応じて農家が話し合いを行い用水料金を決定
○県花卉園芸農業協同組合伊江支部を結成
→島の条件と収益性からキクの作付計画

葉たばこ

きく

8

それが当時島の常識でした。水源は湧き水や小さなため池しかない。輸送しようにも費用が高ければ、時間もかかります。そうした条件で若い農家が最初に取り組んだのが換金性の高い葉たばこでした。そして、その実績が希望を与え、モデルとなって大ギク栽培に取り組んだのです。輸送状況は船等を考え、本土との作付け時期の差を利用して、価値を高く維持できる大ギク栽培を選んだのです。ただし、キクには多くの水を必要とします。少ない水源で厳格に管理する西部かん水組合を立ち上げました。西江上区が直接運営、管理する組合です。その後も、畜産や、野菜、多種に増えるごとに作物毎の料金を設定しました。経営が苦しくなる農家には一時的に値下げをするなど工夫をしています。さまざまな品目の農家が喧々諤々と一緒に計画をつくり、悩みながら運営することで合意形成が進み、横の連携が深まっていきました。徴収率は100%でございます。持続的に運営できています。

二つ目に島の先駆けとなった水あり農業に取り組んだことです。キクをつくるには天候に左右される農業から脱却しなければ発展はない、そう決めて、この地域の若い農家は要

望みます。しかし、当時、大人たちはサトウキビをつくれればいい、狭い島のどこにつくるの、自分の土地は提供できないといったことで、両者とも真剣です。意見は分かれて、やがて島を、家庭をも二分するような騒動が起きま

**イーハッチャー②
島を「水あり」農業で支える！**

昭和46年 村役場のため池建設
要望書を提出
平成3年 20万m³のため池が完成

しかし、生活を支えるには100万m³を！
平成16～29 地下ダムを整備！

地下ダムのしくみ 9

した。しかし、最後には島のため、粘り強い説得力で実ったのです。その情熱が大きいため池、そして地下ダムがつくられました。葉たばこ栽培やキク栽培の生産拡大はもちろん、畜産、牧草地、それからラッキョウ、トウガン、その他野菜を生産し、数々の農林水産大臣賞も取得するまでに至っております。経営の複合化でリスクを分散し、経営安定、所得向上を図ることに成功したのです。

三つ目は、やはり人です。環境と文化を継承していく、その気持ちが強いです。集落には農家と一口に言っても、伝統芸能や文化、スポーツなど、得意分野があります。それぞれが先輩から後輩、子供たちへ惜しみなく伝えていきます。子供たちの思い出をつくる環境教育として、中学校生活の間に富士登山体験学習、3年に1度、企画、実施しております。また、各区持ち回りで8年に1度、民俗芸能、伝統的に迫力のある組踊を披露しています。お

**イーハッチャー③
環境と文化の継承**

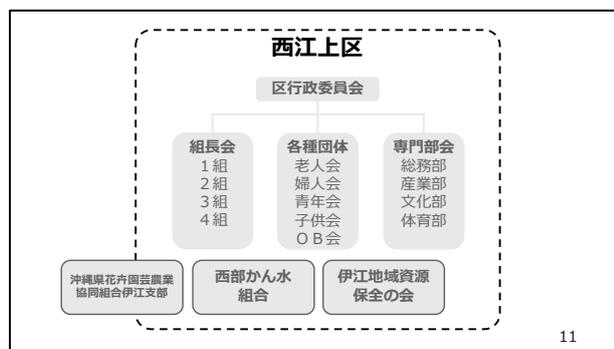
西江上区 子供会

公園を守ろう！ 日本一を目指そう！

伝統芸能

先輩から後輩へと伝承！

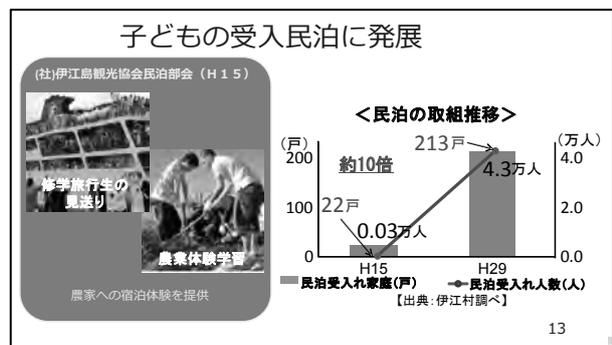
10



年寄りから子供たちまで受け継がれた記憶をたどり取り組むことで、区の一体感が生まれました。団結力を発揮し、各区対抗陸上競技大会では総合優勝5連破を達成しました。このように、区の中の各組織が真剣に意見を交わし、積極的に取り組むことで、区内ほぼ全世帯の連携が強くなり、活動が維持されています。

それでは、次に区の活動が島一円に広がっていく姿を紹介します。西江上区の区長やかんすい組合長も務めた元観光協会会長の山城さんは平成15年から民泊事業を立ち上げました。初めての取組で農家は協力しにくいのです。しかし、ここで西江上区です。農家11戸

が協力してくれました。当初は3校、317名の受け入れです。そこでのエピソードですが、キク農家の民泊農業体験で、やんちゃな生徒がいて、摘芽作業といまして、芽かき作業なのですが、それで残すべき花をわざと折ってしまったの



です。大事な花を壊された農家さんは強く叱ってしまいました。そうすると、親にもたたかれたことのない生徒はびっくりし、その後、更生し、いまでも連絡を取り合っているそうです。現在では300校、4万3,000人まで飛躍的に伸びたのです。会員と活動する子供たちの姿は本当に心地よいものがあります。その結果、学校の生徒と生徒の絆が強まった。あるいは関係が修復された。会員も大幅に成長し、農業外収入が得られました。修学旅行後においては、受け入れ民家との交流、家族ぐるみのリピーターが増えるなど、いまでも島になくてはならない活動となっております。

それだけではありません。伊江島の生活研究会、現在、西江上区を拠点に10名の方が文化や食育、さらには島の特産物を生かした手作り加工品を開発、製造に取り組み、民泊のお客さんに人気があり、ネットでも販売しております。島牛会は2代目、3代目の畜産後継者が中心となって活動しています。肉用牛の技術改良を促進し、地域活性化にも貢献しています。そして、花き園芸組合は西部かん水組合と運命共同体です。水

様々な団体との連携も深まる

伊江村生活研究会
(S33~)

伝統食の継承

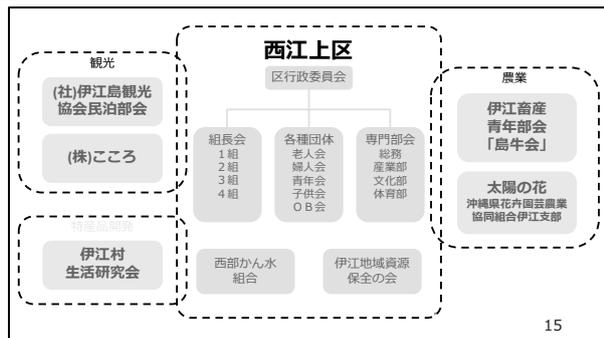
伊江畜産青年部会
「島牛会」
(H18~)

肉用牛の技術改良
促進展開

太陽の花 沖縄県花卉園芸
農業協同組合伊江支部
(S55~)

大ギク、スプレーギク、モンステラ生産は県内最大

あり農業の先駆けとして担い手農業も増加しています。中には父親、長男、次男、それぞれが独立経営している農家もあります。このように島ぐるみの取組みが各組織の自主的な活動、それぞれの連帯の下に進められています。

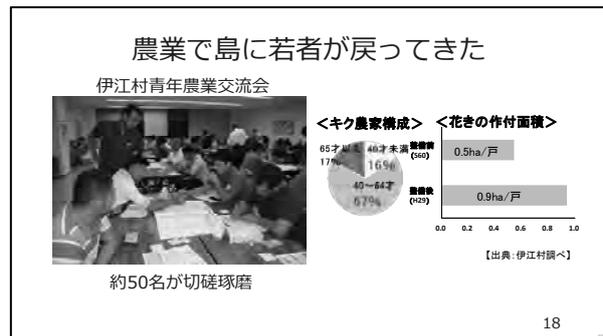


最後に島での期待についてご紹介します。伊江島を訪れると本当に楽しみがいっぱいです。まず島ぐるみの6次産業化で島外の出荷団体に依頼するのではなくて、農家みずからブランド化に取り組む例が増えてきています。これも「イーハッチャー」です。島のサト

ウキビからつくられるラム酒、「イエラムサンタマリア」は令和元年6月に開催された第1回東京ウィスキー・スピリッツ・コンペティションにおいて最高賞を受賞しました。伊江島育ちの幻の伊江島牛、ご当地ソーダのイエソーダ、伊江島



産小麦チップスの「けっくん」など、さまざまな特産物が生まれています。こうしたさまざまな活動が実を結び、花き栽培に従事するUターン新規農業者、葉たばこ農家や畜産農家の3代目など、後継者が増加し、農業に活気が出てきています。図にキク農家約80戸の年齢構成を示していますが、65歳未満の方々が8割を占めていることがわかります。また、灌水ができることで規模拡大も見えてとれます。



役場も類を見ない力強さで支援しています。キク生産をさらに伸ばそうと、担い手、高齢者用に花き選別施設の導入、それからフェリーも最新鋭化し、気候の変化に左右されない流通体制を整え、農産物等の輸送可能量を大幅に増加させています。

村役場が全面協力

館長は若きUターン者

キクの自動選別

最新の村営フェリー

- H22に花き選別施設を設置し、農家の選別・出荷作業にかかる負担を軽減。
- 担い手の経営規模拡大や高齢者の営農を支え、安定的な生産・出荷を実現し、更なる産地化を後押し。
- 農業出荷の増大や観光客の増加を背景に、冬季の荒海にも耐える最新フェリーを導入して支援

西江上区も再度みずからを強化しています。平成27年には区営住宅4棟8世帯を設置し、運営しています。実際に民泊を経験して島に移住し、漁師や保育所に勤めている方々もいます。生活研究会は西江上区を拠点に食生活指導士を含む生産農家の女性部が集まり、伝統料理を研究しながら活動を続けています。



若者たちはまだまだ挑戦しています。畜産のIoTや、農作業への先進施設を先取りし、「イーハッチャー」が受け継がれています。「しまどぅゅどぅ ようぶ」、一つが栄え

ばすべてが栄え、すべてが栄えれば一つが栄えるという地域の言葉があります。

12月20日に西江上区で祝賀会、区民が会を盛り上げていただき、盛会裏に終えることができました。また、1月24日には天皇皇后両陛下の拝謁があり、天皇皇后両陛下から天皇杯を受賞した7組14名が面会し、ねぎらいの言葉をいただきました。このようなすばらしい体験ができました。本当にいい経験をさせていただきました。



最後に、この受賞を契機に地域一丸となって、さらなる西江上区の発展を目指し、がんばっていきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。（拍手）

○司会 知念区長、どうもありがとうございました。ご質問などあろうかと思いますが、後ほどパネルディスカッションの中でも会場から参加いただく時間もありますので、その中でお願いいたします。

ここで10分ほど休憩を取ります。35分に再開します。

（ 休 憩 ）

○司会 それでは再開いたします。

これからはパネルディスカッションでございます。進行はコーディネーターとして福与先生をお願いいたします。

【パネルディスカッション】コーディネーター 農林水産祭中央審査委員会
むらづくり分科会主査 福与 徳文

○福与（コーディネーター） 福与です。どうぞよろしくお願いいたします。

パネルディスカッションに入る前にパネリストの皆様をご紹介させていただきます。私に近い方から、お1人目は先ほど業績発表でご登壇いただきました伊江村字西江上区区長

の知念さんです。それから2人目は冒頭にご挨拶いただきました伊江村長、島袋秀幸さんであります。それから3人目は私ども農林水産祭中央審査委員会のメンバーの1人でむらづくり分科会の委員を務めていただいております合瀬宏毅NHK解説主幹です。それから4人目が地元の専門家ということで琉球大学国際地域創造学部の大島順子准教授です。お2人、それぞれ自己紹介をお願いいたします。

○合瀬（コメンテーター） NHKでニュース解説をやっています合瀬と申します。通常は夜の11時35分から「時論公論」や朝の「おはよう日本」、それから毎日10時5分からの「くらし解説」という番組で第一次産業を中心とする経済分野を担当しています。

農林水産祭のむらづくり部門の委員をやらせていただいておりますすでに6年たつのですが、今回の西江上区を訪ねて、非常におもしろい事例だと思いました。シンポジウムの目的は、優秀な事例をみてもらうことで、参加する人たちに町づくりの参考にしえてもらおうというものです。今日は西江上区のお2人からいろんなものを紹介してもらいたいと考えております。どうぞよろしく願います。（拍手）

○大島（コメンテーター） 琉球大学の国際地域創造学部の観光地域デザインプログラムというところで教員をしております大島順子と申します。今日の会議は県のむらづくり課のほうで委員をしている関係上、呼んでいただくことになりました。私の専門は環境教育です。いま環境教育の扱う範囲は幅広く自然環境に関連することだけではなく、文化環境ですとか、社会環境、といった人間を取り巻く環境の持続可能性を追及していくような領域に広がりを見せています。私は地域資源をいかに守りながら活用していくかという非常にむずかしいバランスのあり方を地域の皆さんと学習・教育の場をつくりながら実践研究を行っています。沖縄の特に離島や、過疎地域等を対象にして、学生と現地を回ったりしながら現状把握や地域の問題解決につながる実践研究を進めています。

つい先日も、学習旅行と観光という授業の中で、学生と熊本県水俣市に行ってまいりました。というような形で、私が沖縄でいろいろと教育研究の実践をする中で得た知見を元に今回の西江上区の事例から少しお話ができたらと思って今日は参っております。よろしく願います。（拍手）

○福与（コーディネーター） どうもありがとうございました。お2人には全国津々浦々を回っていらっしゃる立場からと地元の先生という立場からコメントをいただければと思います。

それでは、パネルディスカッションを始めさせていただきます。

最初ですが、先ほど事例報告の中にすでに知念区長からお話が出ておりましたが、天皇皇后両陛下に拝謁されたときの話をもうちょっと詳しくと、それから天皇杯受賞後、何か地域が変わったか、受賞後の地域の様子についてまずお話しただければと思います。

○知念（業績発表者） 天皇皇后両陛下への拝謁の感想ですが、1月24日に皇居に伺いました。4時ごろからだったのですが、宮内庁の職員から1時間ほど皇居の説明を特別参観ということで、一般の皆さんが行けないところを案内してもらいました。もちろんカメラは禁止で、写真を撮ろうとしたら叱られてしまいました。それからまた、皇居の宮殿におきまして、天皇杯の受賞者が1列に並んで、両陛下が来られて、皆さん、ねぎらいの言葉をいただきました。それから業績の説明を天皇皇后両陛下にするのですが、私は最後だと思っていたのです。そうしたら、最初になってしまいまして、進行の方が「はい、どうぞ」という間に天皇陛下を自分の前に案内されてしまって、一緒にいた職員から「違うよ。区長、区長」ということでお叱りをいただいて、それからまた、初めに案内されてやったのですが、雅子様は本当にきれいな方で、モデルのような感じでした。とてもいい匂いがしました。ということで、緊張しっ放しで、本当は1人4分の業績説明なのですが、5分を過ぎまして、後ろから「早く終わりなさい。早く終わりなさい」と催促されて終わりましたが、本当にこのようなすばらしい貴重な体験をさせていただきました。

それと、地域のほうで、受賞後に防災訓練をやったのですよ。そうすると、やはり地域の皆さんの意識も高かったのか、多くの区民の皆さんに集まっていただいて防災訓練をできたのが、やはりいい結果だったのかなと思っています。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。天皇杯受賞後、地域の絆というか、まとまりがさらによくなったということです。ちょっとつけ加えておきますと、先ほど「最後だと思った」というのは、むらづくり部門は並びが7つの部門の最後なので、受賞式でも最後に賞状をもらったり、天皇杯を授与されたりというので、いつも最後だと思っていたら、いきなり順番が1番で回ってきたので面食らっちゃったというお話だったと思います。

それでは本題に入らせていただきます。先ほど私から、まずこの西江上区が天皇杯を授与された評価ポイントの一つが、農業生産が伸びたことです。その一番の元となったのが水あり農業、灌漑農業の導入、新しい作物の導入ということなのですが、それだけ聞くと、「土地改良をしたら農業生産が伸びて、若者が帰って来た」みたいな単純な話になってしまいますが、さまざまなご苦勞を地域ではされているはずで、特に合意形成のところ

いろいろご苦労されたと思うのですが、西江上区の区民の方々が団結していった、そういった理由といたしますか、地域の中の実際の具体的なご苦労話などがあれば、区長さんからお話しいただければと思います。

○知念（業績発表者） 苦労した点ですが、最初は土地改良から進めていったのです。そのとき、昭和47年ぐらいからと伺っていますが、やはり先人の皆さんは自分の畑が大事なものですから、土地の区画を整備して換地処分をするのですが、自分の土地は草もない、石もない畑、それを土地改良してまた新たな土地にすると、土地が浅く、石がいっぱいある土地に交換されるのではないかと、そのことで相当苦慮して、区の役員になると、本当に家に石を投げられるとか、そういう感じで相当苦労されました。お話にもあったのですが、家庭内でもやはり親と子、喧嘩が絶えないとかがあったのですが、今後は機械化農業になるという形で、先見の明があったのかなと思うのです。やはり若い皆さんが団結して、先輩たちが皆さんの言うとおりにするかということで土地改良が進みました。それから、灌漑排水が進みまして、こういった現在の形になっていった経緯があります。苦労した点というのは、やはり最初の土地改良です。それからまた、最初は灌水作業も個人個人でやっていたのですが、やはり地域で一括しなければいけないということになりまして、区のほうに施設があるものですから、事務局を西江上区に置いて、水の厳正な管理を行っています。

○福与（コーディネーター） 私と区長さんの言葉遣いの違いで混乱させるといけないので区別しますと、私は、区画整理も灌漑排水も全部含めて土地改良という言葉を使いましたが、いま区長さんがおっしゃった土地改良というのは区画整理の話でよろしいのですよね。畑の区画が不整形なのを整形にして大きくするという意味で土地改良という言葉を使っておられました。区画整理においては、全国でもいざこざが起きています。皆さん、自分の土地が一番良いと思っているわけですから、そこが大きくなったのはいいけれども、別の土地を換地処分でもらったりすると、悪い土地をもらうのではないかとということで、区画整理を進めるのにかなり苦労なされたということで、親子喧嘩もあったということです。それが一段落すると、今度は水を得ようということで灌漑排水事業が進んでいった。もう少し詳しくお聞きしたいのは、灌漑排水事業が進んで、灌水作業というところなのですが、組合をつくられて、先ほどもちょっと触れられましたが、料金設定に関して、私ども現地調査していて非常におもしろいなと思った点なので、その点を詳しくお話ししていただきたい。

○知念（業績発表者） 料金の設定ですが、一応全筆に基本料金があります。最低固定料金があります。その上に作物別の金額を上乗せするのですが、やはり水を必要とするキク栽培の花が一番高くなります。それにサトウキビ、たばこ、トウガン、ラッキョウ、イモといった形で作物別に少しずつ金額は変わるのですが、それも収支が合うようにしないとけないので、4、5年かけて喧々諤々しながら料金を決めたと聞いております。また、先ほども言った収入が苦しい農家は葉たばこだったのですが、収穫時期に、収穫する前の5月に台風があったのです。平成二十何年でしたか。収穫する前にみんな葉っぱが飛んでしまって、金額は固定だけにしようということで、金額を固定だけにした件もありました。そういった形で、毎年見直しというか、ここ大分据え置きなのですが、こういった形で農家の横の連携で相談しながら料金設定をしております。

○福与（コーディネーター） 現地調査のときに聞いたことですが、かつては皆さんがため池まで水を汲みに行ったという話もあったかと。

○知念（業績発表者） 今うちの地域は灌漑排水の施設がありますが、ない地区では立ち上がりはため池からタンクに水を積んで、畑に行くという形の灌水作業でした。いま現在は地下ダムを水源とする灌漑施設の整備が進んで、栓をひねると出る形になっています。

○福与（コーディネーター） ここで村長さん、西江上区を中心にしながら村全体の灌漑排水事業がどのように進められてきて、現在、どんな状況であるのか。それに対する行政のサポート体制をお話しいただければと思います。

○島袋（コメンテーター） お答えする前に、私も西江上区で生まれて育ちまして、伊江島に帰って、現在も西江上区に住んでいるところであり、区民であります。そういうことで、これまでも国、県の協力、支援を受けながら、水あり農業の展開に向けていろんな施策を村として推進してきたところでもあります。先ほど言った私が西江上区出身だから西江上区という部分ではありませんが、そういう中で、西江上区におかれましては、本村で初めての灌漑排水と基盤整備、要するに換地処分を行った地区でございます。それにつきましても、地区でなかなか進まないのを「イーハッチャー」の精神で、伊江村で最初に土地改良に西江上区として取り組む、そういうことがあったのではないかなと思っております。そこで、村内での灌漑農業への転換の重要性を村民、あるいは農家に浸透された先駆的な役割を果たした地域、あるいは区民がいる地域だというように理解しております。

そして、先ほどありました西部かん水組合につきましても、伊江村におきましては、その後、3地区の土地改良を行いました。東江前、西江前、川平地区という地区があつて、

土地改良事業をした地区は4地区でございますが、その3地区はすでにかん水組合は解散をしまして、伊江村が管理しておりますが、西江上区にある西部かん水組合は独自の運営をこれまでも、昭和55年に設立して以来、ずっと自前で賦課金も徴収して運営をしている状況であります。

そういう中で、国営地からの灌漑排水事業が終わりまして、現在、660ヘクタールに向けての灌漑排水事業を国、県の支援をいただきながら伊江村として県営で実施をしているところでありますが、土地改良区の設立を受けての賦課金の設定も、先ほどありました西部かん水組合の料金の設定を非常に参考にしながら、基本割、これは面積割、それと、作物ごとで、花のように水をたくさん使う作物については料金を高くする。葉たばこ、その他の作物については低く抑える、その料金の設定も西部かん水組合の料金の設定を土地改良区で参考にしているという状況であります。

まだ、県営の4地区がこれから5年程度で完成しますと、660ヘクタールの全受益地区に農業用水が確保されて、地下ダム事業の効果が大きいに発現されるというふうに思っておりますので、今後、国、県の早めの灌漑排水事業の整備をぜひお願いしたいと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。後でお話することになる民泊もそうですし、いま話題にされている灌漑排水もそうなのですが、伊江島の中では西江上区が先陣を切って、それが皆さんの見本になったようです。たとえば他の島民の方が見ていて、「あれはいいね」と思ったのか、役場が「ここにこんな事例があるから、こうしたらどうだ」と働きかけだったのか、どっちだったのでしょうか。

○島袋（コメンテーター） 先ほども県営事業で、西江上区で実施をしたと申し上げましたが、土地改良事業だけではなくて、いろんな事業の成果、その辺は地域の住民、あるいは農家にとっては、実際の成果を見せないと、なかなか理解できない部分があって、一つの地区でそういう土地改良によって農業所得の向上、あるいはもうかる農業が展開されれば、そこを参考として、他地区でも展開されますが、一番先にリスクを背負ってそういう事業を展開するというには、すぐ「はい」という部分は、離島で田舎ですからそういう状況がありますので、土地改良についても、事務局、担当課は役場で事業の推進はこれまでもしましたし、県の協力も村の役場でやっている状況です。まずはしっかりとその効果を見せることは当然行政の役割ですから、そういうことで、土地改良区でやればそういう農業にいい効果が出るという部分の役割を見せていくことで、村役場、行政が主体的に事業

の推進に関わっていたのでございます。

○福与（コーディネーター） 水あり農業、まずは区画整理、それから灌漑排水事業を進めていって、新たな作物、特に花とか、葉たばこを導入できるようになって、それなりの収入を得られるようになった。それを西江上区だけではなくて、ほかの地域でもできるようになって、いまは国営灌漑排水事業で地下ダムがつくられていて、かなり潤沢な水を得られるようになったということですね。そして、かつてはため池に汲みに行かないといけなかった事態が、水が圃場まで来るというような状態に整備されつつあるという状況なのですが、それにより若者、後継者が戻ってきたということは、何となくわかります。もうかれば戻ってくるというのは。実際、「戻って来いよ」というのは、家庭内でやられたのか、地域でやられたのか、それとも、何か仕掛けがあったのか。もうかる農業になったから若者が戻ってきたのはわかるのですが、「戻って来いよ」というきっかけは、家庭内で親父から息子にということなのではないでしょうか。その辺のところ、知念さんから、若者が戻ってくる実際の場面、幾つかの事例でもいいですが、何かお話しただければと思うのです。それも含めて、区の担い手育成の取組みをお話しいただくとありがたいです。

○知念（業績発表者） 自分の地域は農業しかないもので、花き、葉たばこ、ラッキョウ、トウガンとか、そういう品目があるのですが、花きでいきますと、露地栽培から、収入を上げるために平張り施設の栽培に変わってきています。これもやはり役場の教えももらいながらですが、導入すると、天候、自然任せであったのが、風に強い施設になってきて、収入も増えてくる。そうすると、簡素化するために、仕事の省力化というのですか、実際、キク栽培をすると、発根苗というのをを使うのですが、それを直差しにして、時間を短縮しながら灌水させる。発根苗をしないで回転させると、どうしても回転が早くなるということで、本土並み、いま最高で2.4作をやっている人もいます。そうしながら、早め早めの回転。そうすると、収益が上がるということでがんばっている農家もいます。葉たばこ農家、それも最初は手作業が多かった農業が、いま機械化が大分進んできています。機械化が進んできているものですから、労力も少なくなって、仕事がしやすいということになって帰って来ているのかなど。実際、花き、たばこ、畜産、その他ほとんどに後継者がいます。ラッキョウとかも、サトウキビと二作しながら経営を立てて、やはり収入という形で輪作をして帰って来ている農家もいます。

○福与（コーディネーター） 村長さんにお聞きしましょうか。もともと後継者になるつもりなのだが、一たん、島から出て行っているのか、もうかるから戻って来たのか、時代

によって違うのですが、実際はどんな動きをしたのかということをお聞きしたかったのですが、いかがですか。

○島袋（コメンテーター） 役場が主体的に、若者が島に帰って来て就農をする環境を整えたのか、あるいは各個人的な農家の中での取組み、あるいは集落の取組みということだと思いますが、これは相乗的に連携をしていると考えております。中でもやはり1番は各農家における話し合いというか、親子のことが一番大事だと思っております。現在でも

「俺も年を取ったから、そろそろ島に帰ってきて農業を継いでくれよ」と言ったら、それに応じて帰ってくる息子もいるし、「まだまだ本島、伊江村外でがんばりたいから、あと10年ぐらいはお父さんがんばってください」とか、そういうような話も聞きますので、基本的には親子、家庭の中でそういう話がしまして、伊江島に戻ってきたときにいろんな面で行政がバックアップをしていく体制だと認識しております。そういう中では、葉たばことか、しっかりとした農業の確立をされている農家の話ではありますが、それ以外の農家においては、やはり灌漑農業の進展によりまして、従来のサトウキビ、土地利用型の農業から、高収益作物によりまして、2,000坪ぐらいでも農業として生計を立てていく、そういう農業の形態が伊江村の中で確立してきたのが、葉たばこ以外、花の農家はサトウキビ農家よりも非常に面積が小さい中で就農できる環境がありますから、そういう意味では西江上区が進めてきた灌漑農業の確立が伊江島に帰ってくる若者が就農する一つの環境を整えたと思っております。どっちが先かというのは、いろんな場面で、村がやるときもありますし、各農家の中でやる部分もありますし、あるいは地域の中でそういう話をされるという部分で、個別個別で具体的ケースがあるのかなと思っております。

○福与（コーディネーター） いまのお話だと、基本的には家庭内で戻ってこいという話の中で、自信を持って「戻ってこい」と言えるようになったという理解でよろしいのかなと思います。いま村長さんのお話の中で村で幾つかサポートされているというお話もありました。そこで、Uターン、外からの移住者へのサポートも含めて、村の担い手育成・確保に関する施策についてお話いただければと思います。

○島袋（コメンテーター） 農業の担い手の育成確保については、伊江村だけではなく、全国的な課題だということで認識をしていますが、伊江村の現状の取組みについて申し上げますと、伊江村には担い手と呼ばれる農家が134名います。その内訳として認定農業者が47名、認定新規就農者が14名、基本構想水準到達者、これも申請すれば、認定農業者にできるものが55名で、今後、育成すべき農業者が18名います。そのうち、西江上区の担い

手農家は37名で、全体の28%を占めている状況です。特に担い手育成の取組みとしては国が平成24年から始めております旧は青年就農給付金事業、現在は農業人材投資事業とありますが、伊江村におきまして、これまで23名の新規就農者が誕生をしているところです。そのうち、西江上区の農家が7名いる状況です。そういうことで、この7名の皆さんは農業はもちろんのこと、地域行事にも積極的に参加をして西江上区の中心的な農家としてがんばっているところです。

そういう中で村としましては、沖縄県の担い手向上支援事業を活用して、担い手農家50名に対しまして、月1回、農業経営簿記講座などを開催しまして、農家の経営面のサポートを行っているところです。今後も継続して取組みを行い、担い手農家、あるいは所得向上に努めていきたいと思っております。それと、快適な生活をするためには住宅が必要ですので、予算としましては、村内に8集落ありますが、9戸の村営住宅を整備して、104世帯が入居できるようになっておりますから、そういう中でも優先的に農業後継者、あるいは新規就農者が島に来たときにはその辺の優先入居を考えながら支援をしているところです。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。ここまで水あり農業、農業所得の向上、それから若者が戻ってくるというお話を少し深掘りしてみました。合瀬さん、ここまでのところで何かコメントをいただければと思います。

○合瀬（コメンテーター） ちょっと別の視点からお話をさせていただきたい。手元に知念区長が説明していただいたパワーポイントがあります。そもそも農林水産祭の選考がどういうふうにして行われるかですが、全国八つの地区から出てきた優秀事例の中から三つを選びます。その中から一つ、現地調査をして最優秀が天皇杯ということになります。伊江村の説明で、われわれが一番びっくりしたのは、6ページにある「夢の一つが実現した」というところでありました。農家1戸当たりの生産額、昭和54年の160万円から1,200万円になっています。これを見たときに「本当？」と思った。そんなに普通は伸びないわけです。それが伸びた。鍵は水にあったということなのです。水を得たことで極めて安定的な農業が実現できた。それで若い人たちが戻ってきたという成功事例に結びつくわけです。ただ、当然ながら、区画整理事業をするに当たってはいろんな反対、先ほど区長がご紹介していただいたように「なぜ俺の畑をあいつの畑と換えるんだ」とか、「水の単価は一体幾らなんだ」みたいな話が必ずある。それをどうやって乗り越えてきたのだというのがわれわれの一番大きな関心事でありました。現地を見させていただいて、区長とか、地元の人たちからいろいろな話を聞いて、よくわかったのは、5ページにあるように相当苦

労されているわけですね。戦争が終わって、これは島全体ではありますが、35%が米軍に接収された。、また島には台風とか干ばつなど厳しい自然条件があつて、極めて農業生産が不安定であつた。紹介されたように農業生産額が160万円ということは、コストが半分としても、年間収入は大体80万円です。これでは暮らせませんよね。このために若い人たちが島からどんどん出ていく。これを何とかしなければいけないという相当な危機感が様々な苦難を乗り越えたのだと思います。そこを乗り越えないと、この地区はなくなってしまうぞという相当な危機感がいろんなことを乗り越えさせたと思いました。

いまの日本の農業をめぐる状況を見てみると、どこも大変です。農産物価格が安いとか、海外との競争があるとか、様々な苦勞がありますが、もっと豊かになりたいというエネルギーがある地域は、それを乗り越えるのです。そのエネルギーがこの地域にはあつたのだと思いました。伊江島、大変苦勞された島であります、豊かになりたいというエネルギーをどう維持していくか。そこのところをこの事例から学ばなければいけないのかなという気がしました。

多分「イーハッチャー」、何くそというこの島独特の精神があつたのだと思いますし、それを乗り越える工夫をあちこちから持ってきて、成し遂げられたのだと思います。歴代の区長がみんな集まって、「いや、もう大変だった。家に火をつけられそうになった」とか、様々な苦勞を、現地では聞かせてもらったのですが、それをどういうふうにして乗り越えたのか、そこに焦点を当ててわれわれは学んでいかなければいけないのかなと思いました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。このパートをうまくおまとめいただいたと思います。

では、二つ目の視点に移らせていただきます。いま合瀬さんがおっしゃられたように農業生産額がグーッと伸びたこととともに驚異的な民泊事業、島全体で年間4万人以上、宿泊する民泊事業のほうに話を移らせていただきます。民泊を始めた経緯とか、苦勞された点、この点についてまず区長さんお願いします。

○知念（業績発表者） 民泊を始めた理由ですが、最初は私たちの島は15の旅立ちということで、15歳になると島から出ていかなければいけないのです。そうすると、空き部屋が出てきますので、空き部屋を生かして民泊事業を始めてはどうかということで始めたのが経緯でございます。

苦勞した点というのは、やはり農業体験を主体とした民泊でしたので、最初もエピソード

ドにあった花きですとか、ラッキョウでは草取り作業をさせるのにラッキョウをそのまま引っ張ったとか、農作業の説明がむずかしいというのもあり、また家庭内では、本土から来る子供たちですので、シャワーの文化だよと言わないと、水を溜める。離島ですので水を大事にしている島なのです。それで、「湯船は使わないでちょうだいね。みんなでシャワーで早く入ろうね」ということをしながら、「夜中は絶対に勝手に出歩かないでね。もしハブに噛まれたり、事故があったりすると大変だから」ということで、最初にきちんと説明しないと、子供たちは自由ですので自由勝手にするものですから、こういったことが苦勞した点ではないかなと思います。

○福与（コーディネーター） われわれが現地調査させていただいたとき、これは他の地域でも使えると一番思ったのが、民泊でありながら決してボランティアにとどまらず、地域の経済が回るような仕組み、民泊を引き受けた方が損をしない、それなりの収益になるような仕組みをつくられていた点がかかなり印象に残りました。この点に関して、会場におられる西江上区の元区長の山城さんからご説明いただきたいと思います。

○山城 西江上区の元区長、元組合長の山城と申します。区長を終えた後、観光協会の会長に就任しまして、そのときに民泊事業を立ち上げました。先ほどありましたように、仕組みづくりをどうするかというのが一番大きな問題でした。料金の設定、これはボランティアでは長続きしません。いかにして持続可能な仕組みをつくるかということで、当初、3回のテストパターンを終わらして、受け入れした民家さんを集めまして、料金の話し合いをしました。そのときに自由討論でしたので、あるおばちゃんは「私は1人3,000円でいいですよ」、またある方、子育ての真っ最中の皆さんは「私は5,000円から6,000円欲しい」と、いろんな金額の具体的な話が出ました。そのときに「よし、わかった。じゃ、1人7,000円あげます。そのかわり、しっかりと責任を持って受け入れてください」と。皆さんが最高6,000円でいいというものをあえて1,000円上げて、責任を植えつけさせたのです。受け入れ民家さんに個人1人7,000円。観光協会の手数料1,000円。旅行社にも手数料を払いますので1,000円。合わせて基本料金が9,000円。当時、消費税5%でしたので、9,450円というのが最初につくった民泊料金の仕組みなのです。つまり、子供たちを安心安全、責任を持って受けるためには、しっかりとそれなりの報酬を与える。その仕組みが確立できたから、いまの伊江村や沖縄県の民泊事業がしっかりとできたと私は思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。もう一つよろしいですか。地域に

お金が回るような仕組みにした点もすごく感心して聞いていたのですが、地域の商店をうまく使いながら、地域経済が回るような仕組みをつくったと。

○山城 この民泊料金を設定した当初からすべて前金で行うという制度をつくったのです。なぜ前金制度にしたかというのは、島のおじいちゃん、おばあちゃん、農村部ですので、サトウキビを出荷して初めて1年に1回の収益、年2回の牛の競りに出して初めて収益が入る。収入のない時期に子供を受け入れてくださいとお願いして、1カ月後払いですと言ったら、だれもやりません。そこで、この前金制度という仕組みにしたのです。子供を受け入れる前に前金でお金をお支払いする。そうすることによって、農家の民家の皆さんは毎日自分が利用する商店、刺身屋のおばあ、そういうところ、自分が身近に利用する商店、いつも買い物をするところでも買い物をする。ということは、お金が一極に落ちるのではなくて、島じゅうの小さな商店にお金がばらまかれる、そういう仕組みになったのです。

○福与（コーディネーター） そういう仕組みがあって、なるほど民泊事業は伸びていったのだなと理解できました。お聞きしたところだと、1戸当たり年間200万円ぐらいになるとのことでした。の農業収入も1戸当たり、売上で1,200万円、所得はその半分としても600万円になります。我々が調査させていただいたキク農家は2,000万円ぐらいの所得を上げていましたが、そうなれば、若者も戻ってくるし、さらにそれプラス200万円となると、これは相当な経済効果があるという印象を受けました。

西江上区で始めたものがいまは全村に広まっているわけなのですが、この辺、全村を見ていく立場にある村長さんから、民泊が村に与えた影響なり、村がどのようなサポートをしているのか、村の立場からご発言いただければと思います。

○島袋（コメンテーター） 伊江村は従来から農業、漁業の第一次産業を核としてむらづくりを進めた村であります。現在では農業に匹敵するぐらいの観光産業が基幹産業になっている状況です。とりわけ、民泊事業が観光を牽引する大きな中心的役割を担っていると思っております。そういう中では民泊事業は伊江村が主体的に働きかけて、観光協会が協力したということではなくて、観光協会がみずから日帰り観光から宿泊観光への転換を目指して模索している中で、そういう民泊事業が、県からの提案もありまして、観光協会、山城元会長を中心に非常に努力をしながら今日の隆盛を極めるような感じになっております。その辺の民泊を見たときに、行政指導ではなくて、あくまでも民間の皆さん、あるいは団体の皆さんがやる気を持ってそういう部分に臨んで、行政が支援をしていくという成功した事例だと個人的には考えております。そういう中では伊江村における民泊事業は、

その辺の推進の方法、そして非常に成果を挙げている一つの事例ではないかと思っております。そういう中で、当時の山城会長が、観光ですから、全体として何か課題、問題があるときにはみんなで協議する組織として伊江村観光推進協議会を立ち上げて、年に1回は民泊についていろんな角度から意見を申し上げながら、将来的に、持続的に民泊が展開される、そういう組織づくりもされたのが、今の伊江村全体を巻き込んだ年間4万3,000人が島に訪れて、民泊事業が隆盛をしている部分であります。村としても観光を大いに推進する立場から、現在は観光協会、あるいはもう一つの事業者と連携をしながら、安定的に、持続的に教育民泊旅行が伊江村で今後も行われるように連携を取りながらやっている状況でございます。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。お待たせいたしました。大島先生、地元の学識者から民泊についてコメントをいただければと思います。

○大島（コメンテーター） いまお話を伺っていると、本当にいろいろ苦労しながらの民泊の受け入れを続けてきたのだということがよくわかります。三つほど要点を絞って、伊江島の民泊についてコメントしたいと思います。

1点は修学旅行生にしっかりとターゲットを絞った民泊を展開してきたことです。皆さん、多分ご存じだと思うのですが、沖縄県は入域観光客数が1,000万人を超えました。修学旅行生に限って言うと、平成17年ぐらいからその数は40万人を突破し、毎年40～45万人で推移しています。学校数は2,500校前後です。一昨年、平成30年度は2,455校、42万人という数値でした。現在、伊江島の修学旅行生の受入れ数が4万人を突破したということは、修学旅行生の1割が伊江島に宿泊していることになります。これは注目に値することです。

二つ目は、伊江島では民泊をきちんとした産業化させたという点です。民泊を産業化して地域振興を図っている、そのように言っているのではないかと思っております。また、沖縄県の修学旅行生の受け入れは、7割は高校生で、3割が中学生です。伊江島にやってくる修学旅行生は3泊4日のうち1～2泊を離島で宿泊体験をすることになります。私は、離島ではあるけれど、伊江島の場所というのはとても便利がいいと思っております。30分ほどで本部半島の美ら海水族館あたりから行けて、1日の便数もかなりある。つまり日帰りも可能なわけなのですが、何かあったら、すぐに本島に戻ってこられる。ある意味、島しょというのは良い面もあれば悪い面もあり、裏腹にあるわけなのですが、非常に使い勝手がいい離島が伊江島であるとも言えます。とても良い条件の離島の体験を修学旅行生がで

きるのは、修学旅行生をターゲットにした民泊の受入れ体制の整備にきちんと取り組んできた成果とも言えます。平成15年から現在に至るまで継続して、このように島全体で民泊を産業化してきたのは大きな特徴ではないかなと思います。

もう一つは、今回のために伊江島の過去の資料を見ながら見つけた言葉、ヒューマンツーリズムという名前を展開している点です。簡単に言えば、ヒューマンツーリズムというのは、民泊体験等を通して人間的な深い交流を築くことをねらいとしたものです。現在、ツーリズムというのは頭にいろんなものをつけて、〇〇ツーリズムと、ある意味、言った者勝ちな業界でもあるわけで、やはり（流行）が非常に市場を左右します。ヒューマンツーリズムでは、お客様扱いをしない、この辺が修学旅行の民泊の一番のポイントです。家庭では怒られたこともない子供たちが、ガツンと怒られることもあるわけです。そのような体験があるからこそ、たかが1泊だけれども、されど1泊になるのです。これが教育的効果を生んでいる所以です。学校関係者、教員の方たちが「1泊して帰ってきたら、子どもたちの様子が前向きに変わっているのですよ」というような評価を受けるのは、お客様扱いしない、心を打ちとけ合う交流が元にあるヒューマンツーリズムを徹底して民泊という修学旅行生を相手に展開してきたからではないでしょうか。ここに伊江島の成功の鍵があるのではないかなと思います。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。このセクションをおまとめいただいたようなのですが、先ほど自分の選賞報告のところで言い忘れてましたが、伊江島の現地調査に行った後で、ゼミのときに「伊江島というところに行ってきた」と言ったら、「先生、高校のときに伊江島に修学旅行に行きました」という学生がいました。沖縄への修学旅行生の10分の1が伊江島に行っていれば、そういう学生に当たるのは道理で、「灯台下暗し」だったということもあわせてご報告いたしておきます。

合瀬さん、実際、現地調査をされて、いま民泊のお話を聞かれた感想、コメントなどをお願いします。

○合瀬（コメンテーター） 実は民泊のところは、余り現地でお話を聞いたわけではなかったのです。たまたま。私たちが島を離れるときに、ちょうど離村式というのをやっていました。民泊した人たちが島を離れるときに「さようなら」というか、「また来てね」みたいな会ではあるのですが、そのときに担当した農家の方がいらして、いろいろお話が聞けたのです。腑に落ちたのは、先ほど山城さんがおっしゃっていたように、前金でやっているということです。いま実際213戸ですか。かつて22戸から始まった民泊の取組ですが、

多いところで大体200万円ぐらいの収入があるということです。ただ、島の中で民泊に取り組んでいる人だけが儲かっているみたいなことだと周りの人との軋轢もできます。それを上手に、まず前金でもらって、それぞれの中で地区の八百屋さんや魚屋さんで買い物をして、そこでお金を落とす。つまりその人たちだけではなく、民泊で子供たちを受け入れることによって地区全体が潤うという仕組みを極めて上手に作っている。実は民泊の受入数4万人という数字が、私たちには、にわかには信じられませんでした。沖縄に来る子供たちの1割です。私たちは、半信半疑で来たのです。ところがお話を聞いたり、仕組みを聞くと、全体で受け入れるような体制ができています。そのことで、事業がきちんとうまく回って、ワークしていることにつながっているのかなという気がしました。民泊に取り組む効果として、村に新しい空気、違う空気が入ってくる。それが村を活性化させる。そういうことが語られるのです。確かにそうした効果はありますが、やはりそれがきちんと収入として確保されていく。しかも、地域が潤うという仕組みにしているところが伊江島の非常に大きな一つの工夫でもありますし、成功している要因なのかなという気がしました。とても勉強になりました。ありがとうございました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。さて、ここまでで西江上区が評価された「水あり農業」と民泊事業のお話をさせていただきましたが、西江上区では、その他さまざまな取組がなされております。先ほど私の選賞報告の中にもありましたが、特産品、6次産業化に向けたことも取り組まれておりますので、まず女性の活躍の面で、伊江村生活研究会の取組みについて、また知念区長さんからお話いただければと思います。

○知念（業績発表者） 先ほどもお話ししましたが、当区を中心に生活研究会があります。島の特産としまして、紅芋のチップスや、あんこもち、そういったものとか、伊江島小麦、これも伊江島独自の小麦なのですが、それで天ぷら。そういった島の伝統料理の普及もやっております。それから、伊江島の各種イベントに出展とかもやって活動をしております。

○福与（コーディネーター） われわれ、現地調査に伺ったときにご案内いただいたものに、先ほどのご報告の中にもありましたイエラムがありました。たしか、合瀬さんと私は限定品のお酒を購入しお土産として持ち帰りました。私のはまだちょっとだけ残っていますが、合瀬さんは全部飲まれてしまいましたか。

○合瀬（コメンテーター） 限定版が大変おいしかったものですから、実は1月にも沖縄に来たときに、空港で探しました。ところが売っていない。仕方なく普通のラムを買って帰ったのですが、どうしても欲しくて、今回、島の方にお願して持ってきてもらいました。

もちろんお金は払いましたが、飲むのがとても楽しみです。

○福与（コーディネーター） このラム酒の開発の経緯について、村長さんからお話しいただければと思います。

○島袋（コメンテーター） 伊江村はご存じのとおり、川がありません。川がないということは、飲料水、あるいは農業用水も不足をしているということで、農業の形態としても、要するに米の生産ができないということで、沖縄でよくある地酒の泡盛の生産ができない地域でございました。そういうことで、これまで本島の販売店が島内の醸造所と連携をしながら、いろんな泡盛を生産して伊江島で販売をした経緯もございます。伊江村の商工会もヘリオスと提携をして「あごり」という商工会推奨の泡盛も製造しているところであります。そういう中で、伊江村としてもどうにか泡盛にかわる伊江村の地酒をつくれないうという思いを村民等しく持っていたと思っております。そういう中で、先ほど言うように、土地利用型、従来はサトウキビを主体として農業を展開していく中で、一時は5万トンも生産したサトウキビが年々減少して、JAが経営する伊江村の製糖工場の存続が大きな課題になっておりまして、その製糖工場の運営、経営も含めまして、それと、総合事務局の提案もありまして、伊江村としては粉糖をつくる将来に向けての取組みと、アサヒビールが主体となったバイオエタノール、E3ガソリンを伊江島で事業化する実証事業がスタートいたしました。そのために設置した実証プラントが5年間の実証事業を終えて、その実証プラントの活用についてみんなで検討した中で、「伊江村がこのプラントを活用できるのであれば、どうぞお使いください」ということがアサヒビールからありまして、総務省に再々計画を出して、転用の交渉人を入れて、サトウキビの搾汁を原料とするアグリコーララムの生産に着手をしたところであります。

そういう中で、現在、1万2,000本ほどのラム酒を製造させていただいておりますが、品質、味もいいということで好評を得ているところでありまして、伊江村の地酒として今後もPRしながら販売促進につなげていきたいと思っておりますし、伊江島はテッポウユリを題材としてユリ祭も開催しておりますので、そういうことで、復活祭でテッポウユリを使うサンタマリアを名称として、現在はイギリス、フランス、ヨーロッパにも、少しですが、輸出をさせていただいておりますので、今後、海外への進出も含めながら、伊江村として経営をしております第三セクターの伊江村物産センターと協力しながら、さらなる販売促進に努めていきたいと思っております。経営としてはそういう経営でございます。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。私も、昨日も、自宅で飲んできた

のですが、砂糖の香りがする60度の強いお酒、なかなかいいお酒ではないかと思っております。お酒にはお金をつぎ込む方が世の中にはいっぱいいらっしゃるので、これは一つの目のつけどころかなと思っております。このように、伊江村には、いろいろな島の産物を生かした加工品があり、いわゆる6次産業化にも手を広げられつつあるというところですよ。

この話もっと長くしたいのですが、まだまだここで話題に取り上げなければいけない課題もありまして、次に進めさせていただきます。そもそも伊江村の水あり農業というのが、結局、珊瑚礁を由来とする土壌が原因で、雨が降ってもすぐ地下にいつてしまっていて流れていつてしまう。今はそれを地下でせき止めて水を貯める地下ダムを整備しましたが、西江上区では環境保全の取組みも結構取り組んでおられて、その点に関して、また区長さんからお話したいと思います。よろしくお願いします。

○知念（業績発表者）　いま環境保全ということですが、私たちの地域は、珊瑚礁の琉球石灰岩、それが風化した島尻マーヅということで、すぐ海に浸透してしまいます。やはり台風後には道路に赤土や土砂が流れて、これを早く除去しなければいけないものですから、うちの地域のトラクターを出して、台風後には早急に土砂の除去作業を行ったり、それから水の除去作業を行ったりして保全作業をやっております。

○福与（コーディネーター）　この点、大島先生いかがですか。

○大島（コメンテーター）　私はそういう意味で実は、皆さん、もちろんご承知のように、沖縄では台風や干ばつ、そういったものの厳しい条件の中でいかに生産性の高い農業が実現できるかというところで、灌漑排水施設ですとか、圃場の整備というのに国も、そして県も取り組んできているわけですが、特に伊江島のように地下ダムを持っているところ、地下ダムは宮古にもあり、糸満にもありますが、地下ダムの存在をもっとどんどんアピールするというか、教育的な付加価値をつけるというのですか、題材にして伝えていくといいコンテンツになるのではないかと私は思っています。というのは、水資源ははっきり言って有限ですよ。いまSDGsに沖縄県も取り組んでいますが、持続可能な開発目標というので、県を挙げて、県民を挙げて、さまざまな地域でも取り組んでいるわけですが、特にこういった川がなくて、昔から水をどうやって蓄え、生かしてきたか、このストーリーをきちんと伝えていく。ややもすると、今の子供たちは蛇口をひねって水を出すことしか知らなくて、当たり前のようにそれで育ってきていますので、伊江島では水がどうやって農業に使えるまで築き上げてきたかをきちんと伝えていくのは水資源を考えていく上でとてもいい教材になると思っています。

水資源、台風や、そういうときにどうしていたか。沖縄本島にも、最近は余り使われませんが、屋根の上にタンクがある、そういったものも、内地から来る子供たちは「なぜ、屋根にあるの」とびっくりしたり、そういった沖縄ではあたりまえの風景が内地からやって来る子供たちには非常に新鮮に思えたり、なぜなんだろうと、そういったものになっていくわけですね。ですから、特に水あり農業をここまで築き上げてきた伊江島のプロセス、歴史をきちんと伝えるということは、物には限りがあるという有限性を考えるという視点からも私は非常に優れていると思います。

それから、たしか民泊の活動の中には清掃活動も行われていると聞きました。実は最近、清掃活動が子供たちの修学旅行で非常に人気があるのですね。ある意味、お金を出して清掃活動をしてきているわけですよね。先週、私は熊本県の水俣に行ってきて、あそこは分別ごみを22種類にしております。この22種類の分別をする体験をわざわざお金を払って修学旅行生はやっていくわけですよね。ごみの分別が楽しいと言うわけですね。海岸の清掃活動。最近プラスチックの海洋のごみの問題もありますし、そういった清掃活動を楽しく、しっかりと学ぶ教材にしていくのも、現在、修学旅行生に清掃活動を取り入れているのも、今後もぜひ引き続きやっていただくと、環境保全、そして引いては持続可能な社会づくりに向けての一つのアクションにつながるという意味では非常に活用できるのではないかなと思いました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。結局、水がキーになるということ、その水を巡ったものが環境教育につながっているということ。それが民泊の高校生たちとも絡めていく可能性というか、現にすでにやられているところで、大いにこれからも期待できる場所ではないかと思います。

○島袋（コメンテーター） 環境保全の取組みで村からも少しコメントをさせていただきたいと思います。先ほど西江上区長から土地改良施設の清掃、土砂の除去のお話もありましたが、村として農地保全事業も大分やっております。その農地保全事業を最初に実施したところが西江上区の西部地区であります。その後、灌漑排水事業の後を追って、伊江村全体に農地保全事業、要するに水兼農道、あるいは浸透池を設置して農地の保全をやっているところです。当然、耕土の流出をとめる。以前、浸透池がないときには流出した耕土は南の海岸に流れていって、海域の汚濁につながっていましたが、農地保全事業の浸透池の整備、設置によりまして、南側の海域はほとんど大雨が降っても汚濁がない状況になっているところです。農地保全事業に最初に協力をいただいたのは西江上区にあります西部

地区でございます。そういうことで、今日は県の皆さんもいらっしゃいますが、農地保全事業は環境保全に非常に大きな役割を果たしておりますので、今後、伊江村における農地保全事業についての実施についてぜひよろしくお話ししたいと思います。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。村として取り組まれている農地保全事業についてお話しいただきました。

もうすぐ4時なのですが、4時10分ぐらいまでは延長することをご容赦下さい。もう一つ、重要な点が残っておりまして、我々、島の人たちをつなげている一つの重要なキーになっているのは村踊ではないかと思っています。これについて区長さんから。村踊というものがどのように継承されて、また世代間をどのようにつないでいるのかをお話しいただきたいと思っています。

○知念（業績発表者） 村踊ですが、島では民俗芸能と言っているのですが、平成10年に国の重要無形民俗文化財に指定されております。島は8区の行政区からできまして、昭和55年から輪番制で民俗芸能、伝統芸能を披露しております。西江上区でもこの民俗芸能の中で二才踊り、それから組踊がございまして、二才踊りも大体35演目ぐらい。二才踊りは2人から4人で構成されております。演芸時間もとても短いです。1分から、長いものでも4分、5分ぐらい、大体2分程度の踊りが多いです。それと、組踊。組踊は西江上区に二つございまして、「大川敵討」と「本部大主」というのがありますが、行政区が8区ありまして、8年に一遍、二才踊りは披露できますが、組踊というのは16年に一遍しかできない演目ですので、そういった形で継承もむずかしく、この発表会は11月にするのですが、大体5カ月から6カ月ぐらい練習期間を取って、連日連夜、公民館に皆さん集合しまして、先輩から後輩へと正確に継承を続けています。

○福与（コーディネーター） 先輩から後輩へということで、世代間のつながりが当然つくと思いますし、戻ってきた若い方々のアイデンティティーといいますか、村への帰属意識といいますか、そういったものも多分養われているのではないかなと思います。それは外から見てそういうふう思うわけなのですが、その点、実際、私と一緒にその一部をご覧になった合瀬さんから感想なりを。

○合瀬（コメンテーター） 現地視察で最初に見せられたのがこの村踊だったのです。本部から船で着いて、最初にいろんなことを説明していただけるのかなと思ったら、まずは村踊でした。20分ぐらいずっと村踊を見せられた。その事でわかったのは、むらづくり部門というのは地域の活性化じゃないですか。地域をどう活性化していくか。それには全

員参加なのですね。全員で村をよくしていこうというふうになっているかどうかを僕は一つの評価の基準として見ます。何の説明もなく村踊を見せられて、最初からポカーンと見ましたが、若い人たちが一生懸命踊って、それを高齢者の方が指導していらっしゃるわけですね。いろんな地区で村がどんどんさびれていくのはまず祭がなくなっていきます。若い人たちが少なくなって、祭りを維持していけなくなる。祭がなくなって、小学校がなくなって、運動会がなくなる。どんどんなくなって村が寂れていくということになります。そうならないために、一番重要なのは、その村の誇りというか、文化を若い人たちに伝えていくことなのです。そういう意味では、村踊にこれだけ若い人たちがいて、しかも、かなり一生懸命やっている。この村はこういう文化を背骨にしてまとまっているのだというのが極めてよくわかりました。演目も、村の昔の人が東京とか、そういうところに行って、富士山とかを見たものを村踊に取り入れられて、まさに「イーハッチャー」というか、進取的なというか、どんどん外に出て行って、そこで見たものを古い文化の中に取り込むということもやっていらしかった。私は、最初はポカーンとしていましたが、村のつながりというのはこうやってできていくものだということが極めてよくわかった出来事でありました。ありがとうございました。

○福与（コーディネーター） これは意外と地域の方々には明確に意識されていないかもしれませんが、我々外から来た人間から見ると、これが地域を結びつけているものなのだ、世代間を結びつけているのだということがわかりました。いま合瀬さんがおっしゃったように、先ほどの私も言ったように、一旦外に出て戻ってくるから「イーハッチャー」と言いましたが、そもそもこの村踊がそういうつくりになっていて、吉田兼好が出てきたりとか、あと、ホームページを見ると、結構、沖縄っぽいというよりは、大和っぽい衣装とか、鎧兜とかをかぶっていらして、なるほど、外へ出た見聞を村に持ち込んでいる一つの情報源でもあったのだなと感じました。時間がなくて、飛ばしてしまって恐縮なのですが、ここもすごく重要な点だと思います。

本来であれば、フロアの皆さんから質問等を受けたいところですが、時間がありませんので、もし時間が残ったら、フロアの方から質問を受けさせていただきたいと思いますが、今後の課題、今後の展望について、それぞれ区長さん、村長さん、それから有識者ということで合瀬委員、大島准教授から一言ずついただきたいと思います。まず区長さんから課題と展望をお願いします。

○知念（業績発表者） 私たち地域では、皆さんと共有したいということで、水あり農業

の生かし方ということで、灌漑設備を整えまして、それからまた、施設も大分整っております。自動化を進めて、労働力の軽減を図るとか、情報を共有していきたいと思っております。また、水あり農業から新しい品目も増やしていきたいとか、そういうこともやっていきたいと。公民館活動では小さい子供から老人まで、区民が気軽に集えて、行ける公民館づくりを頑張っていきたいと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。頑張っていたきたいと思います。村長さん、今度は伊江村の立場から。

○島袋（コメンテーター） 西江上区は、区の先人たちが生まれ育った西江上区に深い愛着と誇りを持って、融和、協調の精神のもとに、絶えまぬ努力で研鑽により、非常にすばらしい区を築き上げてこられました。そして、現在も区長を中心に区民が一体的に協調、融和のもとにさらにこの精神を引き継いで、それを糧に躍進に向けて取り組んでいる区でございます。そういうことで、村内8集落ありますが、西江上区の躍進が他の7集落にも波及をして、全体として伊江村のさらなる発展、躍進につながっていくと考えておりました。そういうことでは西江上区の次に向けた取組みについて村も一生懸命取り組んでいきたいと思っております。村としては、西江上区の優良事例を広く普及しつつ、村全体としての振興、発展につなげていけるように今後取り組んでいきたいと思っております。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。では、合瀬さん、お願いします。

○合瀬（コメンテーター） 実は逆、に心配しているのは、天皇杯まで取って、むらづくりとしては一種の到達点まで来たわけです。そうやって、ある種の達成感疲れとか、ここで終わってしまったのはどうしようもない。一戸当たりの農業生産額が年間160万円が1,200万円になりました。では、次の10年、どういうことを目標にやっていくのかというところが実は現地視察でよく見えませんでした。天皇杯をもらえば、全国からいろんな視察が来て、大変注目されます。ぜひこれを一つのステップと考え、今以上に、頑張っていたきたいと思います。以上です。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。大島先生、よろしくお願いします。

○大島（コメンテーター） 私は今回のシンポジウムに際して、伊江村の観光振興基本計画、2018年度から2025年度までの8年間のマスタープランがつくられていることを知りました。アクションプランが3年間で、進行中だと思うのですが、非常に立派な目標値の高いものが書かれておりました。13万人の現在の観光客を今後18万人にしたいという数字も書いてあったのですが、この基本計画をつくるときに村民向けにアンケートをしたものに

よると、実は47%の人が「今くらいがちょうどいい」というふうに答えていらっしやる。この辺が大事にしたいなという点だと思います。民泊だけでなく、スポーツやアウトドア、そしてフラワーを対象にしたイベントの開催増加により、今よりも多くの人を訪れて、賑わったほうがいいという方も44%います。そのような住民の考えがある中、たとえばこれからの民泊のあり方を検討することが求められます。先ほど40万人の修学旅行生が沖縄県に来ているという話をしましたが、これからは減少傾向です。当然、子供の数も減っていく中で、観光と教育旅行の視点からお話するのであれば、教育旅行の維持と強化が必要になってきます。そこそこの数を受入れ、教育的価値が現れるものをきちんと提供できる、特に新学習指導要領が今年から始まりますので、そういったものとうまく取り入れて、質のよい教育旅行を準備していくということです。そのうえでコンスタントに、ほどほどの人数の修学旅行生が伊江島にはやって来る、そういうのをぜひ目指していただければ、より良い形の民泊が産業化して、地域振興につながるようなものにもなっていくのではないかなと思います。教育と民泊の視点からお話しさせていただきました。

○福与（コーディネーター） ありがとうございます。今後どうするのかということと、それから量から質、いまの状況で質が悪いと言っているわけではないですが、さらに質を高めていく活動を行っていく、そういったところがアドバイスとしてなされたと思います。

お約束している時間が来てしまいましたが、フロアから、これだけは聞いておきたいという点があればご質問ください。

○会場 沖縄に10年ぐらい前に勤務していたのですが、そのころに伊江島では非常に換金作物とか、いっぱいいろんなものをおつくりになって、非常にアグレッシブに取り組んでおられたのですが、地力収奪という問題が当時起きていて、サトウキビが一番いいんだけど、サトウキビに回帰すべきではないかという声が島の中からも起きていたように記憶しているのですが、そういった問題について、ある意味、農業の持続可能性という問題、それはどのように対応されたのかというのがずうっと気になっていたのです。

○島袋（コメンテーター） 農業の安定生産に向けてはやはり土づくりが非常に肝要でして、そういう中で伊江村としては、小さい島ですから、循環型の農業の中で回していくのが大きな課題でありました。そういうことでは、製糖工場の閉鎖の問題も乗り越えて、いま日産50トンの製糖工場がJAで運営されて、サトウキビも年間5,000トンから6,000トンの生産があります。そういう中でやはり地力の増進をするためには有機肥料の確保が大切ですので、堆肥センターをつくりまして、いま村が直営をしまして、農家に堆肥を供給し、

堆肥プラス、灌漑農業、地下ダムができましたので、660ヘクタールの全面積に農業用水の確保ができて、プラス、有機肥料である堆肥をふんだんに供給して、地力を高めて、農業の安定的生産、あるいは所得向上につなげていくということで、堆肥センターの設置によってその辺の地力の減退というものには一定の歯止めをかけて、さらに地力の増進を図っていきたいというのが現状でございます。

○福与（コーディネーター） 堆肥は肉牛ですか。まだお聞きしたいこともあるかと思いますが。

○合瀬（コメンテーター） データによりますと、平成12年から平成29年の間に肉用牛の産出額が2倍に増えているのですよね。多分こういうこともかなり有利に働いているのじゃないですかね。

○福与（コーディネーター） 特産の牛の糞を地力の回復に役立てているということです。

他にもあるかもしれませんが、時間が来てしまいましたので、シンポジウム終了後に個別にお聞きいただければと思います。

それでは、まとめをさせていただきます。むらづくり部門なのですが、やはり基本となるのが、言い方を選ばずに言うと、お金が回る仕組みが必要ということです。民泊のお金が回る仕組みなどは大変参考になるのではないかと思います。それから「地元で若者戻ってこい」というのも、「これだけ儲かるんだから戻ってこい」という仕組みが基本となるということです。ただ、儲かるというだけでは、むらづくりにはなりません。やはり昔からの村踊り、そういったものが、若者同士、世代間をきっちりつなげていますし、民伯などを通して外とのつながりをつくり、今、内と外における人と人のつながりがバランス良くできているのではないかと思います。西江上区で今後課題となるのは、先程、合瀬さんと大島先生からもご指摘がありましたが、今度、コミュニティレベルで計画づくり、「これから10年どうするんだ」ということは一度話し合われたほうがいいかもしれません。計画づくりには、地元の大学の先生とかのご協力を得て、ファシリテーターとしてやっていただければと思いますので、これから計画づくりといったことにも取り組んでいただければと思います。

ということで、私の不手際で時間が伸び伸びになってしまいましたが、これでパネルディスカッションを終わらせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

（拍手）

○司会 演壇の皆様、長時間にわたりまして熱心にご議論いただきましてありがとうございます

いました。会場の皆様方も参加をいただきましてありがとうございました。

以上をもちまして、優秀農林水産業者に係るシンポジウム、閉会とさせていただきます。
ありがとうございました。（拍手）

（ 閉 会 ）

令和元年度（第58回）農林水産祭
優秀農林水産業者に係るシンポジウム

発行 令和2年5月
編集・発行 公益財団法人 日本農林漁業振興会
〒107-0052
東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル7階

TEL (03) - 6441 - 0791 (代)

FAX (03) - 6441 - 0792

URL <http://www.affskk.jp>

本資料に掲載の記事、写真の無断転載を禁じます。